

S a i n t S n o w と 無 口 の
居 候 。

七 宮 梅 雨

鹿角姉妹と無口な少年の3人による物語。

11話	「オリエンテーション合宿③」	151
12話	「オリエンテーション合宿④」	159
13話	「オリエンテーション合宿⑤」	167
14話	「オリエンテーション合宿⑥」	178
15話	「オリエンテーション合宿⑦」	189
16話	「オリエンテーション合宿⑧」	200
17話	「オリエンテーション合宿⑨」	220
18話	「オリエンテーション合宿⑩」	237
19話	『高校受験』	256
20話	「高校受験」	273
21話	『合格祝い』	293
22話	『どうしてあいつが!!』	308
23話	『3年間、よろしくね!!』	323

24話 『ラブラブするのはやめよーね』

25話 『自己紹介Part2』

26話 『やりましょう!』

27話 『無口はマネージャーに誘われる』

28話 『顧問とグループ名』

29話 『顧問爆誕』

30話 『お願いします』

31話 『【悲報】姉様はヒードランだった』

32話 『4倍弱点』

番外編

S a i n t S n o w、特撮デビューするってよ。

0 話

どうも!!七宮梅雨です!!

S a i n t S n o w 小説、2 作品目です。今回はバリバリ S a i n t S n o w
メインでやっていくので楽しんで読んで貰えたらな……と思います。

『人殺し』の次は………無口です!!(σ。▽。σ)σアッヤ

皆様は幼い頃に1度はこう思ったことはないだろうか??

動物園にいる動物は、なぜそこから出ていけないのか………ということ。

例えば、象。

1
基本的に、動物園とかだと象は檻に入れられるとき、少しでも力を入れれば引き
ちぎれるほどの細い鎖で繋がれている足枷を付けられる。

足枷を付けられた象は飼育員がそれを外すまでずっと、逃げるようなことをせずその場で待機する。

なぜ、動物園にいる象はそこから逃げようとはしないのか。

アフリカで生息している野生の象は、襲われたら命は無いと現地の人が宣言しているほど、すごく危険な生き物である。

実際、象はアフリカの中では強さだけで言ったら頂点にたつほどの強さを持っている。

普段は穏やかかそうで賢く見える象はライオンやオオカミ、ワニ、バッファローなどにも襲われても返り討ちになっているという記録もある。

そんな最強である象がなぜ、自分の足に付いている足枷を引きちぎらないのか。

いくら、動物園内で生まれ、飼育員に育てられた個体だとしても象としての遺伝子は代々と引き継がれているはずだ。足枷の鎖など容易く引きちぎれるであろう。

だが、象は鎖を引きちぎることはない。

それは、何故か。理由は簡単である。

象は鎖を引きちぎらないのではなく、引きちぎれないのだ。

それだと、先程に述べたことを矛盾しているのではないか、と知っている人もいるだろう。

正確に言えば、象は鎖を容易く引きちぎれる。

だが、象自身は自分に繋がられている鎖を決して引きちぎることは出来ないと思
い込んでいるのだ。

動物園などでは、象は幼い頃から飼育員によって鎖を繋がられる。当然ながら、
幼い故にまだパワーはない。なので、どんなに力を入れても幼い時は鎖を引きちぎ
ることは出来ない。

しかし、このまま成長していけばどこかで鎖を引きちぎれるのだが、その時点で
象は何もしなくなる。

——もう………、自分はどんなに足掻いてもこの鎖は引きちぎることは出来
ない

と、象は勝手にそう思い込んでしまい、諦めてしまう。

それが理由であるため、最強と言われている象は鎖を引きちぎることはない。

我々、人間はそうやって、昔から象のような危険な生き物を扱う際には幼い頃から『調教』して従うようにしてきた。

まだ知能が上手く働かない幼い頃から教え込ませ、それを動物にとって当たり前のことにする。

動物とは如何に単純な生き物であるということが分かる。

だが、しかし。忘れては行けないことが1つだけある。

それは、我々人間も象と同じ動物であるということである。

つまり、動物だけでなく人間も幼い頃から躰という名の『調教』をすることに
よって周りにとって異常なことが当たり前になってしまっているのだ。

それだけは、覚えておいて欲しい。

ー
ー
バキッ

『ああ………。この子は凄い才能の持ち主よ!! 流石は私の子だわ!! 次は○○しま
しよう!!』

ーーーーバキッ

『いい？子供はママの言うことだけ聞いてればいいの。分かった??じゃあ、早速○○しなさい。』

ーーーーバキッ

『こら、違うでしょ??こんなこと、ママ言っていないよね??次から気をつけてね。』

ーーーーバキッ

『ねえ。私、言ったよね??なんで、違うことやってるの??ねえ!?ねえ!?ねえ!?』

ーーーーバキッ、バキッ

『どうして○○してるの!? ママ、しろって言ったよね!? 何、自分勝手なことしてるの!? お前は私の言うことだけ聞いてればいいって言ってるだろ!! 次はねえからな!!』

ーーーーバキッ、バキッ

『ああ………良い子ね。そうよ。貴方はママの言うことだけ聞いてればいいの。そしたら、痛い目に遭わなくても済むんだから。この先、ずっとずっとママの言う通りに動きなさい。いいわね??』

ーーーーバキッ、バキッ、バキッ。

『○○しろ!! ☒☒しろ!! △△しろ!! ♡♡しろ!! ☆☆しろ!! □□しろ!! ◇◇しろ!!』
 『♪♪しろ!!』

ーーバキッ、バキッ、バキッ

『○○しろ!! ☒☒しろ!! △△しろ!! ♡♡しろ!! ☆☆しろ!! □□しろ!! ◇◇しろ!!』
 『♪♪しろ!!』

ーーバキッ、バキッ、バキッ

『○○しろ!! ☒☒しろ!! △△しろ!! ♡♡しろ!! ☆☆しろ!! □□しろ!! ◇◇しろ!!』

!!♪♪しろ!!』

ーバキッ、バキッ、バキッ

『ああ、もう!!イライラする!!お前、罰として、そうだな……………私が許可するまで……………喋るな!!言葉を出すな!!分かったな!?ったく……………使えないガキが。……………ちっ、タバコがない……………。コンビニ行ってくる。』
んぐんぐ

……………(コケ)

「ここが、天草さんのお宅なんですよね??」

「ああ。天草夏目。3日前にコンビニに向かう途中に交通事故で亡くなったそう
だ。」

「へえ……………」

「……ガチャ

「うわっ!? 汚っ!! 臭っ!!」

「これは……酷いな。随分長いこと、家事を放棄していたことが分かる。」

「ん??ここ、今、何か動いたか??————ッッ!?田中さん!!ここに子供がいます!!」

「何っ!?!……この子は確か……息子か??」

「見た感じ、かなり衰弱しています!!直ぐに救急車を呼びましょう!!」

「分かった!!」

「クソっ……………ここもダメか。」

「どうしたんですか??」

「この間、保護した天草 夏目の息子を引き取ってくれる施設が見つからんだ。運悪く、どこも満員らしくてな。」

「田中さんがそのまま引き取ったらいいいじゃないですか」

「そうしたいのは、山々なんだが……………家族から反対されてるんだよ。実際、お前も奥さんから言われてるんだろ??」

「……まあ。」

「現在は、里親募集の掲示板に彼の事を登録して探しているが……正直いって期待は薄い。」

「そうですよね……」

「しかもな、この子。少し変なんだ」

「変??」

「何を聞いても何も喋らないんだよ」

「喋らない??」

「ああ。何故か言葉を出さないんだ。発声機能には特に問題はないんだけどな」

「田中さんのことが嫌ってるのでは?? 顔とか怖いし」

「ぶっ飛ばしたいけど、本当のことだから否定は出来ない。だがな……、昨日とんでもないことがあったんだ」

「とんでもないこと??」

「昨日、あの子と2人で公園を散歩していたんだが……一瞬目を離れた隙に何かに興奮した大型犬があの子を突然、襲ってきて彼の腕を噛み付いたんだ」

「え!？」

「すぐに俺は大型犬を払い除けてから、俺は彼の腕を見た。当然ながら………血を流していた。」

「うわぁ………痛そう」

「そうだろ??痛いそうに思うだろ??だけど、あの子は………何も無かったかのよ
うな表情をしていたんだ」

「え??」

「確か、彼はまだ6歳のはず。あんな痛々しい大怪我をしたら普通ならば泣き叫んでもおかしくは無い。実際、かなり痛かったはずだ。それなのにあの子は何も言わなかった。」

「嘘でしょ??そんなことが………」

「まるで………何かに呪いがかかっているように見える」

ーーープルル

「ん??はい、長島です。………え!?本当ですか!?………はい、はい、はい。わかりました。また、後ほどご連絡させていただきます。」

「どうした!?」

「あの子を……天草 夏目の息子を引き取りたいという連絡が入ったそうです!!」

「なんだと!? 一体、誰だ!?」

「希望者は………函館のとある場所で喫茶店を開いている………

鹿角………という方からだそうです!!」

この2人は今後、出ません!!(笑)

2話目からは早速、ご対面です!!

お気に入り・感想・高評価待ってます!!

1話目 「出会い」

「今日から、僕達の家に住むことになった天草伊吹くん。2人とも、仲良くしてあげてね」

それは、本当に突然のことだった。

私、鹿角理亜は姉様である鹿角聖良と共にパパと呼ばれたため、赴くとパパの隣には男の子が1人立っていた。

まるで、雪のように綺麗な真っ白なダイヤモンドな髪型とまるで濁っているかのようになつた黒い瞳が特徴的な子だった。

一体、どうしてこの子が私達の家にいるのだろうか………と疑問に思ったら、まさかのここに住むことになるらしい。

理由を聞いたなら、大人の事情と言われ、詳しいことを教えてはくれなかった。

そんなの………反対に決まっている。理由も知らずに、他所から来た男の子と一緒に暮らすと言われても困るだけよ。

断固反対!!そうよね!?!姉様!!と、思い、隣にいる姉様をチラッと見てみるが……………

聖良「〜♪」キラキラ

ダメだああ……………。姉様、すごく嬉しそうな表情を浮かべてる。既に、母性溢れるオーラをめっちゃくちゅ放出してるう…………。

「歳は確か……………10歳だったね。理亞と同じ年だ。」

え、私と同じ年なの!?!見た感じ、歳下だと思ってたのに…………。

聖良「はじめまして。私、聖良といいます。よろしくお願ひしますね。」

あ、目を離れた隙に姉様が彼に近づいて自己紹介を行っていた。流星は姉様。コミュニケーションである私と違って初対面の人にすぐに話しかけられるところは本当に凄い。

伊吹「……………」

聖良「私は身体を動かすことが大好きです!! 貴方は何か趣味とかがありますか??」

伊吹「……………」

聖良「……………あれ??」

姉様の言葉を聞いて、彼は何も答えない。ただ、じつと姉様を見つめているだけだった。

なんで、何も答えないの??まさか、恥ずかしいとか??それもありえるわね。だって、世界一可愛い姉様だもの。照れて当たり前か。

「ああ。伊吹くんはね。とある事情で声を出すことは出来ないんだ。」

パパが思い出したかのように彼について補足を入れる。それにしても、声を出せれない??そういう病気なのかしら??

声を出せれないってことはコミュ障以前の問題じゃない。どうやって、やりとりをしていくのよ。

「それに関しては問題はないよ、理亞。別にコミュニケーションは言葉だけでやりとりするもんじゃない。文字を書いたり、音声アプリを使用したりと、他にも色々な方法はある。それに……………」

パパの言葉の途中で、彼は私達に近づく。そして……………

伊吹「……………」

彼は真顔で手を使って、何かをしていた。人差し指を曲げたり、クルクルと回し

たりして……。何してんの??

聖良「これは……。手話ですか??」

手話??手話って、耳が聞こえない人達に向けてやるやつよね??

「そう。伊吹くんは声を出すことは出来ないが、手話を使ってコミュニケーションを取ってくれる。ちなみに、今の翻訳すると『こんにちは。はじめまして』だ。」

聖良「父様も手話を??」

「基本的な所まではね。良かったら2人もこの機に覚えるといいよ」

え、嫌だよ。なんで、そんな奴のためにわざわざ、そんな面倒くさいことをしなければならぬのよ。

「それじゃあ、僕は伊吹くんを連れてこの辺りを道案内したり、ご近所さんに紹介したり、彼の家具や服を買いになどして出掛けてくるよ。2人とも、留守番よろしくね」

聖良「分かりました」

理亞「……………はい。」

パパはそう言って、彼……………天草伊吹を連れて店へと出て行った。

聖良「それにしても、嬉しいですね!!理亞!!」

姉様が嬉しそうにぎゅぎゅしながら私に話しかける。

理亞「何が??」

聖良「家族が増えるんですよ!!早く、私も彼と仲良くしたいです!!理亞もそう

思うでしょ??」
「!!!!」

ええ………………。どうして、そこまで嬉しそうな表情ができるの?? 男なんだよ?? 女の子だったらまだ、分かるのに…………。

聖良「あ、そういえば父様の本棚にあれがあったような……………」
「*タタタタ*」

姉様はそう呟いて、早足で2階の方へ登って行った。ボタンガタンと慌ただしい音が上から聞こえたあと、早足で再び私の方へ戻ってくる。

ホコリの被った本を1冊抱えながら。

聖良「ありました!! ありましたよお、理亞!!」

理亞「姉様、何それ??」

聖良「手話の本です!!」

理亞「——————ッ!?」

手話の本!?まさか、姉様……………。

聖良「早速、手話を覚えましょう!!」うん。

バン!!と持っていた本をリビングのテーブルに置いたあと、姉様はペラリと手話の本を開く。

理亞「ちょっと待ってよ、姉様!!」

姉様「どうしたんですか??理亞。」

どうしたんですか??じゃない!!この姉は何を考えてるの!?!?!??

理亜「本当に手話を覚えるつもり!?あいつのために!?!」

聖良「そうですが……………??」

理亜「どうして!?あいつは得体が知れないのよ!?不気味だし!!それなのに……………」

私の言葉に対して、姉様はニコツと微笑みながら一言だけ言葉を出した。

聖良「家族になるからですよ」

理亜「……………ツツ!?!」

姉様のたった一言で、私は身震いをしてしまった。

聖良「確かに、私たちはまだあの子の事をよく知りません。ですが、その逆も然り。彼も私たちのことをよく知らない。当たり前ですよね?? 今日、初めて会ったんです。だから、彼とはこれから先、コミュニケーションを取って互いのことを知り合わなければなりません。その方法が手話ならば、私は覚えます。私自身も彼と会話したいですね。」

理亞「……………」

姉様の言葉を聞いて、私は何も言えなくなる。普段は、可愛くてポンコツな姉様のくせにこういう時に限って核心をついてくるような事を発言してくるから、少しだけズルい。

姉様はそれからは何も言わず、本に目線を移して、ボソボソと呟いたり手を動かしたりしていた。

全く………本当に面倒くさいんだから。

聖良「ん??」

私は姉様の隣に座っていた。それを見て、姉様は目を丸くしている。

聖良「理亞??」

理亞「べ、別に。あいつのために覚える訳じゃないわよ。これから先、一緒に住むってことは店も手伝わせるんでしょ??それなら、先輩として色々と教えなきゃいけないし。姉様 1 人に負担をかけさせないためよ。」

顔に熱を感じながら目線を逸らして、そう言う姉様は微笑む。

聖良「ふふ。素直じゃないですね」

理亜「……………」アッ

聖良「じゃあ、2人で覚えましょうか!!」

理亜「……………」うん。」

こうして、私と姉様は本を読み合って2ヶ月かけて手話をマスターした。

3話目から、姉様ポンコツへと化します。

お楽しみに!!

お気に入り・感想・高評価お待ちしております

2話「中学入学式の朝」

姉様ポンコツ化計画……始動

結構年数経過してます。

伊吹が私たちの家に住み始めてから数年の時が経過した。

最初はやはり、お互いに新生活が慣れなかったためか、色々と戸惑いがあり、ぎこちない時期はあった。

だけど、1年ほどで私達も伊吹も新しい生活に慣れ、何気なく一緒に過ごせるようになった。

伊吹『おはよう。理亞ちゃん』

理亞「おはよう、伊吹。」

朝、起きてリビングに向かうと先に伊吹がテーブルに座って真顔で朝食を食べていた。

声を掛けても、未だに伊吹は喋る事はなく表情も真顔だが、手話を駆使して答えてくれる。

それに対して、私も手話を駆使して彼とコミュニケーションを取る。

最初の頃は、まだ覚えきれず、ぎこちない動きをしていたが、今ではまるで呼吸をするかのようにスムーズよく出来るようになった。

それは、私だけではない。

聖良「理亞、伊吹。おはようございます」

理亞「おはよう、姉様」

伊吹『おはよう、聖良姉さん。』

姉様もリビングにやって来て、私たちを見て手話を駆使しながら言葉を出した。姉様も同じく手話をマスターして伊吹とコミュニケーションを取っていた。

伊吹は一応、歳上である姉様を『姉さん』と呼んで本当の姉のように慕っていた。私としては、『姉様』と呼ぶようにと頑張って修正を心掛けたが、失敗してしまっ

た。
その後、3人で朝食を食べ終わってから、私は部屋に戻ってシワが1つも無い

ビシツとした制服を身に纏う。

袖に手を通したあと、私は再びリビングに行くときと同じく新品の制服を身に纏った伊吹と着慣れている制服を着た姉様の姿があった。

姉様は私達を見て、ニッコリとしながら

聖良「今日から2人とも中学生ですね。とても、似合ってますよ」

理亞「ありがとう、姉様」

伊吹『ありがとう、姉さん。』

今日から、私と伊吹は姉様が通っている地元の中学校へと入学する。

聖良「伊吹と同じ学校に通えて、私は嬉しいですよ!!」

姉様は「わーいわーい」とその場で何度も何度もバク転して万歳をする。姉様の

言う通り、伊吹はとある事情で小学校は私達が通っている所より少しだけ遠い別の小学校へと通っていた。

いつも、私と伊吹と3人で並んで通学路を歩きたいとぼやいていた姉様にとって、今日という日は楽しみで仕方がなかったのだろう。喜びをどうしてバク転して表すのが謎だが。

聖良「理亜も伊吹と一緒に通学できるようになって嬉しいですよね!?ね!?ね!?」
理亜「え!?!ちよ、姉様!?!近い近い!!」

姉様は自分の鼻が私の顔に当たるか当たらないかのギリギリの距離まで顔を近づける。姉様の天使のような顔が視界いっぱいに映って幸せな気持ちだが、少しだけ鬱陶しく感じる。

それに、伊吹と一緒に学校に通える件については確かに嬉しい気もするが、姉様ほどではない。

学校では、私はそこまで伊吹とは関わる気は無かった。それは、きっと伊吹も同じ気持ちだろう。

どうせ、多分………。私は小学校と同じように1人で過ごすことになると思う。

理亞「まあね。」

姉様の問いに、私は適当に答えておいた。それに対して、姉様は「ですよね!!」と目をキラキラとさせて言う。どんだけ、嬉しいのよ、姉様………。

聖良「それじゃあ、3人で記念写真を撮りましょう!! 本当なら、家の前で並んで立って撮りたいところではありますが、母様と父様は仕込みで忙しいです。なので、自撮りで撮りましょう。ささ、2人とも私に近寄って来てください!!!」

グイグイと姉様は私と伊吹を近付けさせ、スマホを構える。てか、姉様!? さっきもだけど近すぎじゃない!? 私の頬がもう姉様の頬に触れてるんだけど!? それは、伊吹も同じ。だが、伊吹は相変わらず真顔だった。なんなの、コイツ。

姉様「行きますよー。はい、チーズ!!」

姉様の言葉に一応、私は顔を赤くしながらもピースをする。伊吹は何故か、キツネポーズ。どうして、それにしようも思ったのよ。

だが、チーズと言われても何も起きない。

まさか……………これは……………

聖良「これは動画です♪」

やっぱり……………。何してんのよ、姉様。そんな、私たちを騙せて嬉しそうに微笑まないで。

伊吹『……………』
『ぎゅー』

ほら!!伊吹もいつもより増して、目を濁らせながら姉様をジト目してるわよ!!

謝って!!

聖良「冗談ですよ。今度はちゃんとやりますから、近づいて来て下さい。………
あ、伊吹!!嘘じゃありませんよ!?ちゃんと撮りますから!!撮りますから鞆持って
玄関に向かわないで下さい!!お願いしますう!!」

どこで鍛えたのだろうと疑問に思うほど綺麗な姉様の土下座を披露し、何とか伊
吹を戻らせたあと、同じようにスマホを構える。

聖良「今度はちゃんと撮りますからからねえ。はい、チーズ!!」

パーパーシャ

今度は、ちゃんとシャッター音が鳴り響く。

聖良「ほら、ほら………ね!?ちゃんと撮りましたよ!!」

姉様は「ね!?ね!」と撮った写真を見せながら嬉しそうにする。いや、それが当たり前だからね、姉様………。

伊吹『……………』

伊吹はやれやれ……、と溜息をつきながら、鞆を持って玄関へと向かう。ついでに、私もその隣にいる。考えることは同じようだ。

聖良「今度は、学校の門の前にある入学式の看板の前で3人並んで撮りましょう!!その時には、私の友人に撮ってもらおうようお願いします!!さあ、2人とも!!早く学校に行きますよ!!」

互いに靴を履き終わり、家を出たところで突然、姉様が私達の手を引っ張り走り出す。

理亞「ちょ、姉様!?!」

伊吹『……………』
アヤ

私と伊吹は驚きながら姉様に引っ張られる。振り払おうとして、力を入れても解くことはなかった。どんだけ、力を入れてるのよ!?

結局、私と伊吹は学校に到着するまで、姉様に引っ張られるのであった。

ちなみに、学校の門の前にある入学式の看板の前で並んだ時、嬉しそうに両手ピースしている姉様の隣には顔を青くしてグロッキーにしている私と伊吹が写っていたのと言われなくても分かるだろう。

こんな感じで、暫くはほのぼの系の話が続いていきます。
お気に入り・感想・高評価お待ちしております

3話「自己紹介」

まずはお詫びを。

私は今まで、鹿角理亜さんのことを鹿角理亜という形で執筆していたことをお詫び申し上げます。

Saint Snow大好き人間としては、絶対にやらかしてはいけない行為なので今後、このような事がないようにまた1からラブライブについて勉強をしていきますので、よろしくお願いします。

長かった入学式が終え、私たちを含めた1年生は自分たちのクラスへと向かう。1年生は全部でA、B、Cと3つのクラスに分かれ、私はCクラスなのだが……………

理亜「あ」

伊吹『……………』

伊吹と同じクラスになってしまった。

伊吹は苗字が「あ」から始まるので出席番号は必然的に1番前。なので、手前の方の扉から入るとすぐ目の前に伊吹が座っているのだ。

理亞「同じクラスね」

伊吹『そうだね』

本当は嫌なのに……………心のどこかで安心している自分がある。——って、私は何を考えてるのかしら。馬鹿馬鹿しい。

まあ、いいわ。さっさと自分の席について音楽でも聴きながら伏せていよう。

ええと……………、座席表は……………つと。ああ、あったあった。私の席は……………

……………え??

理亞「嘘でしょ??」

伊吹『……………よろしくね??』

理亞「話しかけないでよ、馬鹿。」

私の席は、伊吹の隣だった。

確かに、私も「か」から始まる苗字だから出席番号も前の方になっちゃうけど……………。

まさか、伊吹の隣になるとは思わないじゃない。

はぁ……………、気まずいわね。

?? 「よし、お前ら。席に着け。」

唐突に Bannon!! と豪快よく扉を開け、1人の女性が教室へと入ってくる。1番近くにいた伊吹は一瞬だが、ビクツツとしていた。ざまあ。

?? 「本日より、1年間、Cクラスの担任となる若本ちとせだ。ちとせん、と呼んでくれても構わない。趣味は筋トレと昆虫観察だ!! よろしくな!!」

お……………おおう。なんか、凄い人が来たわね。ちと……………せん?? 綺麗な人なのに、なんか色々と残念な気がする。

ちとせ 「早速だが、みんなに自己紹介をしてもらおう!! 私も君たちのことを知りたいからな!! 是非、あんなことやそんなことを教えてくれ!!」

45
で、出たあ……………自己紹介。私が最も嫌いなことランキング上位3位にランクインするもの。どうして、自分のことをみんなに教えなきゃいけないのか、謎の行為。紙に書いて後ろの壁に貼っとけばいいじゃない。

しかも、なんなのよ。あんなことや、そんなことって。言える訳ないじゃない!!
ちとせ「よし、それじゃあ……その白髪頭の君からだな。それは地毛か??と
ても綺麗だな!!」

当然ながら、順番は出席番号から始まるわけで……。てか、伊吹は大丈夫
なのだろうか。あいつ、喋れないし、手話しても殆どの人には伝わらないと思
し……………

どうするのよ……………。

ちとせ「ん??何だこれは??」

伊吹は席から立ち上がり、先生に1枚の紙を渡す。

ちとせ「もしかして、ラブレターか??嬉しいが、私にはもう旦那と可愛い娘が
3人もいる。だから……君の気持ちには……………」

そんな訳ないでしょう!?!伊吹も真顔だけど、少しだけ動揺してるじゃない!!

伊吹は口元に手を近づけ、ジェスチャーを行う。

ちとせ「この紙を読めばいいのか?」

伊吹『……………』コウ

ちとせ「よし、分かった。任せろ」

ちとせんの、OKサインを見たあと、伊吹は教壇の前に立って私達の方を見つめる。

「ねえ、あの子。かっこよくない?」ギョウ

「それ、思った。ジャオーズの○○君に似てるよね」ギョウ

「私……………、アタックしてみようかな」ギョウ

など、ボソボソと何人かの女子が呟いていた。まあ、確かに。あいつ、喋らないけど顔だけは何気に良いのよね……………。小学校の時もラブレターとか貰ってたし。

ちとせんは、「コホン」と咳払いしたあと紙を読み始める。

ちとせ『「僕の名前は天草伊吹です。○○小学校に通っていました。見てもらえれば分かる通り、僕は言葉を出すことが出来ません。なので、このように手話をしたり紙に文字を書いたりしてコミュニケーションを取っています。こんな自分です

が、みんなとは仲良くしていきたいです。なので、どうぞよろしくお願いします。』

ちとせんの言葉に合わせて、伊吹は手話を行い自己紹介を行った。そして、最後にペコリとお辞儀をする。すると、こんな不格好な自己紹介なのにも関わらず、色んな子が拍手をする。

ちとせん「天草。お前……立派だよ。よし、分かった!!これを機に私は手話を覚えることにしよう!!手話は覚えても損はないからな!!是非、みんなも覚えてくれ!!」

読み終えたちとせんは涙を浮かべながらそう言うと、他のクラスの子も「俺も、私も」と続けて言葉を出していく。

案外……、良いクラスなのかもしれない。

ちとせ「よし。それじゃあ、次の子。いってみよう!!」

そして、2番目の子から次々と自己紹介をしていき……………

ついに、私の番となってしまった。

やばい……………。全く考えてなかったわ。

私は教壇の前に立つ。すると、40人近くの目線が私の方に集まり、ドクンドクンと心臓が鳴っているのを感じる。

理亞「わ……………私の名前は……………」

うう……………、緊張してしまって、なかなか声を出すことが出来ない。

私の姿を見て、クラスの子は怪訝な表情を浮かべてしまってる。

ど、どうしよう……………。

ねえ……………、どうすれば良い??伊吹……………。

頭を真っ白にさせながら、私は救いを求めるかのように目の前に座っている伊吹をチラッと見る。

当然ながら、伊吹の濁った瞳と目線が合う。

すると、私の想いが伝わったのか……………。

伊吹『お・ち・つ・い・て』

理亞「—————」

伊吹は真顔ながらこっそりと手話を使って私に言葉を送る。

伊吹『だ・い・じ・よ・う・ぶ。り・あ・ち・ゃ・ん・な・ら・い・け・る・よ。』

伊吹はパッパッパッと素早く手を動かして、言葉を続ける。

ちとせ「ん??どうした、天草??モゾモゾなんかして……………。あ、トイレ??行く

か??私が連れてってやろうか??」

伊吹『……………』グウグウ

「ワハハハハハハハハハハ!!」

ちとせの言葉に、伊吹は首を豪快に左右に揺らし、それを見たクラスの子達は大笑をする。

そんな光景を見ていたら、いつの間にか緊張が解けていた。場が和んで……………安心したからかしら。

これなら……………いける。

私はしっかりとみんなの方を見つめながら、ハッキリと言葉を出した。

理亞「鹿角理亞です。好きなことはお菓子作りです。よろしくお願いします。」

私は背中から熱を感じながら顔を赤くさせ、ペコリと頭を下げる。

何も面白くもない、ただの普通の自己紹介だったが、過去にしてきた自己紹介の中で断トツに1番よく出来た方だと思う。

私の自己紹介を聞いて、パチパチパチとクラス全員が拍手をしてくれた。勿論、伊吹も。

ちとせ「ん??鹿角??お前、もしかして聖良の妹か??」

私の自己紹介を聞いて、ちとせんは目を丸くして言葉を出す。

理亞「はい、そうですが。姉様を知ってるんですか??」

ちとせ「知ってるも何も。去年、あいつのクラスの担任だったからな!!」
ええ!?!? そうなの!?!? 姉様、そんなこと教えてくれなかったわよ!?!?

ちとせ「聖良に可愛い家族が入学してくるからよろしくお願いしますって言われていたが……お前のことだったんだな。」

姉様、そんなこと言ってくれてたんだ。なんだか、嬉しい

ちとせ「私さ、1年前ぐらいにあいつにとあるDVDを貸してるんだが………」
未だに返ってきてないんだ。だから今度私に返すよう言っておいてくれ。」

何やってるんだ、あの人は。人から物を借りた時は必ず返すっていう決まりがあるでしょう!!

ちとせ「あと………、頼むから乗馬したまま教室に入ってくるのはやめてくれ、ということも追加で」

本当に何やってんの、姉様!? 学校に迷惑掛けたらダメでしょ!?

理亞「なんか………すみませんでした」

ちとせ「いいんだ。これで、あいつが改善されるなら………」

絶対に改善させるので、そんな顔しないで!! ちゃんとDVDも返しますし、乗馬したまま教室に入るのも止めさせます!!

ちとせ「まあ、いい。よし、次の子頼むぞ!!」

ちとせんの言葉に合わせて、私は席へと向かう。

その際、私は誰にも分からない程度で……

理亞『ありがとう』

と、言葉を出さず、手話だけで伊吹に感謝を述べてから席へと座った。

この時、伊吹はまさか、私からそんなことを言われるとは思わなかったのか、珍しく、普段は真顔なのに今回は目を丸くしていた。

111 Saint Snowと無口な居候……中学生編開始。

ちなみに、先生が貸したDVDは何気に今後の物語で重要なものだったり、もの
じゃなかったり……。

お気に入り・感想・高評価をお待ちしております。

4話「優しい」

『人殺し』で1万文字以上投稿してきたから、2000～3000文字ならば、すぐに書いてしまう。

だから、バシバシ執筆完了次第、投稿してきますね。

ちとせ「よし。今日はここまでだ!!明日からは、早速だが授業が始まるから用意を忘れずに!!気をつけて帰れよ!!解散!!」

自己紹介が終わり、クラス委員長や委員会などをみんなで話し合っただけで決めたあと、解散となった。

私は体育委員、伊吹は図書委員に就任した。

クラスの子達は教室の中で新しく仲良くなったであろう友達と会話したり、荷物を持って帰宅するのか、そのまま教室から出たりとしていた。

それと、同時に少しだけ苛立ちも感じる。

伊吹『oooooooooo』

女の子達に囲まれている中、伊吹は私の存在に気付き、私の方へと駆け寄る。そして、伊吹は真顔で私の目の前で手を動かす。

伊吹『理亜ちゃん。今日、買い出しと仕込みだよね??手伝おうか??』

ちよ、馬鹿。そんなことしたら……

「え、なになに??鹿角……さんだっけ??鹿角さんは手話が出るの??天草くんとはどういう関係??」

何人かの女の子の内、1番ギャルっぽい女子が私に話しかける。少なからず、嫌気を放出しながら。

理亜「えっと……」

急に話しかけられて、私は言葉を出すことが出来ない。

そんな私を気にせずに、ギャルっぽい女子は言葉が続ける。

「もしかして、天草さんと……………付き合ってるの??」

理亞「そ、そんなことはない!!」

ギヤルのこの言葉だけは、私はすぐに否定した。

ーーズキン

うっ……………、まただ。また、胸に痛みを感じた。なんなのよ、これ

「ふうん。じゃあ、別にいいよね。」

ギヤルはボソツと私の耳に顔を近づけて呟く。それを聞いて、私は思わず身震いしてしまう。

理亞「……………私には関係ないからいいわよ。それじゃあ。」

私は無愛想にそう言って、荷物を持ち、教室へと出ていく。伊吹は何かを言いたそうにしていたが、周りに女の子に囲まれてその場から動けなかった。

ーーーーズキン

理亞「なんなのよ。」

私は胸に痛みを感じながら、靴を履き替え学校から出て行った。

——パカラパカラ

聖良「あ、理亞〜」

ったく、なんなのよ。あいつ。可愛い女の子に囲まれただけでヘラヘラしちゃって!!

——パカラパカラ

聖良「理亞??」

結局………行くのかな。あの子達と遊びに

——パカラパカラ

聖良「ねえ……………理亞??」

って、何考えるのよ!! 別にあいつが遊びに行ったって良いじゃない!! 私に特に何も問題ないし!!

……パカラパカラ

聖良「りーあー」

……………でも

……パカラパカラ

聖良「理亞!!!!!!」

理亞「うわぁ!?びっくりした!!」

聖良「良かった。ようやく、気付いてくれましたね!!」

商店街を歩いていたら、いつの間にか姉様がいた。

………白い馬に乗馬しながら。

理亞「姉様………何してるの??」

聖良「馬術部の練習です!!」

63
姉様は(。・ω・。 (アッきとしながら答える。いや、確かに姉様は馬術部に
に入学してるのは知ってるけど。

ここ………商店街だよ??

理亞「何でここに??」

聖良「理亞を見つけたから、ウエンディに乗って追いかけてきたんです!! ね、ウエンディ♪」

ウエンディ「ヒヒーン♪」

ウエンディ(白い馬)は姉様に言葉を投げかけられ、嬉しそうに鳴く。

理亞「いや、ウエンディはどうでもいいんだけど………。良いの?? 部活中に学校を抜け出して」

聖良「あ………」

あ………、じゃないわよ!!

聖良「どうしましょ……。また、部員と先生に怒られてしまいます」

またってことは常習犯なのね。

理亞「ちとせんが言ってるわよ。馬に乗ったまま教室に入るのは辞めて欲しいって。あと、DVDも返せだつて」

聖良「ええ……」

理亞「ええ……、じゃない!!分かった!」

聖良「分かりました……」

姉様はコクリと頷いたあと、「学校までお願いします。ウェンデイ」とお腹を擦りながら言ってる、学校の方へと向かおうとする。

聖良「理亞」

理亞「何、姉様??」

どうせ、またくだらないことを……

聖良「伊吹は優しい子ですよ。」

………は??

聖良「ハイヤー!!」

どういうことなのか……、と聞こうとしたところで姉様はウエンディと共にパカラパカラと学校の方へと姿を消して行った。

それと同時に姉様が向かった学校の方から1つの影が私の方へと急いで向かってくる。

理亞「伊吹………。」

その影は伊吹だった。休むことなく走ってくれたのか、私の目の前に止まると膝に手をつけて呼吸を整えていた。

どうして………

理亞「遊びに行っただんじやないの??」

伊吹『断った』

理亞「……ッ……何で??」

伊吹『だって、今日……買い出しの食材の量とか仕込みする食材の量が多いじゃん??理亞ちゃん、1人だと大変だから手伝おうかなって……』

伊吹は口元を緩ませながら、手話を使って答える。

聖良『伊吹は優しい子ですよ。』

彼の姿を見て、私は姉様が先程口にした言葉を思い出す。

それは、姉様の言う通りだった。

伊吹『理亞ちゃん??』

理亞「な、なんでもないわ!! そんなに手伝いたかったら、勝手に手伝えばいいじゃない!! 早く行くわよ!!」

私は目を逸らしながら伊吹にそう言って、彼の腕を掴んで走り出した。

その時の私は、楽しそうにしていたと思う。

お気に入り・感想・高評価お待ちしております

5話 「部活動」

中学に入学してから数週間が経過し、綺麗だった桜の花びらも散って、新たな芽が芽生えてきた。

数週間も経てば、お互い初対面でぎこちなかったあの雰囲気は嘘のようになくなり、ワイワイと賑わっていた。

「ねえ、ねえ。今日、放課後タピろうよ。」

「うん!! タピろう!!」

「今日の宿題見せてくんね??」

「嫌だよ。1人でやってろ」

「そんな〜」

「バスケット部の吉田先輩、鹿角先輩に告白したんだって!!」

「嘘!? どうだったの!?!」

『私にはウェンディがいるので……』と言いながら馬に乗って吉田先輩の前から爽快に去っていったらしい!!」

「何だよ、それ!!」

私が机に伏せていると、周りから色んな会話が耳に入ってくる。

最後に男子から、色々とツツコミところが満載な内容が聞こえてきたが、聞かなかったことにしよう。

と、まあ……………、こんな感じで私は基本、学校では1人で過ごしている。

どうして??と、聞かれても、私は基本的にはあまり関わったことがない誰かと一緒にいるというのが苦手だ。

私みたいな面白いことを何一つ話せないし出来ない、あと口調が少しだけキツイ奴なんかと……………他の皆は関わりたくないに決まってる。

寂しくないか、と言われて寂しくないと言ったら正直に言って嘘になる。少しだけ、羨ましいな、と思う気持ちはある。

たけど、そこまで気にしてはいない。小学校の頃もこんな感じだったし、何より、私には姉様と……………

伊吹『ねえ、理亞ちゃん。部活、何部に入るか決めた??』

この男、天草伊吹がいる。だから、1人でいることに対しては気にはしない。

ちとせ「ええ、お前ら。今週中に入る部活を決めておくように。初めから言っておくが、この学校には帰宅部はないから、ちゃんと入部するんだぞ。幽霊部員なんて以ての外だ。」

帰りのホームルームで、ちとせんは私たちに部活動が載っているプリントを配り、部活動についての説明を行う。

ちとせ「この学校は他の学校に比べて数が豊富だからな。自分にピッタリな部活を決めるように!!ちなみに、私はレスリング部の顧問してるから興味ある奴は歓迎するぞ!!では、解散!!」

71 ちとせんは、そう言って教室から出ていく。

すると、既に入部する部活を決めてあるのか、何人かの男女はすぐ様、ちとせんの後を追うように教室から出て行った。

私は、渡されたプリントに目を通し、なんの部活があるのかを調べる。先生が言っていた通り、部活の種類は豊富で色んなのがあった。

どれに入ろうかな……………。

「理亞 ああああ!!」ハァン……!

理亞 「わあ!?!」

プリントを眺めていると、突如、目の前にある教室の扉が吹き飛び、そこから1人の女性と白い馬がクラスに乱入してくる。

犯人は姉様と、姉様の相棒であるウエンディだ。

「わわ、何だ!?!」

「馬!?!馬が乱入してきた!?!」

「何何!?!どゆこと!?!」

当然ながら、教室にいるクラスメイトはパニックへと陥る。急に、扉を突き飛ばされたと思ったら、馬が乱入してくるんだもん。驚くのも無理はない。

聖良「理亞!! 今日から部活動体験が始まるみたいですね!!」

ヒヒンと鳴くウエンディに乗りながら嬉しそうに言葉を出す姉様。どうやら、自分がやらかしたことを理解していないようだ。

理亞「あの、姉さま……………」

聖良「是非、馬術部に来てください!! 理亞なら、絶対に全国に行くことが出来ます!! 理亞にピッタリなお馬さんもいますよ!! 皆、やる気があって可愛いんです!! 更に……………」

お願いだから、人の話を聞いて!?! ヤバい、この人。妹を馬術部に勧誘するのに必死過ぎて話を聞いてくれない!!

「こらー!! 聖良 あ!! またやらかしてえ!!」

「鹿角お!! またか!! また、お前なのかあ!! 馬に乗ったまま、学校内入るなっていつも言ってるだろ おおおおお!!」

姉様が熱く馬術部について語ってる中、廊下から見覚えのある女性とジャージを着た男の人が血相を変えてこっちに向かってくる。

聖良「どうしましょう……………。部長と顧問の先生が来てしまいました!! ウェンディ!! ここは一先ず、引きましょう!!」

ウェンディ「ヒヒーン!!」

2人を見て、姉様は焦りながら教室から出ようとする。

聖良「理亞、私はいつでも待ってますからね……………ハイヤー!!」

姉様はウインクしながら私に向かってそう言ったあと、ウェンディと共に去って行った。

伊吹『僕がトイレ行ってる間に、そんなことが……………。色々大変だったんだね』

理亞「本当よ!! そのおかげで、何故か私まで先生に怒られたじゃない!!」

私はプンスカと怒りながら珍しく姉様の愚痴を零す。それを聞きながら、伊吹は

罰として課された外れた扉を直してくれていた。

ーガタン

伊吹『……………つと、こんなもんかな』

扉をはめ直した伊吹は何度も確認として扉を開閉する。どうやら、特に問題なく直ったようだ。

理亜「ありがとう、伊吹。助かったわ。私、こういう作業……………苦手なのよね」
伊吹『大丈夫だよ。気にしないで』

伊吹は意外にも器用で何でもできる。この前も、台風の影響で壊れてしまった壁を数時間で元通りにしていた。家に1人は欲しいんじゃないか、と思ってしまうほど伊吹は何でも出来てしまう。

理亜「伊吹は入る部活は決めた??」

伊吹『まだ、迷い中かな。何個かには絞ってるんだけど……………』

理亜「佐藤とか田中に誘われてたよね??入らないの??」

伊吹は手先器用の他に、運動神経もずば抜けて凄い。この間の体育のバスケットは、1人で50点以上入れてしまうほど活躍していた。

試合の最後の最後に決めたダンクは、とても鮮やかでクラス中の女子が騒いでいた。ちなみに、私もちょっとだけドキッとしてしまった。……………本当にちょっとだけなんだからね!!

それがあってか、中学でバスケットをやっていた佐藤と田中に、一緒にバスケット部に入らないか、と誘われていた。

伊吹『うーん……………、2人には申し訳ないけど、バスケットは興味ないかな』

理亜「……………へえ。」

あっさりと、否定した伊吹。彼なら、本当にインターハイを狙えると思うんだけど。

理亜「じゃあ、今のところ候補に何部があるのよ」

伊吹『んー、家庭科部か園芸部、天文部とかかな……………』

まさかの文化部なのね……。てっきり、運動神経の良い伊吹なら運動部に入ると思ってたのに……………。

伊吹『あと、馬術部』

理亞「馬術部だけは辞めて。絶対に!!」

姉様に振り回される伊吹がすぐに頭の中に思い浮かんでしまった。

それから、色々と部活動見学や体験をした結果、私はダンス部で伊吹は家庭科部へと入部した。

天草 伊吹……………家庭科部に入ったことにより、裁縫に目覚める。無口ながらも、先生や数少ない先輩、同期と仲良く部活動に励む

鹿角 理亞……………元々、ダンスには興味があったので入部。そこから、伊吹以外にも知り合いは少しだけ増えた。ダンスの才能はあるらしく、今度のダンスコンクールでは早速出場が決定。案外、楽しんでいる。

鹿角 聖良……………普段は美人でしっかり者なのに、家族に関するとポンコツ化とし、あとの事を考えずに暴走する。理亞と伊吹が馬術部に入らなかったため、1週間ほど拗ねていた。

→

こんな感じで、しばらくやっていこうかな……………と思います。

お気に入り・感想・高評価お待ちしております。

6話「メロン」

リーチリリン

聖良・理亞「いらっしやいませ〜」

ここだけの話。私達、鹿角家の実家は『茶房菊泉』という老舗の喫茶店を開いている。

営業を開始してから、なんと100年近く経過している程の、この街では歴史深い店であり、現在の店主であるパパは20代目らしい。

おかげさまで、店の評判は良く、潰れることなく繁栄している。

私と姉様は、当然ながら昔から店の手伝いをさせられている。とは言っても、私たちは嫌々でやってる訳ではなく、むしろ将来にこの店を継いで姉様と営業していきたい気持ちで行っている。

理亞「伊吹〜。小豆ぜんざい1つよろしくね。」

伊吹『……………』ツカ

そして、数年前に鹿角家に居候し始めた伊吹も店の手伝いをやらせた。

伊吹は言葉を出すことは出来ないの、接客に関しては何も出来ない。なので、キッチンや皿洗いなどの裏作業を主にやって貰っていた。

そして、現在は日曜日の午前9時。

喫茶店にとって稼ぎ時かつ多忙不可欠である休日のモーニングの時間帯だ。

なので、当然ながらお客さんが多く来店される。

なので、ホールでは私と姉様十数人のスタッフが担当し、キッチンではパパとママ、そして伊吹の3人が担当している。

「伊吹。最後の仕上げお願いできるかしら??」

伊吹『……………』コウ

「あ、これもお願いしていいかい??」

伊吹『……………』コウ

理亞「伊吹。3番テーブルの白玉ぜんざい、出来てる??」ム

伊吹『……………』ム

理亞「あ、出来てるのね!!貰ってくわ!!」

伊吹『……………』コウ

聖良「伊吹!!」

伊吹『……………??』

聖良「呼んでみただけです♪」

伊吹『……………』ぐッー

「ちょ、聖良さん!?この状況で抜けられたら困ります!!ヘルプ!!ヘルプ!!」

聖良「ああ……。仕上げは完璧ですね!!流石は私が教え込んだだけあります!!」

伊吹『……………』ぐッー

理亞「姉様ああ!!人手が足りてないって言うてるでしょ!!早く戻って来ないと今日の昼ご飯にブロッコリー追加するわよ!!」

聖良「それは、いけません!!では、伊吹。また後ほど。」

伊吹『……………』ゴッ

と、だいたいは休日のモーニングはこんな感じで忙しく営業していた。

「モーニング終了です。」

12時のレジチェックをしていたアルバイトさんが言葉を出す。それを聞いただけで、私達は安堵の息を吐く。

流石に昼となれば、お客さんの来店数は減る。常に満席だったあの状況が嘘のように、今はお客さんが2、3人お茶を飲みながら寛いでいるだけ。

「みんな、お疲れ様。もう、あがって大丈夫だよ」

昼からシフトが入っているアルバイトさん達が店内に入るのを確認したパパはモーニング時間に働いていた私達に声をかける。

「「お疲れ様でしたー。」」

それを聞いて、彼らは頭を下げ、私達に一言声を掛けてから更衣室へと向かう。「伊吹も、お疲れだったね。そのキリが着いたらあがってね」

伊吹『……………』
『アハ』

皿洗いしていた伊吹がパパの言葉を聞いて、頷く。

基本、モーニング時は伊吹は仕上げなどで、両手を作業に使っているため手話が使えない状況だ。なので、その時にコミュニケーションを取る時は彼の頷きかアイコンタクトを見てなんとかやり取りを行っている。

聖良「理亞。私達は先に着替えて昼食の準備をしましょう」

理亞「ええ、分かったわ」

姉様に声を掛けられ、私は頷く。そのあと、姉様の部屋で着替えていると……

聖良「ふんっっ!!……………ふんっっ!!」

理亞「姉様??」

姉様が何かと奮闘していた。可愛い乙女が出してはいけない声を出している。

理亞「何してんの??」

聖良「ブラが……………キツくて……………入らないん……………ですっっ!!! ふんっっ!!」

姉様はぐぬぬと歯を食いしばりながら、中学3年生にしては大きい2つのメロ

ンをブラの中へと仕舞おうとしていた。

だが、2つのメロンはブラに収まることない。

すると……………

ーーブチッ!! パァン!!

聖良・理亞「ーーーッッ!?!」ビュッ

余りにも大きいメロンに耐えきれなかったのか、ブラが弾けてしまった。弾けたブラは勢いよく宙に浮かんだ後、私たちから数メートル離れたところにぽふっと着地した。

そして、姉様の美しくて、綺麗で張りのある2つのメロンが私の目の前でゆさゆさと鮮やかに揺れていた。

聖良「……………」

流石の姉様も、この状況を見て言葉が出ないらしい。私も、この状況をどうした

ら良いのか、分からない。

けど、なんだろうか……。この敗北感は。

私は、この状況の中でふと、自分の胸を見る。

……………ぺったんこだ。

そして、未だに露わになっている姉様のメロンに視線を移す。

……………プルルンでボインボインだ。

理亞「……………」

もう一度、言おう。なんだ、この敗北感は。

……………いや、私よ。ひとまずは落ち着きなさい。

私はまだ中学1年生。つい、1ヶ月前までは黄色い帽子を被って赤いランドセルを背負っていた小学生だったのよ??

だから、気にすることは無い。気にすることなんて無いのよ。

ちなみに、ママも立派なデカメロンを持っている。

つまり、ママの血を継いでる私もあと数年すれば、ママや姉様と同じようなデカメロンに育ってるはず。遺伝子なめてんじやないわよ。

……………伊吹はやっぱり大きいメロンの方がいいのかしら。って、何でここで伊吹が出てくるのかしら。最近、風邪でも引いたかな??

聖良「えっと……………、そんなに見られると流石に恥ずかしいのですが……………」
姉様は珍しく顔を赤くし、胸に腕を当てながら目を逸らす。どうやら、ずっとガ
ン見していたようだ。

理亞「ごめんなさい、姉様。」

聖良「大丈夫です。それじゃあ、そろそろ行きましょうか。お昼ご飯作らないといけません。」*タツタツタ*

姉様はそう言って、部屋から出ていく。確かに、今日は今までより少しだけ忙しかった。だから、お腹ペコペコだ。

私も早く着替えてから……………

ん?? 着替えてから……………??

私はバツと、姉様がさっきまで居た位置に視線を移すと、綺麗に畳まれている今日着る予定の私服と、先程まで着ていた店の制服があった。

もしかして……………服着ずに部屋から出て行っちゃった!?

私はすぐに着替え、姉様の服を手にしてから勢い良く部屋から出てリビングへと向かう。

すると……………

聖良「あ、理亞。今日は焼きそばですよー。」ぎゅんぎゅん

上半身裸で焼きそばを作る姉様の姿があった。

理亞「姉様、服!!」

聖良「服??……………あ」

姉様は自分の体を見て、今、どういう状況なのか理解する。てか、気付かなかつたの!?

聖良「だから、油とかはねた時にいつもより熱く感じたのですね。」

そりゃあ、そうでしょ!!逆にそこで何で気づかないの!?!本当に姉様、中学のテスト成績で5位以内入ってるの!?!あれ、嘘じゃないわよね!?!

てか、こんなことしてる場合じゃない!!早く、着替えさせないと伊吹が来てしま……

伊吹『……………』ガッ

聖良・理亞「あ」

89
悪いタイミングで、伊吹は扉を開けて入ってくる。すると、上半身裸になっている姉様と姉様の服を持っている私の姿を見る。

伊吹『……………』

聖良「……………」

理亞「……………」

伊吹『……………』
サント

しばらくの沈黙があったあと、まるで見なかったかのように伊吹は扉を閉めた。

聖良「違うんです、伊吹!!これは、誤解です!!」

姉様の胸を見てしまった伊吹を怒りたい所ではあるが、今回ばかりは着替え忘れた姉様が悪い。

その後、私達3人はお互い気まずい中、姉様が作ってくれた焼きそばを食べてるのであった。

【自己紹介】

・天草 伊吹……………『茶房 菊泉』では主にキッチン担当。彼が仕上げする商品はどれもまるでプロが作ったかのようなクオリティで、JCやJK、JDが見ると必ずインスタに貼る。

昼食を食べにリビング出てたら、姉が露出狂に目覚めてしまったのかと、心配だった。彼自身、どうやらそこまで性に興味ないようだ。

・鹿角 理亞……………デカメロンを夢見る少女。最近、バストアップし始めたらそれを伊吹に見られてガチ泣きしたとか。まあ、近い将来はそこそこの巨乳(?)になるから安心して欲しい。

・鹿角 聖良……………我ら函館が誇るデカメロンの持ち主。昼食を食べた終えたあと、すぐに店に足を運んでブラを大量購入。伊吹が自分の裸を見たのにも関わらず、何も変わらないので、もしかしたら伊吹は不能なのかもしれないと余計な心配をしている。今日、伊吹と一緒に風呂に入らないかと誘う予定である。もちろん

ん、断られるが。

7話「怖い」

いつもに比べたら少しだけ長文。

少しだけ伊吹の過去に触れます。

ちとせ「ええ、来週の火曜日に我が校の学校行事である1泊2日のオリエンテーション合宿が始まる。配った冊子をよく目を通しておくように!!以上だ!!解散!!」
帰りのHRで、ちとせんは私達に冊子を配り、そう言うてから教室から出て行く。
オリエンテーション合宿とは、私達が通う学校の学校行事の1つで、クラスメイトの子達と親交をよりよく深めるのを目的として行われるらしい。私が嫌いなタ
イプの行事だ。

その後、他のみんなは部活へと赴く。私もダンス部の練習があるため、行かなくてはならないが、その前に冊子の方をペラペラとめくり、目を通す。

うわぁ………、どれも面倒くさそうないイベントばかりだ。特に1日目の夜に

やる予定の肝試し大会とか。

んー、仮病だと偽って休んじゃおうかしら……。こんなことしてるぐらいだったら、家の手伝いかダンスの練習していたほうが100倍マシよ。

『それは、ダメですよ。理亞。』

……………ん??なんか、頭の中で頭の上に金色の輪っかを浮かばせて白いビキニを着ている姉様が現れたんだけど……………。なんで、ビキニ??

聖良(天使) 『私は天使の聖良です。理亞、貴方は友達を作りたいという気持ちがあります。ながらも、それをクラスの友達に打ち明けずに過ごしていることを私は知っています。なので、この合宿を機に話しかけてみてはいかがでしょうか??理亞ならきっと、良き友達を作ることができます!!』

天使の姉様は母性溢れる優しい声で私に言葉を出す。なんだろう……………。それを聞いて自分の心が温かくなるのを感じる。合宿……………参加しようかしら。

『いいや、休むべきです』

……………んん??今度は、頭に角と腰に黒い尻尾を生やして、黒いビキニを着た姉様が現れたんだけど……………!?!。だから、なんでビキニ??

聖良（悪魔）『私は悪魔の聖良です。理亞、その合宿がもし、無駄だと思ったら絶対に休むべきです。無理に友達を増やす必要はありません。今現在、貴女が友達と呼べる子達を大切にしていきましよう!!それに、理亞がいないと家や部活にも迷惑がかかってしまいます!!』

悪魔の姉様はウヒヒと不気味（だが、可愛い）に笑いながら私に声を掛ける。確かに、姉様（悪魔）の言う通りかもしれない。無理に友達を作ったところで、多分、関係はそんなに長くは続かない気がする。やっぱり、休んじやおっかな。

聖良（天使）『貴女、一体何を言っているんですか??勝手なことを言わないで下さい。理亞は合宿に参加するべきです!!』

聖良（悪魔）『貴女こそ、勝手なことを言わないで下さい。私は今後の事を踏まえて理亞に警告しているのです。なので、理亞は合宿を休むべきです!!』

頭の中で、天使の姉様と悪魔の姉様が睨み合って討論をし始めちゃった。ちよ、ちよっと。やめて!!

聖良（天使）『理亞はですね、いつも齋藤さんが朝、昨日あったことを話しているのを、さりげなく聞いて、とても羨ましそうにしているんです!!合宿を機に、齋

藤さんと良き関係を築き上げるチャンスなんです!!』

何で知ってるのよ!? やめて!? なんか、とても恥ずかしいから!!

聖良(悪魔) 『それがなんです?? 理亞はですね、同じクラスの山谷さんがクラスメイトの悪口を陰で言ってる、それを偶然聞いてしまった理亞は心を痛めてしまったんです!! もしかしたら、自分の悪口も言われているかもしれない……と、いつも不安になってるんですよ!? そんなことになるぐらいなら、作る必要はないです!!』
どうして、それも知ってるの!? もう、本当にやめて!! 恥ずかしくて、死んでしまいたいから!!

私は顔を赤くし、背が熱くなっているのを感じながら立ち上がり、荷物を持って教室へと出る。

もう、とりあえず参加するかしないかについて考えるのはやめよう。

そう思い、ダンス部の部室へと向かうのだが……………

聖良(天使) 『参加すべきです!! 今後の理亞の為にも!! …… チェックメイト!!』
『サッヤーサッヤー』

聖良(悪魔) 『いえ!! 休むべきです!! それこそ、理亞の今後の為になると思いま
す!! …… ぐぬぬ』サッヤーサッヤー

あ、まだいるのね……。てか、私の頭の中で口論しながらチェスしないで。

この後、ダンス部の練習が終わるまで私の頭の中で空想の姉様達は口論し続け、
いつの間にか消えていた。

次の日の放課後、1年生はオリエンテーション合宿が近くなっているということなので、ダンス部の練習が1年生だけ休みになってしまった。

私はそんな必要はないと主張し、参加させてもらおうように先輩達に頼む。

しかし、先輩に合宿に持っていく荷物で足りないものがあつたら買いに行きなさい。その為の休みです。と言われてしまい、部室から優しく追い出されてしまった。足りないものなんて………普通にあるわね。

歯ブラシセットと持参用のシャンプーとトリートメントが無かった気がする。

仕方がない。ここは先輩たちの言葉に甘えて買いに行くことにしよう。

そう思い、下駄箱の方まで行くと

聖良「理亞」

理亞「姉様」

姉様が下駄箱の前に立っていた。そして、私の姿を見て、微笑みながら手を振る。

理亞「どうして、ここに??」

聖良「今日の買い出しをですね。少し手伝って欲しいと思ひまして……」

理亞「伊吹は??」

聖良「伊吹にも声を掛けようと思ったのですが……、探しても見当たらなくて。下駄箱を見たら靴がもう変えられてたので、もう帰ったんだと思います」

伊吹め……。何勝手に早く帰ってるのよ。

聖良「お願いしてもいいでしょうか??無理なら無理で全然いいんですけど……」。

理亞「いや、大丈夫よ。姉様。私も買い物に行く予定だったし。」

聖良「本当ですか!?!それは、良かったです。お礼に1つ好きなお菓子を買ってあげますからね♪」

理亞「あ、ありがとう……」。

姉様にとって、まだ私はお菓子をあげると喜ばれると思っているのだろうか??
まあ、普通に嬉しいけど。HARBOにしよう。

それから、私と姉様は並んでショッピングモールへと足を運び、食品コーナーへと向かう。

途中、歯ブラシセットと持参用のシャンプーとトリートメントが置いてある棚を

見つけたので、私は姉様に声を掛ける。

理亞「姉様、先に私の買い出しだけぱっと終わらせてきていいかしら?? すぐに終わるから………」

聖良「分かりました。こっちは食材選びで時間がかかると思うので全然大丈夫ですよ。」

理亞「ありがとうございます。じゃ、行ってくるわね」*タタタタ*

姉様とひとまず分かれ、私は歯ブラシセットとシャンプー、トリートメントが置いてあった棚へと早足で向かう。そして、何事も問題なく、目的の物品を手にしてレジの方へと行く。

「ありがとうございました」

101
よし。これで、私の買い出しは終わりね。すぐに姉様の所へ戻ろう。

理亞「……………ん??」

姉様の所へと戻っていると、道中にあった玩具コーナーにて見知った白髪頭の男が視界に入る。

うん、伊吹だ。どうして、ここに??

あ、よく見たら伊吹の手には買い物袋がぶら下がっており、中から歯ブラシセット的なものが見える。

きっと、伊吹も私と同じようにオリエンテーション合宿の持ち物で足りないやつを買いに来たのだと分かる。

それにしても、ずっと何かを見てるわね。何を見てるのかしら。

伊吹が見ている方に視線を移すと……………

“ 仮面ライダー変身ベルト。DXゲームドライバー”

伊吹『……………』グー

えええええええ!?まさかの仮面ライダーのベルト!?嘘でしょ!?

私は余りにも驚愕すぎて、口をあんぐりとさせてしまう。

普段、伊吹は部屋に籠っていることが多いからあいつが何が好きで何が嫌いなのかは余り分からないでいたけど……………。

ちよ、えっ……………ええ……………(困惑)。なんか、知ってはいけないものを知った気がする。

伊吹『……………』カ

伊吹はポケットから財布を取り出して中身を確認し始める。まさか……………嘘よね

??だって、もう中学生なのよ??

伊吹『……………』ヤーン

めっちゃ悩んでる!! 顎に手を付きながら財布の中身を確認してめっちゃ悩んでる!!

伊吹『……………』チラチラ

伊吹が周りを見始める。周りに知人がいないかを確認するためかしら?? 私は咄嗟に隠れる。

伊吹『……………』ム

周りに誰も居ないのを確認した伊吹はもう一度、ベルトの方へと視線を戻す。買わないよね??

伊吹『……………』ガッッ…、タッタッ

理亜「いや、買うんかい!?!?!」

伊吹『……………』ビクッ

結局、購入するのを決意したのか、伊吹はベルトを持ってレジの方へと向かうのを見た瞬間、私は思わず声を出してしまった。

当然ながら、伊吹は私の存在に気付いてしまい……………

伊吹『……………』

理亞「……………」

お互い、気まずい状況へとなってしまった。

理亞「だから、ごめんって」

あれから、伊吹はベルトの購入を断念し、姉様の買い物を手伝ってくれるそうなので2人で姉様の所へと向かっているのだが……

伊吹『……………』

伊吹は両手で顔を覆っていた。きっと、自分が変身ベルトを購入しようとした所を知人……いや、それ以上か。同じ屋根の下で暮らしている同居人に見られて恥ずかしくなっているのだろう。

理亞「みんなには内緒にしておいてあげるから………ね??」

伊吹『……………』

励ましの言葉を送っても、伊吹は反応しない。

なんだか、こういう姿の伊吹をあまり見ないから新鮮ね。少しでも可愛いかも。だけど、そろそろ立ち直ってもらわないと食品コーナーへと着いてしまうわね。伊吹には申し訳ないけど、少しでもキツく言おう。

理亞「ねえ、伊吹。そろそろ」

「何度言ったら分かるの!!!!!!」

理亞「oooooooooo!!」どッ

突然、誰かの大声が響き渡る。

聞こえてきた方に顔を向けるとそこには、明らかに怒っているであろう1人の女性とその女性の娘らしき女の子がビクビクと震えていた。

「全く!!アンタって子は!!どうしてそんなことをするの!!ママ、それ許可した!?してないよねえ!?!」

母親らしき女性はここが公共の場であることにも関わらず、声を張って女の子を責める。

「だ、だって……………」

「だって糞もない!!アンタはママの言う通りになればいいの!!分かった!？」
うわぁ…………、ああいう親、いるわよね。どうして、自分の大切な子供にあんな
こと言えるのかしら。神経を疑うわ

理亞「嫌よね、ああいう親」

伊吹『……………』

理亞「伊吹??」

「ふえ……………」
ヒクヒク

女の子は泣き始めてしまった。

「泣くんじゃないわよおおお!!」

それを見た女性は、怒りで我を忘れたのか発狂しながら女の子に目掛けて手を出そうとする。

私は思わず、その場で目を閉じてしまった。

ーーーーーパン!!!!

目を閉じて、すぐに叩かれたであろう音が響き渡る。

私は恐る恐る目を開けると……………

理亞「ーーーーッ!?」

そこには信じられない光景が広がっていた。

「何よ……………アンタは……………」

伊吹『……………』

片方の頬を赤くし、女の子を庇うように多いながら伊吹は女性を睨みつけていた。

「え?え?……………え?」

女の子は突然の出来事で唾然していた。それは、私も同じ。何してるのよ、あい
つ!!

「アンタ一体、なんのつm……………」

伊吹『……………』ヤッ

「……………!？」

伊吹は凄い形相で女性を睨みつける。ただでさえ、濁っている瞳が更に濁り、鋭い目線が女性を貫く。それによって怖気付いてしまったのか言葉が途中で切れた。数年間、一緒に暮らしてきて少なくとも1度も見たことは無い伊吹の姿に私は震え動けなくなってしまう。

怖い……………。

この感情のせいで、止めたくても止められないでいた。

伊吹『……………』タッ……………タッ

伊吹は睨み付けながら、女性の方へと近づく。

そのまま、彼女に手を出してしまいそうな勢いだ。

やめて!! 伊吹!!

そう言おうとしても恐怖で声を出すことが出来ない。

そして、そのまま伊吹が女性の前に辿り着こうとした所で………

ーーーーガシッ

「辞めてください、伊吹」

伊吹・理亞「ーーーーッ!?」

1 人の女性が伊吹の腕を掴んで止めさせる。おっとりとした穏やかな表情が特徴的でサイドテールにしている私が最も尊敬してゐる人である……………

聖良「伊吹。そんなことしたら、聖良姉さんは悲しいです。勿論、理亞も同じ気持ちだと思います。」

姉様である……………鹿角 聖良が悲しそうな表情を浮かべながら伊吹の腕を掴んでいた。

伊吹『……………』

姉様の言葉を聞いて、伊吹は私の表情を見る。きっと、今の私の顔は涙で酷いも

のだろう。

伊吹『……………』ムン

伊吹は力を弱めて、その場で足を止めた。それを確認した姉様は女性の元まで行き、

聖良「うちの家族がご迷惑をかけてすみませんでした。これ、良かったらどうぞ。せめてのお詫びです」

姉様は女性に頭を下げたあと、店のクーポン券を女性に渡した。悪いのは、ほぼ女性の方なのに……………。

聖良「理亞、伊吹。もう今日は、帰りましょう。買い物は夜、行くことにします」

理亞「……………はい」

伊吹『……………』ユカ

その後、私たちは何も話さずに帰宅した。

どうして、伊吹があんなことをしてしまったのかは分からない。

けど、一つだけ分かることは確実に過去に何かがあったはずだ。

だけど、聞けない。なぜなら、怖いから。

この日以降、私は伊吹に声を掛けることが出来なくなってしまった。

そして、そんな状況が続く中、オリエンテーション合宿が始まってしまった。

自己紹介

・天草伊吹……実は大の特撮大好き少年である。密かに仮面ライダーの玩具は購入しているがベルトだけは管理が大変なのと聖良と理亞にバレたくないため、買わないでいた。しかし、欲望が抑えきれずに本格的に買おうとしたところで理亞にバレてOrzとなる。女性と娘のやり取りを見て、何を思ったのかは謎だが、聖良が止めるまでは本気で女性をぶん殴ろうとしてた。その後はナイーブ状態へと陥る。

・鹿角理亞……相変わらず学校行事を嫌う。頭の中では天使の聖良と悪魔の聖良が生息しているのを確認。伊吹が特撮好きと知って内心、少しだけ馬鹿にしてる。豹変した伊吹の姿を見て以降、伊吹に話しかけるのが怖くなってしまふ。

・鹿角聖良……ポンコツにて有能な鹿角家長女。因みに、伊吹を止めた時、内心かなりビビってたのはここだけの話。

高校生編で今放送しているゼロワンにしたかったため、3年前に放送していたエグゼィアにしております。ご了承を

8話「オリエンテーション合宿①」

オレがブカデス。

お気に入り100件突破致しました!!ありがとうございます!!

オリエンテーション合宿編の始まりです!!

オリエンテーション合宿当日。

私はベットから起き上がり、目を擦りながらリビングへと向かう。

今日の天気は雲ひとつないお天気日和の快晴のはずなのに、心がスッキリとしない。いや……………、それは今日に限らず数日前からか。

以前のショッピングモールでの出来事以来、私は伊吹とは何一つ会話をしていない。

伊吹のあの姿、行動を目にしてしまった私は彼に話しかけようとしても、どうやって話しかければいいのか。また、話しかけたとしても何を話せばいいのか、全

く分からないまま数日が経ってしまっていた。

それに、伊吹も気まずさを感じているからなのか、私の前から余り姿を見せなくなった。家では部屋に引きこもる時間が長くなったし、学校でも昼休みや放課後になった瞬間に教室から出て行ってしまおうようになった。

今までは、何気に一緒にいたのに最近は隣にいないから少しだけ寂しく思えてしまう。

理亞「おはよう………」*カヂヤ*

聖良「おはようございます」

リビングに入ると、姉様がお茶を飲みながらテーブルの席へと座っていた。伊吹の姿はやっぱりない。

理亞「伊吹は??」

聖良「父様と一緒に店の開店準備をしています。終わり次第、学校に行くみたいです。」

私は「そっか………」と、眩いてから席についてテーブルに置いてある朝ご飯

に手をつける。

聖良「あれから……………伊吹とは話していないんですか??」

しばらく、お互いに沈黙の時間が流れていたが、姉様がお茶を飲みきった所で口を開いた。

理亞「うん……………。やっぱり姉様も??」

私が言葉を出すと、姉様は悲しそうな表情を浮かべながら頷く。

聖良「……………はい。一緒にお風呂に入ろうと誘おうとしてるのですが伊吹の姿が見当たらなくて……………」

理亞「そう……………」

このナイーブな気持ちのせいで、姉様のポンコツ発言に対してツツコミを入れる余裕がない私はそのまま受け流し、朝食のお皿を流しへと持って行く。

聖良「理亞、お茶飲みますか??」

理亞「ごめん、姉様。時間がないから遠慮しておくわ」

今日はオリエンテーション合宿の関係でいつもより集合時間が早い。なので、姉様のせつかくの誘いを断り、歯磨きをし終えてから私は自分の部屋へと向かう。

ーーーガラガラ

その際、玄関の扉が開き、誰かが家から出ていく音が聞こえてくる。恐らく、伊吹だ。今日も1人で先に行ってしまった。

なんだか、寂しい気持ちを抱きながら私は冊子を見ながら荷物の最終確認をパッと終わらせ、玄関へと向かう。

すると、歯ブラシで歯を磨いている最中の姉様が玄関前に立っていた。

理亞「姉様!! 行ってくるわね!!」

聖良「はい、行ってらっしゃい!!」*カキカキ*

靴を履き替え、扉に触れようとしたところでーーー

聖良「理亞」*カキカキ*

姉様に声を掛けられる。

理亞「何、姉様??ごめんだけど、時間が……………」

聖良「伊吹のこと、よろしくお願いしますね。」カジャカジャ

理亞「……………ッッ!!!!!!」

姉様の言葉で、私は衝撃を受け、身体を硬直させてしまう。

一体、どうしてそんな事を言ったのか、理由を聞こうとしたら、姉様は洗面台へと向かってしまった。

理亞「あ、ヤバい!!本当に遅れちゃう!!」タタタタ

洗面台まで行き、姉様の言葉の意図を聞きたいところではあるが、本当に集合時間まで時間が無いことに気づいた私はすぐに扉を開けて家へと出ていく。

聖良『伊吹のこと、よろしくお願いしますね。』カジャカジャ

走りながら学校へと向かっている途中に姉様の言葉が頭の中にこだまとして繰り返し流れ込んでくる。

本当にどういう意味なのか、理亜は分からないまま走り続けた。

ちとせ「よし。それじゃあ、Cクラスからバスに乗ってくれ」

なんとか、ギリギリ間に合った私は1年生の子達と一緒に先生や校長の話や注意事項を聞かされたあと、ちとせんの誘導に促されてバスの中へと入っていく。

バスの席順は事前に知らされているため、私達はその場所へと座り出す。運が良いか悪いのかは分からないが、伊吹とは隣ではない。

彼の隣は八代さんというクラスで上位カーストへと降臨しているあのギャルの子だ。嬉しそうな表情を浮かべている。

それに対し、私の隣は上野さんという、私と同じで基本、1人で過ごしている女の子だ。あまり関わったことはない。

上野さんが窓際に座り、私とその隣へと座る。

……………ん??あれ??

理亞「上野……………さん??……………大丈夫??顔色が悪いみたいだけど。」

先に座っていた上野さんの顔を伺うと、明らかに彼女の顔色が悪かった。体調不良だろうか??

「ごめんなさい。ちょっと……………女の子の日が来ちゃって」

なんと。それは大変ね。女の子の日は確かに最初辺りは体調が優れなくなってしまう。女の子にしか分からない辛さね。

これは、流石に先生に言った方が良いわよ……………ね??

理亞「先生。」

ちとせ「何だ?? UNOか?? 先生、強いぞー。」

ちとせんはそう言って、鞆からUNOを取り出す。何で、そうなるのよ。

理亞「違います。上野さんが体調悪いようで……………」

ちとせ「体調が悪い??……………ああ、なるほど。察し理解。」

私の言葉で、ちとせんは上野さんの顔を見たあと、状況を理解したのか、すぐに上野さんをゆっくりと立ち上がらせて前の方へと連れていく。

流石は長年、ここの学校の先生をやっているだけはある。動きが職人並みに慣れているように見える。

ちとせん「んー。上野の場所を変えらるとなると、誰かと席を変わらなくてはならないな。

よし、天草。お前、鹿角の隣に行け」

理亞・伊吹 「『……………ッッ!!???』」

……………嘘でしょ??

因みに、作者は男なので女の子の日の辛さは知りません。股間を蹴られた時の痛みなら男子なので語れます。(何言ってるんだ、こいつ)

今回は自己紹介はお休みです。

あと、姉様のポンコツシーンも暫くお預けです。ご了承ください。

お気に入り・感想・高評価お待ちしております!!

9話「オリエンテーション合宿②」

キリを良くしたいため短めです。

あと、評価に色がつきました!!しかも赤!!ありがとうございます!!これからも無口をよろしくお願いします!!

理亞「……………」

伊吹『……………』

伊吹が上野さんに変わり、私の隣に座ってから、どれくらいの時間が経過したのだろうか。

バスは、今、高速道路を走っている。さて、バスの中ではバス内に設置されているテレビでディズニー作品の映画が流れていて、みんなそれに夢中だ。

だが、私は映画なんて見る気ないし、見ていたとしても内容は頭の中に入っていない。なので、ずっとスマホを手にしてダンスの動画を見ている。

それは、伊吹も同じ気持ちなのか、彼は窓側の方に顔を向けて、ずっと空の景色を眺めていた。

話しかけたいところではあるけど……、やっぱり以前のやつを思い出してしま
い中々、口を開くことができない。

ふと、伊吹の方に視線を移すと、同じタイミングで伊吹もこちらの方にチラッと
視線を移す。

理亞・伊吹「『……ッッッ!?』」

目が合った瞬間に、私達はすぐに顔を逸らす。何なのよ、これ……………。

そんな感じできこちない時間を過ごしているとバスが途中、トイレ休憩というこ
とで、パーキングエリアへと止まる。

バス内にいた何人かはトイレに行ったり、購買に行ったりとバスから出ていく。
私もお手洗いにきたかったので、バスから降りて、女子トイレへと向かう。

中に入ると、誰もいなくガランとしていた。どうやら、私が一番乗りらしい。まあ、いいや。と思った私はササツと個室トイレに入って下着を脱ぎ、催そうとした所……

「—————」

「—————」

個室の扉の外から声がキャツキャと聞こえてくる。何人か、女子トイレに来たよ
うだ。

それに、この声………なんか、聞き覚えがある。

「あー、本当にうっぜんですけど」アッせ

理亞「—————」
「ビュッ」

この声は……………八代さんだ。扉越しでも分かるほど、不機嫌のように見える。何か叩いてるし……………。

「まあまあ。落ち着きなって八代ちゃん。」

「落ち着けるわけないでしょ!!折角、バスの中で天草くんの隣に座れると思っただのに!!上野のやつ、ここで生理とかマジでありえないんですけど!!!」アッ

キーン

八代さんは壁か何かを何度も何度も叩きながら大声で叫ぶ。

なるほど。元々、八代さんは伊吹の隣に座るはずだった。なのに、上野さんと入れ替わる形になってしまったから怒っているんだ。八代さんは伊吹のことを本気で狙っているみたいだし……………。

「それと、鹿角。あいつも気に入らない」

理亞「……………ツツ!!??」

突然、私の名前を呼ばれたため、無意識に私は息を呑み両手を口に当ててしまう。

この流れ的に何となく分かっていた。彼女達の口から私の名前が出てくるのを。

だけど………、改めてこうやって名前を呼ばれてしまうと、心が苦しくなる。

「あいつもさー、何で先生に言っちゃうかな。いいじゃん、放っておけば。生理ぐらい。本当にうぜえんだけど」

………やめて。

「少し天草さんと仲が良いからって調子に乗りやがって。あんなの、どこがいいのよ。ぼっちで弱々しいのに。私の方が100マシだわ」

………やめてよ。やめてったら

「あーあ、萎えるわー。マジで上野と鹿角のやつ………」

………やめて!!それ以上は言わないで!!

「死んでしまえばいいのに………」

私は彼女達の残酷な陰口をただ歯を食いしばり、涙を流しながら聞いていた。

彼女達がトイレから出ていった後、私はヨロヨロとしながら個室から出る。少しでも力を抜いてしまったら膝が床に付いてしまいそうだ。

伊吹含め周りから悟られないように私は顔を何度も洗う。何度も何度もバシャバシャと水飛沫が跳ね上がるまで洗い続けた。その後、トイレから出る。

できれば、バスに戻るまでは誰とも会いたくはないのだが………。

伊吹『—————』

うん悪く伊吹と出くわしてしまった。彼の手にはお茶やらお菓子やらが入った袋がある。購買で買ってきたのだろう。

それに、よりによって伊吹に見られるのはヤバい。クラスメイトならともかく一緒に暮らしているこいつならば、私の心情に気付くかもしれない。

悟られるな。察しられるな。

とにかく、私はすぐに顔を逸らしてバスの方へと向かう。

あいつが私の顔を見たのはたった数秒。これならばギリギリ大丈夫だと思う。よし。このままバスへ……………

————ガシッ

理亞「……え??」

途中、背後から腕を掴まれる。掴んだのは当然ながら1人しかいない。伊吹だ。相変わらず真顔で私の顔を見つめる。

そして、濁った目線で私にこう訴えかけてくる。

「……何かあった??……………」と。

こいつは、たった数秒の間に私が普段とは違うと分かったというのか。

理亞「何も無いわよ。」

私は動揺しているのを伊吹に見られたくないため、腕を振り下ろしながら無愛想に答える。そして、バスの方へと向かった。

その時、今までに感じたことがない以上に心が痛かった。

そして、私はそれに苦しんでいることに気にし過ぎて、背後から鋭い目線で私を見つめる伊吹の存在には気付かなかった。

次回、合宿先の施設到着!!

お気に入り・感想・高評価お待ちしております

10話 「オリエンテーション合宿③」

カレーライス作る話は次回に持ち越しです。

早とちりしてすみませんでした。

学校から出発して約2時間ほどが経過してようやくバスはオリエンテーション合宿で1泊2日を過ごす施設へと到着した。

場所は意外に森の中にある施設であり自然が視界いっぱいに溢れていて空気が澄んでいて美味しい。

今、トイレ休憩の件で調子が優れない私にとってはちょうどいい環境かもしれない。実際、さっきより大分落ち着いてきている。

因みにトイレ休憩以降、私は持参したアイマスクを目に装着して寝るふりをしていたため、余り関わらなかった。

これ以上……、伊吹に悟られる訳には行かない。なんとか、顔を見られないようにしなくては。

ちとせ「よし、お前ら。A、B、Cという順で進んで行くから先頭にいる奴はBクラスの奴に続けて進めー。」

ちとせの言葉により、Cクラスの先頭である伊吹はBクラスの1番最後の子に追うような形で歩き出し、他のCクラスの子も伊吹に続く。

それにしても、今、歩いている坂の傾斜が結構キツイわね。普段、鍛えている私にとっては何事もなくヘッチャラだけど、あまり運動しない子達にとっては厳しいんじゃないかしら。

「ぜえ………ぜえ………。」

と思った矢先に、隣に歩いてきた子が顔を赤くして息を切らしている。確か………紀平さんだったかしら。偏見で申し訳ないけど、見た目的に運動が余り得意ではないタイプに見える。

話しかけた方が良いわよね?? 紀平さんも、上野さんと一緒にあんまり話しかけたことがないから声を掛けづらい所はある。

だけど、見た感じ相当苦しそうに見えるから見逃したら可哀想だ。

理亞「あの……………紀平さん」

「鹿角さん??」セ、セ、セ

理亞「荷物……………も、持とうか??」

「え??」

私の言葉に紀平さんは目を丸くしてしまふ。ヤバい……………、少し踏み入れすぎちゃったかしら!?

理亞「いや、嫌だったら別にいいんだけど……………。ちょっと苦しそうに見えたから……………体力ある私が紀平さんの荷物持った方が少しでも負担が減るかなって思っ……………。あ、ごめんね。急に話しかけちゃって。」

顔を赤くして早口で私は言葉を出すと、紀平さんはニコツと微笑んだあと、荷物を私の方に差し出す。

「お願い……………してもいいかな??」

理亞「ooooooooん!!!!!!」

私はコクリと頷いたあと、彼女から荷物を受け取ろうとした瞬間

「天草ooooooooん!!!!!!」ダダッ

ooooooooんッ!!

理亞「あoooooooo」

背後から猛スピードで駆け出てきた八代さんが私の肩に思いっ切りぶつかる。それによって、手を滑らせ紀平さんの荷物を手放してしまった。

理亞「しまoooooooo!!!!!!」

ここは傾斜が急になっている坂道。こんな所で落としてしまったら紀平さんの荷物が転がり落ちてしまう。

私はすぐに荷物を掴もうと手を伸ばした所

「ひまあ」「ひやんや

理亞「……………ッッ！！！」

背後から突然、八代さんの声が笑い声と共に耳に入ってくる。それによって、私は身体を動かすことが出来なかった。

この人……………、もしかして、わざとぶつかってきた??

信じたがいことではあるけど、恐らく間違いいはない。実質、八代さんは私のことを嫌っている。

この嫌がらせをすることによって、伊吹に私の無様な所を見せようとしているんだ。

ただでさえ、伊吹との関係はギクシャクとしてるのにこんな所、あいつに見られる訳にはいかない。

私はすぐに荷物を追いかけようとするが、時すでに遅し。荷物が地についてしまいい既に転がり落ちてしまっている。しかも、運が悪く背後にいる人達は雑談していてそれに気付いていない。最悪なパターンだ。

早く手にしないと重心がかかってしまい転がり落ちるスピードが更に上がってしまう。

私は転がり落ちてる荷物のを全力で追いかける。

「えっ!?!速っ!!」

背後にいるクラスメイトを通り過ぎる時、誰かそう呟いた。

そんなことはない。50秒メートル走を6秒前半で走れるぐらいの速さだ。姉様や伊吹なんて5秒を切ってしまう。私なんてあの二人に比べたらまだまだだよ。

そして、スピードが上がる前に私は紀平さんの荷物まであつという間に追いつき
掴み上げる。良かった……………。

ギギギ!!! と全力で摩擦でブレーキをかけるように足元に重心を掛け、減速
させる。

その後、くるりと身体を捻らせながら振り返り、紀平さんの荷物を肩にかけて坂
道を登る。

数分で紀平さんの所まで戻った私はすぐに申し訳なさそうにして頭を下げる。

理亞「ごめんなさい、紀平さん。荷物落としちゃって……………」

私が頭を下げるのを見て、紀平さんは驚いたのか「えええ!？」と声を上げる。

理亞「私のせいで…………お弁当とか台無しにしちゃった……………」

荷物の中には昼食用にお弁当が入っているはずだ。だけど、転がり落ちてしまっ
たことによって中身がぐちゃぐちゃになってるはずだ。

「大丈夫、大丈夫!! 今日の弁当はおにぎりだけだから!!……………ほら!! 少し形がべ
ちゃんこになってるけど食べれるから!!」

紀平さんは鞆の中を漁り、凹んだおにぎりを私に見せつける。なるほど。確か

に、食べれないほどではない。

「それに、ありがとうね!! 私のために拾ってくれて!!」

え、ええ?!? どうして私がお礼を言われるの?!? 私のせいで転がり落ちてしまったって言うのに……………!!?

けど、なんだろう……………。悪い気はしないわね。

「それにしても、鹿角さん。凄い足の速さだったね!!」

紀平さんが少し興奮気味でグイグイと話しかける。パーソナルスペースって知ってるのかしら。凄い近いんだけど……………。

理亞「そ、そう??」

「うん!! とってもかっこよかったよ!!」

理亞「あ、ありがとう。てか、疲れてるんじゃないの??」

「理亞ちゃんの姿見たら疲れなんて吹っ飛んじゃった!!」

理亞「そ、そうなんだ……………」

この人、見た目に反してめちゃくちゃ喋る子じゃん。ペラペラと話しかけてくるんですけど!?

「ねえ、鹿角さん!!今日の昼食……………私と一緒に食べてくれないかな??私、もつと鹿角さんと話してみたい!!」

これは、もしかして……………お昼のお誘い!?

聖良(天使)「理亞!!これはチャンスですよ!!」♪

頭の中に、再び天使姿の姉様が現れる。相変わらずビキニだ。

聖良(天使)「ここは紀平さんの誘いを乗りましょう!!友達が出来るチャンスです!!釣りで例えるならば、高級食材である金目鯛がhitしてますよお!!」

なるほど。天使の姉様の言う通りかもしれない。釣りの例えがよく分からなかったけれども。

聖良(悪魔)「いや、ダメです!!断りましょう!!」
「ピョ」

まあ、分かってたことだけど今度は悪魔の姉様が現れる。こちら黒いビキニを装着している。

聖良(悪魔)「紀平さんにはきつと理亜に対して何か裏があると思います!!理亜、トイレ休憩でのあの出来事を忘れてしまったんですか!?!」

そんな訳ない。忘れるわけないだろう。

確かに、悪魔の姉様の言ってることも一理ある。一理あるけど……………

紀平さんの表情を見た感じ、裏があるようには見えない。

だって……………

「……………」ツツツ

凄く楽しそうにしてるもん。犬のような尻尾が彼女の腰から激しく揺れてるのが見えてるもん。偶に嬉しくなると姉様もこんな感じになるのを見る。

それに、伊吹以外の人に初めての昼食の誘いだ。引き受けるのに決まっている。今回ばかりは天使の姉様の勝利だ。

理亞「う、うん!! いいよ!! 一緒に食べよう!!」

聖良(天使)「ふふん」o(ε・ω・ε) + o(トヤ

聖良(悪魔)「ぐぐ……………」(☒)

天使の姉様はドヤ顔をし、悪魔の姉様は歯を食いしばりながら消えた。

そして、私と紀平さんは会話をしながら坂を登った。

オリエンテーション合宿……参加して良かったかもしれない。

「ねー、天草くん。私、足が疲れちゃったー。だから、おんぶしてくれないかな??
ねえ、いいでしょう??ね、お願い!!」

伊吹『……………』

その後、私達は無事に施設に辿り着き、注意事項を聞かされたあと、紀平さんと一緒に昼食を楽しんだ。

「天草くん、私ね。今日、お弁当作ってみたんだけど、味見してくれないかな??この卵焼きに自信あるんだ!!」

伊吹『……………』

ポンコツ姉様の代わりとして天使と悪魔の姉様を出しました。個人的にはお気に入りなキャラクターなので今後ちょいちょいと出していきたいです。

紀平さんは中学時代では一応、クラス内の伊吹以外の唯一の友人となりますが、高校では離れ離れになるため、最終的にはぼっちに後戻りします。

あと、活動報告にて、とあるテーマについて募集してるので、良かったら目にしてくださいと嬉しいです。

お気に入り・感想・高評価お待ちしております。

11話 「オリエンテーション合宿③」

お久しぶりです。短いです

お昼ご飯を食べ終わったあと、私たちは施設内にて自分たちが通っている中学校の由緒あるルールや伝統をモニターに映るスライドを目にしながら先生の話聞いていた。

正直言って凄く眠たかった。コクリ、コクリと首を下に向けてはハッ!?となつてさり気なく上に顔を上げて、また下に向く……………という行為を何度も繰り返した。

それは私だけでなく他の子もそうだ。なんなら、ガッツリと睡魔に敗北して寝てる子とかもいる……………ってよく見たら紀平さんじゃない!? 何やってるのよ!?

そして、チラッと伊吹の方に視線を移すとあいつは普通に先生の話当真顔で聞いていた。

そんな伊吹の顔を見ていると、またしても以前のショッピングモールでの出来事を思い出す。

あの時の伊吹の姿を思い出すだけで、身体が恐怖で身震いしてしまう。普段は無口で大人しい伊吹が、どうしてあんな行動に出たのだろうか。考えてみても分からない。当然といえば当然だ。

なにせ、天草伊吹という男の全てを理解していないのだから。

ここ数年、一緒に暮らして伊吹が一体、どういう人間なのかということはある程度分かったつもりだ。

しかし、それだけ。数年暮らして、得れたのはそれだけなのだ。

どうして、伊吹が親元から離れて鹿角家にやってきたのかは分からない。特に気にしたことはなかったが、よくよく考えてみるとおかしい。

パパは大人の事情と言っていたが、きっと複雑な事情が絡んでいると今更ながら思う。

あいつの過去に………きつと、何かがあるのは確実だ。

恐らくだけど………伊吹が無口になってしまったきっかけもそこにあると私は睨んでいる。

その過去を知りたいか知りたくないか、と聞かれたら知りたくないと言えば嘘になる。

もし、あいつのその領域に足を踏み入れたら、今まで築いてきた私達の関係が崩れるかもしれない。

そんなのは私は………嫌だ。

出来れば、もっとあいつと一緒にいたいと………私は思ってる。逆に、あい

つがない日常なんて今思うと考えられない。それは、姉様も同じ気持ちだろう。伊吹がいなくなってしまうと考えると……胸が痛くなる。どうして、痛くなるのかは分からない。分からないが、痛いのだ。

だから、私は……………

「おい、鹿角。話、聞いてるか。私、今、とても大事なこと言ってんだぞ。??分かってんのか。??ぶっ飛ばさずぞ。??」

理亞「……ひゃい!!聞いてます!!」

唐突にちとせんから声を掛けられ、変な対応をしてしまった。周りの子達は、それを見てクスクスと笑っている。めちゃくちゃ恥ずかしい……………。

私の返答を聞いて、ちとせんは言葉を続ける。ヤバい……………。なんの話をしていただろう。全く聞いてなかった。

ちとせんに、ぶっ飛ばされる前に紀平さんに聞いておこう。って、紀平さん、まだ寝てるじゃん!! どうして注意しないのよ!! 不公平じゃない!!

「こらあ!! 紀平!! 何、寝とんじやい!! 大事な話してるって言うてるだろうがあああ!!」
「ドゥン」

「ぎゃあ!!」
「ンダ」

あ、そんなことなかった。バリバリ怒られてましたわ。なんなら、持ってたチョークを全力投球されて、それが直撃して紀平さんは気絶してしまった。こ、怖え……………。

てか、気付いたら他の何人かも、そのチョークの犠牲になっていた。

どうしよう……………。これで、ちとせんが何を話していたのか全く分からなくなってしまうた。

ー
ー
ー
コツン

理亞「痛っ」

戸惑っていると、前から何かが飛んできておでこに直撃する。なんだろう……………、

と思い、見てみると

何度かに折られて小さくなっている紙だった。

それを、ちとせんにバレないようにコソツと広げると、その紙にはこの後に行うカレーライス作りの注意点について幾つか書かれていた。

恐らくだが、ちとせんが言っていた大事なことについての内容だろう。

それに、この紙に書かれている文字。

見間違えるはずがない。伊吹の文字だ。

伊吹の方に顔を向けると、あいつは何事もなかったかのように前を向いて先生の話聞いてる。

理亜「伊吹……………」

予想外の助けに驚くが、それと同時に何だか嬉しいと思う。

あいつもあいつで、きつとこの状況をどうにかしたいと思っているはずだ。じゃなきゃ、こんなことはしない。

だけど、お互いにどうすれば良いのか分からないまま時間が無駄のように流れてしまっている。

一体、どうしたら……………

聖良『伊吹のこと、よろしくお願いしますね』

理亞「……………」

ここで、私はふと姉様の言葉を思い出す。

……………そうだ。以前のような生活を望んでいるのは私や伊吹だけじゃない。

姉様に任されたんだ。本当は姉様自身も動きかけたはず。それなのにも関わら

ず私に任せてくれた。

偉大なる姉様に任されたからには……、絶対に成し遂げてやる。

覚悟を決めた私は、ちとせんの話が終わったあと、とりあえず気絶していた紀平さんに内容を教えるのであった。

面白いと思いましたら、お気に入り・感想・高評価お待ちしております。

12話 「オリエンテーション合宿④」

お久しぶりです。そして、あけましておめでとうございます。

投稿頻度は少しずつ取り戻していきたいと思っていますので、どうか今年も無口な居候をよろしくお願いします。

先生達の話を終えたあと、私たちは調理場が設置されている広場へと移動していった。

「ねえ、○○ちゃん。一緒に班になろうよ」

「うん!!」

「おい、○○。一緒に組もうぜ」

「おうよ!!」

移動している間、他の子達はこの後、広場で行われるカレーライス作りの班決めを行っていた。

「鹿角さん。私と班組まない？」

歩いていると、おでこを真つ赤にした紀平さんが私を班に誘ってくれた。姉様や伊吹以外の子に誘われるなんて初めてのことだから緊張してしまう。

「あの……………私も……………いいかな」

紀平さんの誘いを了承しようとした瞬間、別のところから声をかけられる。そちらの方に顔を向けると、そこには生理によって体調を崩していた上野さんがいた。

理亞「もう、体調は大丈夫なの??」

合宿先に着いてからは、彼女の姿を1度も見かけることはなかった。さっきの集会もいなかったから、心配していたけど……………。

「うん。薬は飲んだし、別室で我邪丸先生にずっと看病して貰っていたから朝に比べてだいぶ楽になったよ。」

我邪丸先生とは、今回のオリエンテーション合宿に同行している養護教諭……………分かりやすく言えば、保健室の先生のことである。肩にウルト○マンのある怪獣のソフビを常に乗せてる少し変な人である。

理亞「そっか……………」

例え、あまり関わりがなくても、上野さんが無事だと分かれば心が少しだけ軽くなる。本当に良かった。

「話を戻すんだけどさ……、私も鹿角さんと紀平さんの班に入ってもいいかな？」

上野さんはモジモジとさせて私たちに言葉を出す。元々は彼女も私と同じで人見知りの性格だ。自分からそういうことを口に出すのを緊張しているんだろう。

理亞「もちろん!!」

私と紀平さんは言葉を揃えて、上野さんを歓迎する。それによって、緊張が解けたのか、上野さんは安心して嬉しそうな表情を浮かべた。

「これで3人だね!!」

「うん!!」

3人いれば、カレーライス作りは開始することが出来る。出来るのだが……私には喜び合う2人に申し訳なさそうにしながらも言葉を出す。

理亞「ごめんね、2人とも」

「?」

理亞「もう1人……自分たちの班に誘ってもいいかな??」

「え??」

私は、そう言ったあと、2人の反応の顔を伺わずに背を向けて歩き出す。

向かった先には、何人かの女子に囲まれて少し困惑しているように見える1人の男の子がいた。

私は、その男の子に面と面であって話さなくてはならない。だからこそ、私は行かなくてはならないのだ。

綺麗なミディアムの髪型で、目が特徴的である………天草伊吹の元へ。

「ねえ、天草くーん。私と班組もうよ〜」

「何言ってるのよ、天草くんは私達の班に来るの!!」

「私………、料理あまり得意じゃないの。だから、作り方教えて欲しいな〜」

伊吹「……………」*オオオオ*

女子のしつこい誘いによって、未だに困っている伊吹に近付くため、私は彼女達の間を何とか通り抜けようとする。

そして……………

理亞「伊吹!!」

久しぶりに、あいつの名前を声に出して呼んだ。

私の声を聞いて、伊吹はゆっくりと私の方へと顔を向ける。彼の表情は分かっていたことだけど、驚いていた。

私が、この場でこいつに近付いて名前を呼ぶなんて思ってもみなかったのでしょうね。

ちなみに、周りにいた女子は私に対して伊吹同様驚きの表情を浮かべる者もいれ

ば、嫌悪な目線を送る者もいた。八代さんもそのうちの1人だった。

理亞「……………」

伊吹「……………」

「……………」

思い切って、ここまで来たものの伊吹の前に来たら緊張してしまい、中々言葉を出すことが出来なくなってしまった。

言え。早く言うのよ、私!!

この機会を逃したら、伊吹に声をかけるタイミングは恐らくだけど無くなる。

今は緊張してる暇なんてないのよ!!言え!!言え!!言え!!言えよ、私!!

以前みたいに姉様と伊吹の3人で笑い合えるような日常を取り戻したいのなら

そして、覚悟を決めた私は更に伊吹に近付いて、言いたかった言葉を出す。

「伊吹。私と班組みなさい。これは………強制だからアンタに拒否権はないわ。」

そう言って、私は伊吹の腕を掴んで、まるでお姫様を攫う王子様のように彼を無理矢理とその場から離れさせた。

背後からは、何人かの女子の叫び声が聞こえてくるが、知ったことか。

因みに、私は前を向いていたから気付かなかったが、私に引っ張られていた伊吹は少しばかり動揺しながらも嬉しそうに微笑んでいた。

お気に入り・感想・高評価よろしくお願いします。

13話 「オリエンテーション合宿⑤」

伊吹を無理矢理と自分達の班に追加させたあと、先生に報告してから私達はカレーライス作りを始めようとした。

「調理器具持ってきたよ」

「私は食材を……………」

理亞「ありがとう、2人とも。」いっしょ

紀平さんが鍋とか飯盒を、上野さんがカレーライスの食材を手にして、私たちが行く調理場へと戻ってきた。

伊吹「……………」

伊吹は両手に大量の薪を持って立っていた。

理亞「伊吹も……………ありがとう。その薪で火をつけといてくれる？その間に私達で野菜とかの下処理しとくから。」

私の指示に、伊吹はコクリと頷いてから、薪を組み立てたあと、先生から配布されたチャッカマンを取り出して火をつける。

手先が器用な伊吹なら、すぐに火をつけてくれることだろう。ならば、私達も急がなくてはならない。

私と紀平さんと上野さんの3人で野菜を洗っているところ――

「前から気になってただけだよ、鹿角さん」

じゃがいもを洗っている紀平さんが人参を洗っている私に話しかける。何なのかしら？

「天草くんと………どういう関係なの？」

理亞「え？」

洗う手を止めて、私は紀平さんの方に顔を向ける。

「だってさ、あのモテモテの天草くんと結構、仲良い感じだからさ。その………付き合ってるのかなって………」

「それは………私も気になります。」

紀平さんの言葉に、玉ねぎの皮を剥いていた上野さんもボソボソとした声で意外にも食いついてきた。恋バナとか好きなのだろうか。

理亞「べ、別に付き合っていないよ。あいつとは、ただの友達。友達だから」

ーゾキン、ゾキン

うっ……、自分の口で『友達』という発言をすると、胸が痛くなった。前より少しだけ痛みが増している気がする。

ワイワイと楽しそうに野菜の下処理をしている2人の隣で伊吹の方に視線を移すと

あいつはバタバタと必死こいて団扇を扇いで火に勢いをつけていた。なんか………見てて面白いわね。

作業しながら、伊吹の様子を眺めていると

理亞「あ………」

伊吹「………」

一通り仕事を終えて汗をタオルで拭おうとしていた伊吹とバッチリ目が合ってしまった。その瞬間、ドキッと胸が高揚しているのを感じる。

普段ならすぐにお互いに恥ずかしさで目を逸らしてしまう。けど、今回は何故か

そんなことなくずっと私は伊吹の顔を、伊吹は私の顔を見つめていた。

何だろう……。今なら不思議と永遠に伊吹の顔を見ていたい気持ちになっている。

「鹿角さん、下処理終わったよー。次は何しようか??」

理亞「へあ?……あ、ああ!!そ、そ、そ、そうね!!じゃあ、お米研ごっか!!」
「どうしたの?そんなにテンパって」

理亞「な、何でもないよ!!早くやろ!!」

私は、先程の行動を誤魔化すかのように言葉を出して飯盒を手にした。

「「できたぁー……!」」

調理を初めて数時間後、なんとかカレーライスを完成させることができた。カレーライスの出来は他の班と比べて高いと思う。まあ、一応実家が飲食店である私と、居候である伊吹がいたからっていうのもあるけど。

「早く食べようよ!!私、お腹ペコペコだよ!!ね、上野さん!!」

「そ……………そうだね。私も……………ペコペコかも」

お腹に手を当てて、早くカレーライスを食べたいアピールをする紀平さんと上野さん。てか、いつの間にか仲良くなってるわね。

手を洗った私達は皿に炊きたてのご飯をついで、その上からカレーのルーを流し入れる。うわあ……………、お世辞抜いて本当に美味しそう。

「よし！じゃあ、食べようか!!」

「ちよつと待って……………。天草くんは？」

上野さんの言葉で、私達は伊吹が居ないことに気づく。あれ？おかしいな。カレーライスが完成した時はいたんだけど。

「お手洗い……………とかかな？」

「だとしても少し遅くない？」

伊吹がいないことで2人は心配そうにする。どこに行ったのよ、あいつ。

理亞「……………あ」

ここで、私はあることに気づく。

理亞「あいつの分の……………皿がない。」

そう。カレーライスを早く食べたい欲によって、気づかなかったが伊吹の分の皿が無くなっていった。よくよく思い出してみると、お皿に盛る時に米とカレーのルーが1人分減っていたような気がする。

まさか、あいつ……………

理亞「ちょっと行ってくる」

私はスプーンをテーブルの上に置いて、その場から立ち上がる。

「鹿角さん!」

理亞「大丈夫大丈夫。すぐに戻ってくるよ。あいつを連れて」

そう言って、私はとある場所に向かって走り出した。

理亞「いた」

あいつを探すために2人の傍から離れたが、案外すぐに見つけることが出来た。目の前にこの山の目玉である大きな滝を眺めることが出来る場所の前に、伊吹が

1人で座りながらみんなで作ったカレーライスを食べていた。

私は歩いて伊吹のところまで近づき話しかける。

理亜「何、1人で勝手に食ってんのよ」

伊吹「……………」

声をかけられて、伊吹は私の方に顔を向けるが、特にあいつからは反応があるわけではなかった。

どうして、伊吹がこんな行動をしたのか。理由は確定とは言えないものの、ほぼ予想はついている。

シンプルに私と一緒にいることがまだ気まずいから。

以前よりかはマシになっているものの、やっぱりショッピングモールでの出来事があるからこそ、あまり一緒にいたくない、またはいれないのでしょね。

それは、私も同じ。今もこうしてアンタと一緒にいるだけでアレを思い出して怖くなって震えてしまう。

だけどね、伊吹。もう……………頭の良い貴方なら分かってるんでしょ??このままの現状はあまり良くないってことを。

だから、私は————

理亞「待ってるから……………」

伊吹「————ッ」

私の呟いた言葉に、伊吹はようやく反応を示した。それを確認しながらも、私は発言を続ける。

理亞「待つよ。いつまでも待つ。伊吹がいつか……………私や姉様のことを受け入れて伊吹自身のことを教えてくれる時が来るまで。だから、無理して今は……………言わなくてもいい。」

伊吹「……………」

理亞「だけど、これだけは覚えておいて。例え、伊吹がどんな過去を送ってきたとしても私と姉様は……アンタを受け入れる。だって……もうアンタは私達の家族だから。」

言いたかったのはこれだけだから、と伊吹に言い残して私は背を向けて歩き出す。これだけ言えば私は満足だ。前を向いて歩ける。以前と変わらない態度で、伊吹と接することも出来るはず。

私のやるべきことは終わった。あとは……伊吹の気持ち次第。だけど、その心配も杞憂に終わる。

理亞「伊吹……」

伊吹はその場から立ち上がって、私の隣に並ぶ。言葉は発さないものの、表情が以前と同じようになっていた。こいつもこいつで……覚悟を決めたように見える。

よかった……。内心、本気でそう思いながら、私達は紀平さんと上野さんの元へと戻った。

ちなみに、ここだけの話、2人の元に戻ろうとしたらちよどこカメラを持った

先生がいて遅れた罰として伊吹とツーショットを撮らされた。

悪い気分ではなかったと言っておこう。絶対に口には出さないけどね！！！！

「鹿角のめ……………。私の前であんな行動をとったことを後悔させてやるわ！！！」

あと2、3話でオリエンテーション合宿編を終わらせるように頑張ります。

私の合宿の冊子をパラパラと見ていた姉様も懐かしながらー

聖良『肝試し大会ですかあ、懐かしいですね。とても楽しかったですよお!!

まあ……………、何人か還らぬ人がいましたが……………(ギョッ)』

って、楽しそうに言っていた気がする。けど、最後の一言だけ声が小さくて何を言っていたのか聞き取れなかった。なんて言ってたんだろう……………。

それにしても、肝試し大会……………かあ。

「鹿角さん」ズズ

理亞「ひああああ!？」

唐突に紀平さんに肩を叩かれた私は、驚いて思わず声を出してしまった。び、びっくりしたー。

理亞「な、なに!？」

「いや、少し声を掛けようかな……………と。てか、今の反応……………。もしかして鹿角さん……………」

理亞「やめて」

何かを察した紀平さんに対して、私はこれ以上、その先に出るであろう言葉を喋らないようにお願いする。

「……………」いざいざ

それによって、紀平さんは小悪魔のようにニヤニヤと口元を緩ませる。これは確実に気づいたわね……………。

「鹿角さんって、こういうの……苦手なの？」

遂に言われてしまった。私は何も答えずにぷいっと頬をふくらませながら横に顔を向いた。

そう。私、鹿角 理亞はお化けや幽霊などのホラー系が大大大の苦手である。周りからは、得意だと勘違いされるときがあるけど、絶対に無理!! 無理すぎて、馬になるレベル。

それを知っている癖に姉様（ホラー系大好き人間）は……………

聖良「理亞く。TSUOAYAである有名な『貞子VS伽椰子VSてけてけVS鬼婆アVSペニーワイズin犬鳴村』を借りてきました。なので、一緒に観ましょう♪」

と、偶に私にホラー映画の鑑賞を誘ってくる。もちろん、全力で拒否してるけど……………。てか、よくよく思い出してみれば凄い作品名だったなあ。1人だけハリウッド出身のやつもいたし……………。

ちなみに、私が拒否った場合、伊吹が姉様と一緒にホラー映画を観ている。鑑賞後、会いに行くと高確率で気絶しているから伊吹もホラー系とかは苦手な部類に入ると思う。あいつと一緒にいる所があると思うと少しだけ嬉しくなる。

まあ、そんな感じで。とにかく私は怖いものが苦手だ。だから、今も私の頭の中は『帰りたい』という言葉で埋め尽くされていた。

伊吹『……………』カタカタカ

伊吹も相変わらず真顔で、こういうのには特に何も思わない風に見えるが、全身が微かに震えてた。あいつもビビってるわね。

ちとせ「今から説明を行うからしっかりと聞くように。ルールは至ってシンプル・イズ・ベストだ。あれを見ろ」

ちとせんは後方に指をさす。なので、私たちは振り向くとそこには1本の不気味な道があった。私たちが来たやつとは勿論、違う道で先生達に念強く通行禁止と言われていたものだった。

ちとせ「この道は約1kmほどある一本道だ。その先にはこの山に司る神様の銅像がある。その銅像まで辿り着き、今回の合宿のお礼と中学校生活の抱負を込めて崇拝してくるのが今回のミッションだ。」

ルールは至って普通の肝試しって感じね。

ちとせ「肝試しは2人1組でやっていくぞ。ペアの決め方はこのくじ引きで行う!!なので、今から各クラスの担任が持つてくるくじ引きを引いてペアを作れ!!それじゃあ、開始!!」

ちとせんの言葉で私たちは自分のクラスの担任の方へと向かう。私の場合、ちとせんだ。

ちとせ「出席番号順で引いていけー。同じ番号のやつがペアだからなー。あ、みんなが引き終わるまでは引いた番号を他のやつに教えないように!!」

出席番号順ということは、伊吹から引いていくことになる。

出来れば、ペアは難しいけど伊吹が良い。あいつもホラー系は苦手だからこの場においては頼りにはならないとは思うけど、それでもやっぱりあいつの隣がいいな。難しければ、紀平さんか上野さん辺りを願う。それ以外は少し厳しい。

伊吹はちとせんが持つくじ引きに目を突っ込み、ゴソゴソとさせてから1枚の紙を引く。そして、伊吹は自分の引いた紙を開いて中身を見た。あいつ、何番だったんだろう……。気になる。

そして、いよいよ私の番となった。

ちとせんが出しているくじ引きの箱に手をつ込み、辺りを探る。当然ながら、紙は沢山ある。どれにしよう……。迷うなあ……。

でも、時間はあまり取れない。ええい、こうなったらこれにしよう。

私は1枚の紙を手にして取り出す。その後、少し離れてからドキドキと心臓が鳴っているのを感じながらゆっくりと紙を開く。

理亞「4番……。」

私が引いたのは『4』と書かれた紙だった。もし、伊吹も『4』を引いていれば……。

ちとせん「よし。全員、くじを引いたな。それじゃあ、同じ番号の奴を探せー。」
私はすぐに伊吹の方へと駆け寄り、手話を交えながら声を出した。

理亞「伊吹!! な、何番だった!？」

伊吹『……………』ヒラ

伊吹は紙を私に見せようとする。4番来い!! 4番4番4番4番4番4番4番4番4番4番4番!!

理亞「ツツ……………17番」

伊吹が引いたのは4番ではなく、17番だった。すなわち、私たちはペアではないということになる。そんなあ……………。

「お。天草、17番? 俺と一緒だな!!」

17番の紙をヒラヒラとさせながら、クラスの男児が伊吹に声をかける。こいつが、伊吹と同じペアの奴か。う、羨ましいとかじゃないからね!! でも、ペアが女じゃないだけでも安心……………かも。

伊吹じゃないなら、私のペアは誰だろう。

紀平さんと上野さんはもうペアらしき人と一緒にいるため、違うと予測される。あと、ペアが見つかってなさそうなのは……………。

「アンタが……………4番？」

理亞「—————ツツ!?」*ビク*」

背後から私に向かって声がかけられる。それによって、思わず私は身震いさせてしまった。

この声は……………。

私はゆっくりと背後に振り向くとそこには……………

『…………と鹿角のやつ、死んでしまえばいいのに』

『びびりまあ』*ニヤニヤ*

『は??意味分かんないんですけど。鹿角、ちょっとどいてくれない??あんだ、一体、なんなの??』

「八代……………さん。」

「私も4番なんだよね。よろしく、鹿角さん」じ

『4番』という紙を手にした八代さんが、笑っているようで笑っていない表情を浮かばせながら私の目の前に立っていた。

どうやら、この肝試し大会……………。穩便には絶対に終わらないだろう。と確信的にそう思ってしまった。

次回、色々と動きます。お楽しみに。

15話 「オリエンテーション合宿⑦」

Aqours3rdライブ上映会をYouTubeで見ながら執筆してきました。
MIRACLEWAVEとAwaken the powerが最高でした!!

「……………」

理亞「……………」

私たちの番が来るまでの待ち時間、私と八代さんは特に何も話すことなくただ横に並んで立っているだけだった。すごく気まずい……………。

まさか、よりによって八代さんと同じペアになるとは……………。

前もどこかで言ったと思うが、八代さんは私のことが嫌いだと思われる。じゃなきゃ、私に対してあんなことは言わない。

八代さんは……………やっぱり、伊吹のことが好きなのかな。いつも、なんとか気

を向けようと話しかけてるし。

もし、伊吹と八代さんが付き合ってしまったら——！

………なんか、嫌だなあ。

「次のペア。どーぞー。」

理亞「あ、はい。」

くだらないことを考えていたら、いつの間にか私たちの番になっていた。なので、私と八代さんは並んで道を歩く。

道は当然のように、暗闇に包まれていた。所々に微かにロウソクが立てられているが、正直に言うところ全く効果はない。むしろ、その存在がより恐怖心を高ぶらせてくる。

うう………、やっぱり怖い。

隣をチラッと見た感じ、八代さんは全く表情を変えていないまま、何も話さずに道を歩いていく。こういうの………得意なのかな？やっぱり、ギャルは凄いなあ

(偏見)

それよりも、銅像ってまだあ……??

早く辿り着いてよお……。こんなイベント早く終わらせたい。何が楽しいイベントよお……。全く楽しさが伝わらない。

ーガサガサ

理亞「ーガサガサ!?」どガサ

え、ちょっと待って!!なんか、その茂み!!すごく揺れてるんだけど!!明らかにかいあるんだけど!!もう、無理無理!!

私が恐怖で震えている中、八代さんは気にせず前に進む。え、嘘でしょ??マジで言ってる??あれ、怖くないの!?何かいるんだよ??

私は震えながら、彼女の後を追うとー

「わあああああああああ!?!」

理亞「……」（きゃあああああ……！）どんが

案の定、茂みから何かがか叫びながら飛び上がる。私はそれを目にして驚く。しかし、驚きすぎて、逆に言葉に出すことが出来なかった。

「……………田中先生なにやってんの??」

全く驚かなかった八代さんは、茂みから飛び出た何かに声をかける。……………つて、え？先生？

よく見ると、確かに現代文の田中先生だった。血まみれではあるが、多分、血糊か何かを使ったのだろう。

「ふふふ、全く驚かないなんてやるね。ほとんどの子達は私の時点で驚くというのに。」

田中先生はドヤ顔にしながら言葉を出していく。なるほど……………。教員達が待ち

伏せて驚かせているのね。

あと、ごめんなさい、田中先生。普通に驚きました。ただ、驚きすぎて言葉に出なかっただけです。

「しかし、私はあのメンバーの中では最弱の存在。他の先生達の脅威に君たちは太刀打ちできるかな??」フツフツ

そんな、私は四天王の中で最弱だみたいなことを言わないでくれる!?なんか悲しいんだけど!?

それと、田中先生でもかなりびっくりしたのに、その上をいくのがあるの!?もう嫌なんですけど!?

田中先生と別れたあと、再び前に進む私たち。

ーーーガサガサ

あつ…………。

理亞「バキ〇ム…………」

そうだ。あの見た目…………絶対バキ〇ムだ。あのウルトラ怪獣の。

てことは、この人は…………。恐らくだけど、養護教諭の我邪丸先生に違いない。いつも肩にこの怪獣のソフビを乗せてるし。

「……………」

バキシム(我邪丸先生)はニコツと微笑む(気がした)と、茂みの中に戻る。せめて、何か一言喋って欲しかった。

この後、4人ほどの先生が私たちを驚かせてきた。八代さんは特に表情を崩すことなく、そして、私は全部驚きながらも声に出ることはなかった。声は出なかったが、とても喉が痛い。

4人目の佐藤先生(どんな内容だったかは言いたくないけど、1番怖かった)を乗り越えたあと、ようやく目的の銅像へとたどり着いた。

この山に司る神様って言ってたけど…………何これ。何をイメージして造られたん

だろうか。龍にも見えるし、熊にも見える。なんなら、虎にも見えるし、カバにも見えないことも無い。本当になんだこれ？

……………ん？銅像の足元に何か小さく彫られてる??なんだろう??

『かづのせーら。』

理亞「……………」ダラダラ

見なかったことにしよう……………、うん。てか、本当に何してくれちゃってるの、あの人!?一応、これ神様だからね!?

ま、まあ、いいや。ええと……………、確か今回の合宿のお礼と中学校生活の抱負を込めて崇拝するんだっけ。早く終わらせよう……………。

私と八代さんは並んで銅像の前に立ち、手を合わせる。

理亞(今回の合宿……………まあ……………色々あって疲れてし、面倒臭いなって思ったこと色々あったけど、なんやかんやで楽しかったです。ありがとうございます)

た。）

お礼の言葉は終わった。次は、中学校生活の抱負かあ……………。なんて言おうかな……………。

……………よし。

理亞（出来るだけ目立つこと無く学校生活を……………）

伊吹と共に過ごせますように。）

胸を熱く感じさせながら、私は心の中で抱負を呟いた。

よし、これで終わった。さっさと戻っ……

……バキッ!!

理亞「……………え？」

目を開け、振り向こうとした瞬間、頭部にかなりの強い衝撃を感じた。視界がかなり揺らぐ。そして、徐々に視界が狭ばっていく中で――

「てめえが悪いんだからな。鹿角。」

と、八代さんの声が最後に耳に入った瞬間に私は意識がなくなった。

伊吹『……………』
『カハカ』

「ん、どうした？天草？何かいたか？」

面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価待ってます

16話「オリエンテーション合宿⑧」

今回は少し長めです。

あと、少し彼の過去について触れます。

気付いたら、私は見覚えのない薄暗い場所へと立っていた。私は確か……………あれ？何してただけ??頭をひねって思い出そうとしたけど、何ひとつ思い出せない。自分の名前も、出身地も、これまでの人生も。

そして、ここはどこなのだろうか。見た感じ、誰かの家だと思っただけ……………。ん？あそこの柵に何か飾ってある？行ってみることにした。

これは…………賞状？一体、何のだろうか？

『賞状 最優賞 天吹殿。貴方は「第回、〇〇県 こどもピアノコンクー

☒「において、日頃の練☒の成果を十分☒発揮さ☒☒秀☒成績をーー」

字が所々、霞んでいて読めない。けど、なんかピアノのコンクールで優勝したっていうのは分かる。

………うわ!!よく見ると、このピアノの賞状以内にも数多くの賞状とトロフィーが飾られていた。す、凄い………。学校の校長室の隣とかに飾られている景色を見てるみたいだ(分かる人には分かる)

さっきとは別のピアノのコンクールの賞状にトロフィー、勉強関係、作文、絵、そろばん、空手、水泳に料理にパソコン………数えきれない程の種類の賞状があった。な、なんなの………これは。

そして、その隣には1つのゴミ箱らしきものがあつた。中を覗いてみると、そこにはくしゃくしゃにされた1枚の紙が。

汚いと分かってても、気になったのでそれを手にして広げてみる。すると……

2 位 ○ 草 ■ 吹

と書いてある賞状であった。くしゃくしゃすぎて、文字がダメになってしまい、どんな大会のやつなのかは分からなかった。けど、2 位って凄いいじゃん。どうして、捨てられているの？

『全くこの子は！！！！』

ーッッ!?び、びっくりした。突然、ここから離れた場所から大声が聞こえてきたから、跳ね上がったしまった。

それよりも今のは……………

私は声が聞こえてきた方に向かって足を進める。すると、とある場所にだけ光がついていた。きつと、あそこにさっきの大声を発した人物がいるに違いない。

少しだけ身体を震わせながら、その部屋をバレないように気をつけながら除く。

『ねえ。私、言ったよね??何で、違うことをやってるの??ねえ!ねえ!ねえ!ねえ!』

ーーーーバキッ

あらゆる物が至る所に拡散し、悲惨な状況へと陥っているリビングらしき部屋で、怒りに満ちた表情をした白髪の女性が、彼女と同じ白髪の少年に向かって怒号を浴びせながら何度も何度も手を挙げていた。

何よ……………これ。

『どうして○○しているの!?ママ、☒☒しろって言ったよね!?何、自分勝手なことをしているの!?お前ら私の言うことだけ聞いていればいいって言ってるだろ!!次はねえからな!!』

ーーーーバキッ、バキッ、バキッ

私の瞳に映る景色は予想を遥かに超えるものだった。正直いって、見てられないため、思わず手を顔に当ててしまった。だけど、耳に聞こえてくる音は生易しいものでは無かった。明らかに何かが砕けるような生々しい音がひたすら私の耳に入ってくる。

『ちっ、この出来損ないが!!』

しばらくした後、女性の酷い言葉が耳に入ってきたあと、私の方に向かって歩く足音が聞こえてきた。

やばいと思った私はすぐにここから離れて隠れそうな場所を見つけ、そこに隠れる。

『ーーーーー!!』

女性はスマホを手にして誰かと会話をしながら階段に登っていき、姿を消した。私はすぐに先程覗いていたの部屋へと戻る。罵声を浴び、手を挙げられていた子が心配になったからだ。

部屋に戻ると、前髪が鼻の下まで伸びてしまっている白髪の少年がちょこんと座っていた。私は何も言わずにその子の傍へと駆け寄る。

『……………』

私の存在に気付いたのか、少年は私の方に顔を向ける。しかし、前髪で目が隠れてしまっているため、表情は分からない。驚いているのだろうか、それとも怒っているのか、またまた真顔かもしれない。

私は少年が何も言わないことをいい事に、彼の顔や身体を見る。

……………案の定、酷い状態だった。至る所に血や青あざが出来ている。しかも、タチが悪いことにあまり目にいかなない所ばかり。

これはもう……………確信的に虐待だ。どうして手を上げているのかは分からないが、理由はどうであれ、あの女は犯罪を犯している。

すぐに警察に電話してー

……………ん？あれ？

この子……………誰かに似てー

『……………て』キーン

ーッッッ!! 少年は私の方に向かって、何かを呟いた。だが、あまりにも小さすぎて何を言ったのか聞き取れなかった。

もう一度行ってもらおうように私は彼にお願いしようとしたがそれは叶うことは無かった。

ーッバキバキベキベキ

え……………!? どうしてヒビが!?

私がいるこの空間のあらゆる場所にヒビが入り、崩れていく。その速度は異常に早く、あっという間に私と少年がいるところ以外は何も無い空間へと化してしまっ

た。

そして、私と少年の間にもヒビが入り、少年側の方から崩れていく。

私は手を伸ばし声を上げる。これだけ言わないと後悔すると思ったからだ。例

え、相手が知らない人物だとしても。

「さっきの言葉……、もう1回教えて!!」

これを言った瞬間、私の方も崩れてった。多分、あと数秒もすれば私はこのまま崩れ落ちることとなるだろう。

そして……、最初に崩れ落ちた少年は落下の浮遊によって前髪が浮き、表情が完全に露となる。

少年は泣いていた。

それは、まるで——

『誰か僕を……………助けて。』

誰かに助けを求めているかのように。

そして、彼はその表情のまま崩れ落ちた。

少年の最後の言葉を聞いた私の方も完全に崩れ落ちて意識が途絶えた。



理亞「……………ん？」

頭が悲鳴をあげるほどガンガンに響き渡る痛みを感じながら我慢しながら私は目が覚めた。なんだか凄い夢を見た気がする。全く覚えてないけど。

てか、あれ？……………ここは?? どうして、私はこんな所にいるんだっけ?? 確か、銅像に崇拜して帰ろうとした所で……………

『てめえが悪いんだからな。鹿角。』

ーッッ、そうだ。思い出した。帰ろうとしたら、頭に強い衝撃を感じて気絶したんだ。

そして、最後に聞こえてきたあの声……………。間違いない。あれは八代さんの声だった。つまり、私を気絶させたのは彼女だということが分かる。

ーッガサガサ

理亞「ーッッッッッッッ!?」ビクッ

急に私の傍にある草むらが音を鳴らせて揺れる。それによって、つい私は身を固めてしまった。

ここは………本当にどこなの?? 本来ならあるロウソクが無いため、指定の道では無いということが分かる。つまり、光がない。

私の周りは本当の闇で包まれている。

しかし、私は人並みに視力がいいため、集中すればなんとかギリギリ視ることは可能だが――

――ガサガサ

理亜「きゃあ!!」ビクッ

この怖がりの性格のせいで、その視力は全く役に立たない。集中したくてもできないのだ。

集中出来ないため、今の私は周り何も見えない。その結果、ただ震えて蹲る事しかできない。

怖い。ただひたすら、怖い。

何もかもが怖く感じてしまう。ただの夜風も、草木がそれによって揺れる音も。逆に何も音が聞こえない時も返ってそれが恐怖を感じる。

恐怖というものは、判断能力を鈍くさせてしまうというのはよく聞くけど、正に本当のことだった。本来なら、何とかするべきなんだろうけど、それを考える暇がない。

ーーーガサガサ

ーーービュービュー

ー　ー　ユ　サ　ユ　サ

ー　ー　バ　サ　バ　サ

ー　ー　ガ　ー　ガ　ー

ー　ー　ブ　ォ　ー　ブ　ォ　ー

理　亞「ー　ー　ー　ー　ー　ー　ッ　ッ!!」ビクビク

私は闇の世界で涙を浮かべ、恐怖心を煽られながら蹲まるのであった。



ちとせ「あれ？八代、鹿角は？」

「なんか、疲れてから休憩するって言ってる。私は待つって行ったんですけど、ど

うしても先に行つて欲しいって言われたので先に戻ってきました。」

理亞を気絶させ、指定の道から離れた場所へと置き去りにした張本人である八代は、堂々たる態度をとつてちとせに嘘の言葉を告げる。

ちとせ「そうか………。それにしても、少し遅い気がするけどなあ」

八代が戻つてきてからは最低でも10分は経っている。いつ戻つてきてもおかしくは無い。それでも理亞は戻ってくる気配はない。

「あ、天草くん。」

愛しの伊吹を見つけた八代は声を高くして彼に近づく。そして、腕をからませながら言葉を出していく。

「私ね……、この肝試し、とても怖かったの。」

八代は更に嘘をつく。元々、八代は肝試しに、おいては理亞が泣け叫びたいほど怖がつていたのに対し、八代は全く表情を崩していなかった。

彼女の言葉に対し、伊吹はポケットからいつもコミュニケーションをとるためのメモ帳を取り出して文字を綴ったあと、八代に見せる。

伊吹『八代さん……………、理亞ちゃんは……………??』

「ツツ……。鹿角さんは少し疲れて休憩したいって言ってたの。だから、先に私が戻ってきたんだ。」

伊吹『……………』

「別に鹿角さんのことはいいじゃん。あのさ、天草くん。今度、私とーー」

伊吹『嘘……………だよね?』

「ーーツツ!？」

八代が話している途中に、伊吹はさらに文字を綴って彼女に見せた。それを見た八代はつい言葉を詰まらせてしまう。

「や、やだなー。天草くん、何言ってるの? そんな訳ないじゃん。」

伊吹『……………あんまり皆は知らないけど、理亞ちゃん、毎日最低でも10km走ってるんだ。朝と夜に。』

「は？」

伊吹の言う通り、理亞は毎日、日課として朝と夜に10kmのランニングを行うようにしていた。伊吹との一件があったあとはやる気が起きず、何回かサボってしまったことはあったが、それまでは1日もサボることなくこなしていた。伊吹や姉である聖良も何回か彼女のランニングに付き合うことがあるので認知していた。

しかし、理亞は学校ではあまり人と関わろうとはしなかった。今回の合宿で紀平と上野という友人と呼んでもいい人物は出来たが、それでも彼女達を含めたクラスメイトは理亞のことをあまり知らない。強いて言うのなら、伊吹しか友達のいない人見知りっていうイメージがついていることだろう。

だからこそ、八代は信じられなかった。そんな奴が毎日、10kmランニングをしているということに対して。

伊吹『だから、理亞ちゃんはそう簡単に疲れるはずがないんだ。たかが1km。彼女にとっては屁でもない。』

伊吹は止まることなく、文字を書いている八代に見せる。その文字を見る度に、八代の表情はどんどんと青くなっていく。

伊吹『八代さん、もう1回言うよ？理亞ちゃんは??』

八代「ひい……！……！……！」

八代は伊吹の表情を見て、ビクリと身体を震わせる。肝試し大会であれだけ余裕だった彼女が恐怖という感情を抱いた。

伊吹は………あのショッピングモールの時の同じ顔を八代にしていた。つまり、彼は怒っているということが分かる。

八代「あ……あ………」

伊吹から放たれる恐怖に八代は言葉が上手く出せないでいた。もはや、彼女は蛇に見つかった鼠みたいなものだった。

伊吹『もういい……。けど、これだけ書いておくよ。』

今度、彼女に手を出したらタダじゃおかないからね』

「……………」コウコウ

警告と等しい文字を見せたあと、もう言葉を出せない八代は肯定の頷きをするしかなかった。

そして、伊吹はそのまま肝試しの時に通った道に向かって走り出した。

ちとせ「おい、天草!? お前、どうした!? お、おい!!!」

担任の先生が背後から響き渡るが、伊吹は止まることなく走り続けた。

次回でなんとか合宿編は終わらせたいなあ笑

面白いと思ったらブックマ・感想・高評価お願いします。
\$|\$(A: A)\$: \$?\$\$(A)\$:

17話「オリエンテーション合宿⑨」

今回でオリエンテーション合宿を終わらしたかったけど、不可能でした(´・`、トホホ……

あ、あとお気に入り数が200突破しました。ありがとうございます。これから
もよろしくお願いします\$!(ÄÄ)\$:\$(

ビュービュービュー

理亞「うう………」ビクビク

未だに私は恐怖によって怯え、全身を震わせながら頭に手を当て蹲っていた。

今の私の頭の中はただ、『怖い』という文字で埋め尽くされていた。それ以外の言葉が見つからない。

あと、どれくらい私はこの恐怖を味わえばいいのだろうか。あと、5分？ 10分？ 1時間？ 2時間？……もしかして、永遠にずっとこのまま？ い、嫌だ

よお……。 (次第に夜は明けるのでそれはないが、そこまで彼女は恐怖によって正常な判断が出来ていない模様。)

ーーガサガサ

理亞「きゃあ!!」ビクッ

私の近くの草むらぎが大きな音を立てて揺れる。多分、またいつものように夜風に当てられてのものだと考えられるが、私はそれどころじゃなかった。さらに身を縮ませ、身体を震わせてしまう。

ーーポロッ

理亞「あっ!!」

身を縮ませたことにより、私のポケットから1つ、あるものが落ちてしまった。私はその時だけ、恐怖を忘れてしまったかのようにすぐにその、あるものを拾い、

付いてしまった土を払う。

そのあるものというのは、少しボロボロになっている小さな御守りだった。しかも、これはただの御守りではない。姉様が私が幼い時に作ってくれたものだ。

確か……私の成長を願って作ってくれたものだっけ。姉様が私のために作ってくれたということが嬉しくて肩身離さずにつつまようじになった。

ビュービュービュー

理亞「……」

夜風の音により、懐かしさに浸っていた私は今の現状に連れ戻される。そして、またしても恐怖を思い出し、すぐさましゃがみこんでしまった。

理亞「グズ………ん？」

余りの恐怖に手にしていた御守りをギュと力を入れて握っていると、その御守りについている小さなポケットらしき所から小さく、そしてクシャクシャになってい紙切れが飛び出ていることに気付いた。

なんだ、これ??

私は震えた手で、それを取り、クシヤクシヤになっているその紙切れを広げる。

理亞「わあ、これは……………」

御守りの中に入っていたクシヤクシヤな紙切れの正体は有名なテーマパーク内にあるお化け屋敷の入場券だった。

確か……………」



聖良(小学6年生)「理亞! 伊吹! 今度はあのお化け屋敷入ってみませんか!」

理亞(小学4年生)「え!」

伊吹(小学4年生)「……………」

そうだ。あのお化け屋敷は伊吹が私達の家に住むことになってから少し経ったあ

とに家族全員でテーマパークに遊びに行った時に姉様がそのお化け屋敷に入りたいと希望したんだ。

理亞「えっと……………その……………」

当然、そういうホラー系が苦手だった私は入りたくなかったけど……………

聖良「……………*ムシクシ*」↑断りづらいキラキラな眼差し

理亞「くっ……………(断りづらい。こんなの、嫌だとは言えない)……………分かったわ、姉様。」

聖良「*ムシクシ* !! 理亞、大好きです!!」

結局、姉様の眼差しに負けた私は嫌々ながらもお化け屋敷の参加が決まるのだった。伊吹は答えもすることなく、姉様にガツガチにホールドされて捕らえられていたため、強制参加は決まっていた。

でも、まあ……………、ママかパパの背中に目を瞑りながらしがみつけば——

聖良「よし！じゃあ、3人でいきましょう!!」

……………えっ!? 3人？ママとパパは？

「行ってらっしゃ〜い」

2人は私達の少し離れた所で笑顔で手を振っていた。何で？

「あ、パパ達は今から観覧車の方に行ってくるから。3人は楽しんでおいで」

ママとパパはそう言いながら、観覧車のある方へ腕を組み、イチャイチャしながら歩いて行った。なに2人だけロマンチックな所に行こうとしてるのよ!?! 私もそっちがいいんだけど!?

聖良「2人とも。チケット買ってきましたよ」
「」

ああ………。私の中で終わりを告げる音がした。

結局、姉様に連行された私たちはお化け屋敷の入口へと進み、チケットを受付の人に渡す。

そして、いよいよキィィ………と古い扉を姉様が開けてお化け屋敷の中へと入っていく。

暗いし、寒いし、周りの雰囲気の不気味過ぎて入って数秒で私は怖くなって姉様の腕にしがみつく。

理亜「うう………姉様あ………」

聖良「んー、なんか………イマイチですね。期待を裏切られた気分です」

そんな中、姉様は——

聖良「んー……………、68点ですかね。迫力が甘い。」

なんか……………、点数つけてた。それを聞いたフランケンシュタインも「え……………低くね？」と残念そうに呟く。申し訳ない気持ちになったんだけど……………!!?

フランケンシュタインを通り過ぎ、先に進む。

——ピタッ

背筋に何か冷たいものが当たったのを感じた。

理亞「ひい!?!」*ピタッ*

聖良「理亞?」

——ピタッ、ピタッ、ピタッ

理亞「きゃあ!?!」

聖良「理亞!?!」

首筋だけでなく、腕や足、なんなら、おでこや頬にまでも冷たい何かがあった。きつと、これはコンニャク的なものを遠隔で操作して私だけを狙って当てていたものだろう。

だけど、その時の私は怖くて怖くてたまらなくて。それどころではなくて。

理亞「うわあああああああ!!!」

聖良「理亞!?!」

伊吹「ツツ!?!」

遂に、耐えられなくなってしまう私は……その場から泣きながら大声を上げて走り出してしまったのだ。

走った。とにかく走った。無我夢中に走った。

途中で、私達よりも先に入っていたであろうお客さんや仕掛け人達とも、すれ違ってしまったが、私は構わず走り続けた。

そして、どれくらい走ったのかすらも記憶にないまま走り続けた結果――

理亞「ここ……どこ？」

気がついた頃には私は……お化け屋敷内で迷子になってしまった。



そうだ。思い出した。

私はこのお化け屋敷内で迷子になったことがあるんだ。

過程は違うものの、今と同じように怖くて周りが何も見えなくて、冷えてて、不気味な環境の中でたった1人だった。

その時も、身を縮ませて泣いていた覚えがある。あれから何年も経ってるのに……変わってない。

けど、なんだか懐かしいな。少しだけ恐怖が緩和されたかも。本当に少しだけね。

でも、そんな状況の中で私はどうやってお化け屋敷を抜け出せて、姉様と合流できたんだっけ？

タッタッタッ

………ああ、そうだそうだ。これも思い出した。

タッタッタッ

この時は………したら、なんとか状況を抜け出すことができたんだ。

タッタッタッ

偶然なのか、それとも必然だったのか。それは今、改めて考えても分からない。

タッタッタ

けど、もし今ここで……あの時と同じことをしたら……助かるのかな？

タッタッタ

いや……、そんな上手く行くわけないか。

タッタッタ

ここは施設内とは違ってかなりの広範囲の森の中のどこか。嫌だけど、あの時と比べたら見つけるのは難しいはず。そんなに甘くはない。

タッタッタッ

………けど。それでも。

タッタッタッ

もしかしたら………と。

タッタッタッ

もしかしたら………と、どうしても期待してしまう自分がここにいる。

タッタッタッ

………やってみよう。例え、無駄なことだと分かっていたとしても。もし、これ

でダメなら少しの間、恐怖を和らげることが出来たと思えばいい。

タッタッタッ

私はあの時と同じようにお化け屋敷の入場券をぎゅっと握りしめ、胸に寄せる。

タッタッタッ

そして、私は一言だけ呟いた。

タッタッタッ

それは、とても震えていて、お腹に力が入っていないからか、夜風の音でかき消されてしまうかもしれないほどの小さなものだが………

タツタツタツ

あいつにしっかりとこの言葉を耳にして、来てくれることを信じて。

理亞「助けて……………。伊吹……………」

ガサガサ

理亞「……………」

私がそう呟いた瞬間に、傍の草むらが揺れる。しかもこの音は夜風による音では無かった。

明らかに何か走って通る音だった。

そして——、

その音を発しているのが正体を現した。

そいつは、いつもは綺麗な白髪なのに、泥や葉っぱ、枝がついていて——

いつも濁っている瞳は更に濁っており——

着用していた学校用ジャージも髪同様に泥まみれに汚れていて、しかも所々転倒、もしくは枝に引っかかってしまったのか、破れていた

そして、私と同じくこういうのは苦手だからか、恐怖で全身を震わせながらも両手を動かした。

伊吹『やっと……………見つけたよ。理亞ちゃん』ビュン

理亞「……………伊吹い。」キョロキョロ

数年前、私がお化け屋敷で迷子になった時、私を見つけてくれた伊吹が、あの時、あの瞬間にかけてくれた言葉を手話で伝えながらゆっくりと微笑んだ。

次回、オリエンテーション合宿完結です。これは絶対です
面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価お願いします。

18話 「オリエンテーション合宿⑩」

ようやく終わったよ。無駄に続かせてすみません笑
そして、中学校編もこれにて終了です。

辺り一面は暗闇で見えないはずなのに、まるで一筋の光が刺しているかのよう
に目の前にいる伊吹だけははっきりと見える。

もしかしたら……、幻なのではないか、と疑心になった私は震えた手でこいつ
の腕に触れる。すると、空振ることなく、しっかりと伊吹の腕に触れることが出来
た。本物だ。

伊吹『さ、帰ろう。上野さん達が心配してたよ。』

伊吹は手話で私にそう伝える。そうしたいのは山々だけど……

理亞「ごめん……。今、私動けない……。」

伊吹が助けしてくれたことによって、心の底から安心したせいかな、腰が抜けてしまいその場から動くことが出来なかった。力を入れても情けない話、下半身が動くことはない。

伊吹『……………』

すると、伊吹はくりりと後ろに振り向いて私のすぐ目の前にしゃがりこんだ。そして、両手で自分の背中に何かジェスチャーを行い始める。

これってもしかして……………

理亞「背中に乗れってこと？」

私がそう言うと、右手の親指がグッと立てられる。どうやら当たったようだった。

理亞「……………」

伊吹『……………??』

いや、こっち振り向いて首を傾げられても。そんなすぐに行動出来るんわけないでしょ。

うう……………、どうしてだろうか。物凄くドキドキしてる。きっと、顔も真っ赤に染まっていることだろう。

しかし、戸惑っている暇なんてない。今もこうしているうちに、広場にいる人達は心配しているんだ。

意を決して、私は伊吹の背中に身体を預ける。すると、伊吹の匂いが鼻の中に入ってくる。一緒に住むようになって何度も何度も嗅いだことのあるこの匂い。今思えば、1度もたりとも嫌だとは感じたことがなかったな。

そして、何より……………

理亞「温かい……………」。

思わず、私は言葉として呟いてしまった。こいつの背中が温かくて心地よい。さっ

すると、激しく胸が締め付けられるように痛みを感じる。それはどうしてか。

理由は………もう分かった。いや、分かるようで分からなかったこの気持ちがあった今、ハッキリと確信したただけだ。

―――どうして、こいつといると胸が昂るのか。

―――どうして、こいつが私じゃない違う女と一緒にいるのを見ると苛立つのか。

―――どうして、こいつと話せないと悲しくて、そして寂しく感じてしまうのか。

―――どうして、今、こうしてこいつと一緒にいることに『幸せ』だと思っ
てしま
うのか。

それは、私がこいつのことを……………天草伊吹のことが……………

いや、この気持ちを……………想いをここで明らかにするのはまだやめておこう。伝え
た所で、無駄に胸が苦しくなるだけだと思おうから。

だけど、いつか……。いつかは。

この想いを……。伊吹に伝えたい……。な。



「鹿角さん……！」

無事に広場まで戻ってくると、上野さんと紀平さんが涙を浮かばせながら私達の方へと駆け寄る。伊吹の言う通り、本当に心配してくれたみたい。

「もー!!いつまで経っても帰ってこないから心配したんだよ??馬鹿馬鹿馬鹿!!」
「オホオホカ」

「う、ごめん。」

紀平さんが大声を上げながら、私の尻を叩いてくる。しかし、力を加減してくれているからか、そこまで痛くはない。てか、オホオホオっていう効果音って鳴るのね。

「でも、無事で良かったです。」

上野さんはニコニコとさせながら言葉を出す。そして、未だに私の尻を叩く紀平さんに注意の言葉を掛ける。

ちとせ「鹿角。」

すると、今度はちとせんが近づいて私たちに言葉をかける。

ちとせ「事情は………八代から聞いている。色々と話したいことはあると思うが、今はオリエンテーション合宿。だから、後日に互いの両親を交えて話したいと考えてる。それでいいか?」

理亞「あ、はい。大丈夫です」

ちとせんの言葉に、私は頷く。少し離れたところで、ぐったりとやつれた八代さんがいた。ちとせんに色々と問い詰められたからであろう。

ちとせ「あと、天草。鹿角を連れてきてくれたことに関しては褒めてやりたいところではあるが、無断で行動に出たことは見逃すことはできない。あとで私の部屋に来るように」

伊吹「……………」カカ

理亞「ツツ!?先生、伊吹は!!」

ちとせ「お前の言いたいことは分かるよ。けどな、それでもこればかりはしっかりと注意しないとイケない。なにせ、今回は上手くいったかもしれないが、もしかしたら2人まで危険な目に遭って居たかもしれないからな。……………せめて、一言だけでも私達、教師陣に声をかけて欲しかった。」

理亞「先生……………」

最後の一言だけ、活気がなく、むしろ悲しそうにちとせんは呟いた。

だけど、先生の気持ちも分かる。確かに、今回は伊吹が奇跡的に私のことを見つけてくれたたおかげで大きな事件になることは無かった。

しかし、もしも、伊吹が私のことを見つけることが出来なかったら??もしも、伊吹さえも私と同様にこの広い森の中で迷子になってしまったら、さらに迷惑をかけることになってしまう。

それに、本来ならば教師という立場はこういう行事で何か事件が起こらないように私たち生徒を管理しなければならない。何かあってしまったのならば、対応するのは教師側である。

それなのに、今回は何も役に立つことが出来なかった。気づいた頃には伊吹はもう動いていて、気付いたら解決していた。

責任感がだれよりも強く、誰よりも生徒想いなちとせんからしたら、それはとても辛いものだったと思う。

ちとせ「とりあえず、今お前たちに伝えることはそれだけだ。あ、天草は鹿角を我邪丸先生がいる部屋に連れてってあげてくれ。それじゃあ、解散!!」

解散、と言われたあと、伊吹はそのまま私を背中に乗せて歩き出す。

理亞「ごめん……………私のせいで」

歩いている途中で、私は伊吹に謝る。これは当然だ。私のせいで彼はあとで怒ら

れてしまうのだから。

だけど、伊吹は私を背中に乗せているせいで、両手が使えない。つまり、無口なこいつが言葉を出さない限りは返答する術がなかった。

伊吹「……………」

分かってはいたけど、こいつは何も話さない。ただ、私を抱えてひたすらゆっくりと歩いているだけだった。

そして、養護教諭の我邪丸先生がいる部屋まで辿り着き、私の口で先生を呼んだあと、何人かの先生の手を借りながら私は伊吹の背中から離れる。この時、少しだけ残念な気持ちとなる。もう少しだけ……………いたかったな。

伊吹『じゃあ、理亞ちゃん。僕は今からちとせ先生の所に行ってくるね。』

私を解放したことで、両手が使えるようになった為、手話で私に言葉を伝える。その後、ペコリと先生達に頭を下げたあと部屋から出ようとした。

理亞「ま、待って！」

部屋から出ようとした伊吹に向かって言葉を出して呼び止める。伊吹は首を傾げて顔だけこっちに向ける。

理亞「……………ありがとう。」

私は顔を赤くさせながらも、伊吹に感謝の言葉を伝える。今思えば、見つけてくれた時のお礼を言っていなかった。

私の言葉を聞いて、伊吹は何も言わなかったけど、嬉しそうに微笑んだ。その後、そのまま部屋から出て行った。

伊吹が目の前からいなくなって、少し寂しく感じてしまう。だけど、そこまでじゃない。

だって、また……………すぐにあいつに会えるのだから。

また……………あいつと一緒に帰れるのだから。

そう思うと、気持ちがすごく楽になった。

因みに、先生に応急処置を受けている間に他の先生たちに伊吹との関係性をしつこく問い詰められました。

そして、次の日。

2日目は朝ごはんであるサンドイッチを上野さんと紀平さん、そして伊吹と一緒に作ったあと、近くの川でひたすら遊んでから、オリエンテーション合宿のスケジュールが終了した。

帰りのバスは上野さんの予定だったが、八代さんの願いによって行きと同じく伊吹が隣になった。その時の八代さんは伊吹に対して、怖がっている様子が見られた

けど………何かしたのだろうか。まあ、いいけど。

伊吹が隣にいるバス移動は行きの時とは比べ物にならない程の心地よい時間だった。ずっとこれが続けばいいのにと内心思ってしまう。

そして、数時間後。私達は以前のように一緒に我が家である『茶房菊泉』へと帰るのだった。



これはまだ、理亞と伊吹がオリエンテーション合宿1日目の夜のこと。

「理亞と伊吹がいないと寂しく感じてしまうね」

聖良「そうですね。本当にその通りです」

テーブルで理亞の姉様こと聖良と彼女達の父親が2人で顔を合わせながら夕食

を食べていた。母親は少し出掛けていて、家にはいない。

「そういえば、部活はどうだい？大会、もうすぐだろう？」

聖良「順調ですよ。ウエンディと私の絆は最強です。絶対に優勝してみせます。」

「それは、楽しみだね。期待してるよ」

ごくありきたりな会話を交えながら、2人の夕食は続いていく。

そして、カチャ……………と手にしていた茶碗と箸を綺麗に置いた聖良はいつも通りの穏やかな表情を浮かべたまま口を動かした。

聖良「……………父様。」

「ん？なんだい？」

聖良「そろそろ……………教えてきただけませんか？『天草伊吹』について。」

この一言で、この場の雰囲気が一気に凍ったかのように変わったのを聖良は感じ

た。

「……………伊吹について？ハハ、何を言ってー」

ー
ー
バ
サ
ツ

「……………ッッ」

聖良は父親が話している途中にテーブルに1つのファイルを置く。それ見た瞬間、父親の言葉は止まり、更にいつもは聖良のように穏やかな表情をしている顔つきが少しずつ険しくなっていく。

聖良「……………以前、父様の部屋を掃除していた時に、これが出てきました。」

「……………」

聖良「気になったので中身を拝見してしまいました……………これは、どうい
うことですか??」

「……………」

聖良「父様、まさか伊吹は……………!!」

「……………全く、君って子は。普段はポンコツなのに、いざという時は鋭いんだから。そういう所、お母さんにそっくりだよ」

負けたと言わんばかりに父親は額に手を当て、顔を左右に動かしながら言葉を出す。

「本・当・な・ら・こ・っ・ち・で・全・て・を・終・わ・ら・せ・て・か・ら、改・め・て・お・前・た・ち・に・あ・の・子・に・つ・い・て・伝・え・よ・う・と・思・っ・て・い・た・が……………無・理・そ・う・だ・ね。だ・か・ら、聖・良。特・別・に・お・前・に・だ・け・話・そ・う・と・思・う。こ・れ・は・何・が・あ・っ・て・も・絶・対・に・理・亞・に・は・言・っ・て・は・い・け・な・い・よ。」

聖良「……………分かりました。」

「いいかい？伊吹はーーーーー」

聖良「ーーーーッ！！？？」

父親から発せられたのがどんな内容だったかはこの場にいる聖良しか知らない。

そして、その日から月日は流れーーーー

鹿角姉妹と無口な居候は高校生へと変わった。

終盤あたりやり投げ感があると思いますが、元々こういう感じで進める予定だったのでお気になさらず。

次回から高校生辺です。中学校編で省略した分は番外編にて投稿していこうと考えてます。(聖良の馬術部の大会や体育祭の話など。)

ようやく、ここから物語が進むと言っても過言ではありません。みんな大好き、あのスクールアイドルが生誕します!!あと、姉様のポンコツも更に加速していきます!!お楽しみに。o(ε・ω・ε・+o)ゞヤ… !

面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価お願いします

19 話『高校受験』

あれから数年の月日が計画した。

姉様とあいつといた中学時代は思ったよりも楽しかったことや嬉しかったことがあれば、まるで当然のように悲しかったことや辛かったことなど沢山あった。

けれど、今更何を言ったところで時間は戻らない。すべて、私の過去……いや、思い出となって永遠に刻まれていくことだろう。

私はふと、窓を見た。そこから映る景色はこの街に生まれ、物心を付いた時からもう数えきれないほどにまで何度も何度も目にしてきた雪によって造り上げられた銀世界。

しかし、この景色を見て飽きたことなんて1度もない。少なくとも幻想的に綺麗だと思っから。

机の上に置かれている時計を見てみると、時計の大きな針が『12』から『2』へと移動していた。まだ数分しか見てないと思っっていたら、もう10分も景色を見ていたようだ。

私は固くなった身体をほぐすかのように背伸びをする。すると、ポキポキと骨が気持ち良く鳴った。

そして、私は頭に巻いている『合格！』と綺麗に刺繍されている手作り満載なハチマキを気持ちを入れ替えるために少しだけ強く巻き直して――

理亞「よし!!やるわ!!」

『函館聖泉女子高等学院過去問題集』と書かれた分厚い冊子のページをめくるのだった。



――ザクザク

理亞「ん？」

あれから深夜の2時くらいまでやったあと、眠りについて5時間くらい経った

頃。外から聞こえてくる音によって私は目を覚ました。

ザーザクザク

明らかに何かを崩している音。私はベッドから起き上がってさっきと同じように窓の外を見る。

すると、何着もの厚着を着て手に持っているとても大きなスコップで大雪によって積もってしまった雪を崩す1人の男が視界に入る。

中学時代に比べて、明らかに髪の毛の毛量が増え、私があげたヘアゴムで軽く纏めている白髪頭は雪の景色の混合して凄いいことへとなっていた。

彼の特徴ともいえる腐った目は雪の景色によって今だけ少しだけマシになっているように見える。

てか、あいつ……………。私と同じ受験生なのにこんなことしていいのかしら??もうすぐ試験だと言うのに。まあ、元々は頭いいから大丈夫だとは思うけど……………。

ザーザクザク……………ドサドサ!!!

「—————!!!」

理亞「あーあ」

屋根の上の雪を崩していたら、その崩した大量の雪が運悪く男に襲いかかり、覆い被さってしまった。こんもりとした雪の塊が完成し、モゴモゴと動くがどうやら抜け出せないらしい。

理亞「ったく、なにやってるのよ、あいつは。しょうがないわね……………」

私はため息を吐いたあと、上着を着て家を出る。そして、窓から見ていた場所へと移動する。すると、当然のことだけど先程の崩れたことによって完成した雪の塊があった。未だにモゴモゴと動いている。……………なんか、少しだけ面白いかも。

でも、流石に今の状況のままだと可哀想だから早く助けることにしよう。スコップを手にして中にいる奴を傷つけないように注意を払いながら雪の塊を削っていく。

そして——

理亞「おはよう、伊吹。今の気分はどう？」

伊吹『……………』『ブルブル』

雪の塊の中から、無口で私たち鹿角家に居候している少年、天草伊吹が顔を白くさせブルブルと震えている状態で発掘された。



伊吹『あゝ、生き返ったあ!!』

無事に伊吹を救出したあとは、ママに頼んで風呂に湯を入れてもらい、パパがカチコチとなって身動きが取れない伊吹を抱えてそのまま浴室へと連行しぶち込んでくれたおかげで、何とかこいつは復活することができた。

まるで死にそうなくらいにまで青白かった表情が嘘だったように、体がお湯によって温まって血流が良くなかったからか、少しだけ全体の肌が赤く染まって健康

な感じへとなっていた。

理亞「はいこれ。ママがアンタのために作ったホットミルクよ」

伊吹『ありがとう』

湯気を立てているホットミルクが入ったマグカップを伊吹に渡す。伊吹はそれとても美味しそうにふうふうと息をかけ冷ましながら美味しそうに飲んでいく。

私も自分の分のホットミルクをゆっくりと口にする。……熱っ。けど、美味しい。

1つの部屋で、伊吹と2人っきりでいる子の時間は悪くは無い。むしろ、嬉しい限りだ。このまったりとした時間が永遠に続けばいいのって思ってしまう。

しかし、そういう訳にはいかない。

理亞「……勉強しないと」

伊吹と一緒にいた時間を堪能した結果、少しだけ休みすぎたかもしれない。休んでしまった分を取り戻さないで。

私と伊吹は今、中学3年生であり受験生だ。私たち含めた学年の子達は志望する高校に行くために死にものぐるいで勉強に励んでいる。

私が志望する高校は函館聖泉女子高等学院。理由はただ1つ。姉様がその高校に通っているからだ。姉様のいない高校なんて考えられない。姉様といられるのは、たった1年だけだけど、それでも私は姉様と一緒に高校生活を過ごしたい。他の人からしたらくだらない理由かもしれないが、私にとっては大きな理由なのだ。

しかし、その高校は県内の高校でも上位に入るほどのレベルの高い学校であるため、並の学力では入ることは厳しい。実際、過去にやった模試の結果を見ても判定は良くしてCであるため、相当頑張らなくてはならない。

私は机の上に過去問とノートを広げ、勉強モードへと入る。確か今日やるのは………：数学か。しかも確率じゃない。私、確率苦手なのよね………。

理亞「ねえ、伊吹。少しいい？」

伊吹『？』

未だに美味しそうにホットミルクを飲んでいる伊吹に私は声をかける。すると、白いヒゲを作らせた伊吹が私の方に顔を向いて首を傾げた。

理亞「ちょっと、分からない所があるんだけど教えてくれない？」

私は過去問を手にして、伊吹に見えるように向ける。さっきも言ったけど、伊吹

は頭が凄くいい。学年でも試験は常にトップ3は維持していたし、こいつの志望校は偏差値70を超えるあの札幌〇高等学校だ。しかも、模試による合格判定は余裕のAという結果も残している。

伊吹にとって、この過去問に載っている確率なんておちゃのこさいさいだろう。

伊吹『んー、ちょっと待って。1回解いてみる。紙とシャーペン借りてもいい？』

理亞「うん。……はい」

私は過去問とメモ用の紙1枚とシャーペンを伊吹に渡す。受け取った伊吹は過去問を目にしたあと、理解したのか何回か頷くと、紙にスラスラと式を解いていく。よくよく思い出してみると……、こいつ、いつ勉強してるのかしら。私ที่บ้านで見かける限りでは、伊吹が机に向かって勉強してる所なんてほぼ見たことがない。特撮の玩具で姉様と2人で遊んでいるか、店の手伝いをしているか、最近、誕生日でクラスメイトの子に貰ったサボテンを嬉しそうにぽけーっと眺めているぐらいだ。

ずっと一緒にいる訳では無いため、目が届かない場所で密かにやっているんだろ

うけど………。それでも、普通に偏差値70いけるのかしら？

そして、あつという間に私に分からなかった問題の答えを伊吹は真顔で導き出し、解いた紙を私に差し出した。見てみると、とても綺麗な字で数字や文字が書かれている。

伊吹『これはね、問題文がややこしく書いてあるけどやり方は公式通りだよ。』
理亞「公式……。うん、公式ね。公式使うのね。コシヤ……。……。ウハ、

タ、コシキツツルヨ。」

伊吹『……。まずは公式からやろうか』

理亞「……。よろしく」

こうして、伊吹先生による確率の授業が始まるのだった。正直な話、数学担当の杉山先生より何百倍も分かりやすかった。



そして、あれから更に数ヶ月が経ち、遂に高校試験の日を迎えた。

理亞「よし、大丈夫ね。」

私は忘れ物がないか何度も何度も確認して、ないのを確認してから玄関へと向かう。

すると、玄関には姉様が心配そうにしながら立っていた。

聖良「理亞、忘れ物は大丈夫ですか？受験票は？ちゃんと筆記用具持ちましたか？」

理亞「ええ、大丈夫よ」

さっい、何度も確認したから大丈夫だ。

聖良「理亞、焦らず落ち着いて問題を解くんですよ。時間配分を間違えてしまうと後の教科にも影響が出てしまいますからね」

理亞「うん、分かった。」

聖良「もし、万が一、理亞が落ちても、私が学園長に身体を払って何とか合格にしてみらうので自信もって挑んで下さい!!」

いや、唐突に何言ってるの、この人!?! そんなんで自信持てるわけないでしょ!!
普通に重いし気まづくなるわ!!

理亞「だ、大丈夫よ、姉様。ちゃんと合格できるように頑張るから……………」

聖良「なら、良かったです。」

すると、部屋の奥から私と同じ受験日を迎えた伊吹が荷物を持ってやって来る。

聖良「伊吹も頑張ってくださいね。家で応援してますから」

伊吹『ありがとう』

聖良「もし、伊吹も不合格になったら私がー」

理亞「姉様、シヤラップ!!」

言わせないよ!? 何、伊吹にも同じ言葉を言おうとしてるのよ!! 聞かれた伊吹の

気持ちにもなって!!

聖良「……………むう」プター

可愛らしくむくれてもダメだから。そんな『貴女達のための行動なの??』みたいな表情されても私達が困るだけだから。

伊吹『??』

理亞「ああ、気にしないでいいわよ。それより、早く行きましょ。」

ポンコツ化とした姉様を放っておいて、私は靴を履いて外へと出る。伊吹と姉様

が私の後に続く。

私が志望する函館聖泉女子高等学院は私の家から歩いて行ける距離だが、伊吹が志望する札幌〇高校はここからかなり離れているため、電車とバスを使わなくてはならない。

それなのに……………

理亞「伊吹、本当にいいの？学校までついてってくれるって……………」

伊吹『うん。そもそも、バス停に向かう途中に理亞ちゃんが志望する学校があるからね。だから、それまで一緒に行くよ』

伊吹は両手を動かしながら私に向かってそう言ってくれる。

理亞「あ……………ありがとう……………」

なんだか、恥ずかしくなって思わず目を逸らしてしまった。きっと、両頬も赤く染まっているに違いない。うう……………。

伊吹『じゃあ、時間だし行こっか』

理亞「え、ええ。」

伊吹は私にそう言ったあと、ゆっくりと歩き始める。私も伊吹の隣に並びながら

足を進めた。

聖良「2人とも、頑張ってくださいーい!!」カカカカ

その様子を眺めながら、姉様は私たちに向かって火打石を打っていた。周りに変な目で見られないように少しだけ早歩きしたのはここだけの話。

そして、伊吹と雑談したり問題を出し合ったり、面接の練習をしたりしながら歩いているとあつという間に函館聖泉女子高等学院に辿り着いてしまった。周りを見ると、私と同じ受験生が緊張しながらも学校に入っていくのが見られる。その際、伊吹を見た瞬間に頬を赤く染めた女子も何人か居たのを私は見逃さなかった。

理亞「……………じゃあ、行ってくる」

伊吹『行ってらっしゃい。頑張ってるね。』

門の前で私は伊吹に向かって言葉を出す。不思議と受験前だというのに私は落ち着いていた。きっと、伊吹が近くにいるくれたからかもしれない。

もし、こいつが居なかったらきっと私は緊張で 押しつぶされていただろう。むしろ、ここで伊吹と別れることで寂しさの方が強くなっている気がする。

伊吹は手を振ったあと、振り返ってバス停に向かって歩み始めようとしたところで――

理亞「い、伊吹!!」

伊吹『??』

私は伊吹の名前を呼んだ。伊吹も首を傾げながら首だけを私の方に向ける。伊吹は言ってくれたのに、私が言わないのはおかしな話だ。

だからこそ、私は伊吹に拳を突き出しながら言いたかった言葉をかけた。

理亞「……………伊吹も頑張ってね」

伊吹『……………うん!』

伊吹も返すように拳を突き出しながら頷く。その後は、こっちに振り向くことなくバス停の方へと足を進める。私はあいつの姿が見えなくなるまで、その場で見つめていた。

理亞「よし……………行こう！」

覚悟を決めた私は門の中をくぐり、校舎の中へと入っていくのだった。もし、互いの志望校が受かったら……………高校生活は離れ離れで過ごすことになるかな……………と心の中で思いながら。



伊吹と理亞が高校に向かったあと――

聖良「♪」

聖良は自分の部屋を掃除していた。

聖良「おや？」

聖良は床に掃除機をかけたあと、教科書や雑誌がしまっている本棚を整理していると、教科書と参考書の間に見られない紙袋があるのを見つけた。

ほんの僅かに見覚えがあるが、正確にどんなものだったかは思い出すことが出来なかった。

聖良「なんでしたっけ、これ。中身を見てみますか。」

聖良は器用に紙袋が破れないように丁寧に開け、中身を取り出す。すると中身から出てきたのは………1冊の冊子と1枚のDVDだった。

聖良「……………『スクールアイドル特集V O I 2 0 』A | R I S EライブDVD
付き』??」

聖良が見つけた裏に『若本ちとせ』と書かれているこの1冊の冊子と1枚のD
VDによって、この物語にようやくあのスクールアイドルグループが誕生すること
となるのだが、それはまだもう少しあとのお話。

20話 「高校受験」

なんか、投稿ミスってたばいですね。

教えてくれた方、ありがとうございます\$!(ÄÄ)\$;\$
改めてどうぞ。

試験から数日が経ち、遂に合格発表日がやってきた。私はママが作ってくれた朝食をなんとか喉に通し、中学の制服へと着替えていく。

ちなみに、今日は試験日と同じく、伊吹と一緒に向かう予定だ。

聖良「理亞〜」コソコソ

制服に着替え終えると同時に、私服姿（『理亞の姉ですが何か？』とプリントさされているTシャツ）の姉様がドアをノックしながら部屋に入ってくる。

聖良「遂にこの日がやって来ましたね。理亞、緊張してますか？」

姉様は少し心配そうにして私に言葉を出す。何か………申し訳ないな。だか

ら、私はなんとか笑顔を作って返答した。

理亞「ううん、全然平気よ、姉様。大丈夫!!」

はい、嘘です。めちゃくちゃ緊張してます。もう、さっき食べた朝食を吐きそうなのぐらい緊張してます。てか、緊張関係なしで吐きそう。だって、今日の朝食……………カツ丼だったもん。

いや、ママの気持ちは分かるよ？今日は私にとってとても大切な日だもん。試験当日もカツ丼だったし……………。でもね……………、やっぱり朝からカツ丼は超絶へヴィだよ、ママ。それを完食する私も私だけど。

聖良「母様、とても心配していましたよ。……………こんな大切な日に朝食で出したカツ丼をペロッと完食した理亞のことを。」

そっち!?!私の高校の合否の心配じゃなくてそっちの心配!?!

聖良「母様自身も面白半分で理亞にカツ丼を出したつもりだったのに……………まさか完食するとは思っていませんでした。」

え、何??ママ、私に面白半分でカツ丼出したの!?!それ聞いてすごくショックなんだけど!?!完食した理由も普通に残すと勿体ないから無理してまで食べたの

に……………。

聖良「ちなみに、私の時も試験と合格発表日の朝食はカツ丼でしたよ」

理亞「そうだったの？」

聖良「はい。」

容姿端麗と奇怪千万が組み合わさった存在である姉様のことだ。どうせ、どんぶり1杯どころか3杯ぐらいお代わりして何事もなく完食してるに違いない。

聖良「流石に朝からカツ丼はキツイので、半分くらいしか食べられませんでした」

(・ω・) (E) ヌキョー

理亞「そこは普通なの!？」

聖良「り、理亞？」

理亞「あ、なんでもない。こっちの話……………」

どうしてこういう時に限って普通の行動をとるの?? 少しでも姉様を馬鹿にしてしまったことに関して罪悪感を覚えただけ……………。

私はその罪悪感を和らげるために、姉様に話しかけることにした。

理亞「そういえば、姉様は合格発表日の時はどんな感じだったの? やっぱり緊

張した？」

よくよく思い出してみれば、姉様の合格発表日は私と伊吹は学校だったため、どんな感じだったのか分からないし、よく覚えていない。やっぱり、緊張したのかな？

聖良「はい、もちろん緊張しましたよ。」

姉様は懐かしむように言葉を出した。流石の姉様もどうやら緊張していたらしい。まあ、これが普通よね。

聖良「合格してるか不安になって、たまにウエンディに大丈夫かって話しかけてましたもん。」

理亞「いや、ちょっと待って？姉様。もしかして……ウエンディと一緒に行ったの??」

ウエンディとは、私達が通っていた中学で飼育されている馬のことであり、馬術部に所属していた姉様のかけがえのないパートナーである。

聖良「はい。1人だと心寂しかったので……。何か問題ありました？」

大ありよ!?毎度の事ながら、何してるの!?

聖良「そういえば、あの時は周りの目線が凄かったですね。」

でしようね!? そんな合格発表日に馬に跨ってやって来るなんて誰も想像してないわよ!! 恐らくその場にいた人々は合格した喜びや不合格だった悲しみを遥かに上回ったに違いない。

聖良「あ、でも合格だって分かった時は安心しましたよ。嬉しすぎて、帰りは少しだけはしたなかったですけど、色んな場所に足を運んで買い食いしながら帰りましたね。」

理亞「まさかだと思うけど、ウェンディに乗りながら………じゃないよね? 違うよね?」

聖良「え? 乗りながらでしたけど……。」

理亞「oh……………」

この瞬間、私の頭の中で馬に乗りながらスーパールの肉まんを頬張っている姉様の姿を思い浮かんでしまった。可愛いけど、その光景がカオスすぎる。

「理亞く、時間大丈夫?? もうそろそろ時間じゃないの?? 伊吹、玄関ですっと待ってるわよ。」

理亞「あ、もうそんな時間か。」

ママの声が聞こえたあと、時計を見てみると、もう出発する時間となっていた。姉様と話しているうちにだいたい時間が経っていたらしい。

聖良「どうですか？緊張……………薄れましたか？」

そう言って、ニコツと微笑む姉様。まさか……………

理亞「緊張を和らげるために……………わざわざあんな作り話を？」

落ち着いて考えてみれば、姉様の過去は普通におかしい部分が沢山あった。もしかしたら、姉様は私のために作り話を話してくれたのかもしれない。

聖良「いえ？どれも本当の話ですが……………」

え、あ……………うん。そうだよね。姉様だもんね。

私は深く考えるのをやめて、そのまま荷物を持って合否を確認するために玄関で待っていた伊吹と共に高校へと向かった。



理亞「ってことがあったのよ。普通に考えてありえない??」

伊吹『いや、何してんの?あの人』

伊吹と並んで高校に向かっている途中に、私は先程あった内容を伊吹に口にしてきた。それを聞いて、伊吹も無表情だが、呆れているように見える。

伊吹『でも、そのおかげで緊張……………なくなったんじゃない?』

理亞「……………悔しいけどその通りね。してやられた感じ。」

伊吹『結局今まで聞いてこなかったけど……………、試験はどうだったの?』

そういえば、こいつ……………。遠慮してなのか私の試験について聞いてこなかったわね。

理亞「筆記はよく出来た方だと思う……………。面接は……………何回か緊張してどもっちゃったけど、しっかりと自分の気持ちは伝えたつもり」

筆記は姉様や伊吹のおかげでしっかりと解けた方だと思う。自己採点しても最低でも7割はとっている。あとは周りの出来次第だ。

理亞「あんたはどうなのよ」

伊吹『僕?……………いつも通りかな』

こいつのいつも通りはほぼ完璧といっても過言ではない。しかし——

伊吹『ほら、僕って……、こんなじゃん??面接とかほぼ執筆で伝えてたし……』

そう。だいたいの高校の試験には面接がある。面接となると、優秀な伊吹も少なからず周りと比べて不利になってしまうだろう。

だいたいの受験者はどの質問が来ても答えられるように事前に考え、口にする。その様子を見て、面接官は高校に入れるべき生徒を選別する。

しかし、伊吹は言葉を出すことができない。それだけでも、失礼ながらマイナスへとなるだろう。いくら適切な文字を試験官に伝えたとしても、やはり言葉と比べてしまったら自分の気持ちを相手に伝えることはできない。

伊吹の場合は本当に運で決まることになると考えられる。学校側も特例である伊吹に関しての話し合いを何度も何度も行ったことだろう。

伊吹『ま、滑り止めには合格してるし何とかなるよ。』

伊吹はそう言いながら、道中に設置されていた自販機で購入したミルクティーを開けて口にする。

私も一緒になって自販機で購入したホットティーを開けて口にする。体内に入ってくるホットティーが冷えてしまっま体を温めてくれる感触が全体に伝わってくる。買って正解だった。

飲み終わり、缶をゴミ箱に捨てて再び高校へと向かう。

そして、ようやく目的地へと到着しようとした瞬間――

「ぐず……………、ダメだったよお……………。ママ、ごめんなさい……………。ごめんなさい」
サッロサッロ

「あんなに頑張ったのにね……………」

目の前から、両手に涙を大量に流し、嗚咽を交えながら隣にいる母親らしき女性に何度も何度も謝る1人の女子が現れた。彼女の制服は見覚えがある。隣町にある中学校の制服だ。つまり、彼女はこの高校に受験して、様子を見るからに……………、

落ちてしまった子だ。

今の私の頭の中にはその3文字しか思い浮かばない。そしてひたすら、その3文字を心の中で連呼する。

このままだと、確実に危ない。どうしたら……、と思ったそんな時だった。

ーガシッ

理亜「……………伊……………吹？」

急に左手に温かさを感じた。見てみると、伊吹が私の左手を握っていた。

伊吹『……………』

伊吹は手話や執筆で何かを伝えることなく、じっと私の顔を見つめる。彼の濁った瞳からは、明らかに何かに怯えてそうな私の顔が映っていた。

こいつが何をしたいのか、全く分からない。

伊吹『……………』
『グッ』

理亜「わわ……………ちよっと!!」

私の左手を掴んだまま、伊吹は高校の校門に向かって歩を進める。無理やり、引つ

張られる私はこいつの手を解こうと力を入れるが、離れることは出来なかった。私自身、力はある方なのだが、それでも無意味に近かった。

そして、校門がすぐ目の前まで連れてった瞬間に、伊吹は私の手を離したあと、すぐに私の後ろへと移動し、思いっきり背中を押した。

理亞「わわっ!？」

それによって、私はけんけんぽという形で片足で何回か飛びながら、校門をくぐった。

理亞「あ、あんた！なにするのよ!!」

伊吹『こんな所でうじうじしても結果は変わらない。』

理亞「……………ツツ」

私が声を上げると、伊吹は手話で私に返答をする。その時の伊吹の威圧に思わず、言葉を詰まらせてしまう。

伊吹『僕の知ってる理亞ちゃんは……どんな相手だろうが、勝負前で挫けるとなく真っ向に突き進む優しい子のはずだ。』

理亞「伊吹……………」

伊吹『んで、どうする？行くの？行かないの？』

理亞「……………すうう……………はああ。」

伊吹の問いに、私はその場で大きく深呼吸を行った。それで、だいぶ気持ちが落ち着き、冷静になることが出来たと思う。

私は馬鹿だ。伊吹の言う通り、こんなところで怖がろうがびろうが、うじうじしようが、受験結果が変わることは無い。受かってるか、落ちてるか。その二択のどっちかだ。

むしろ、こんなところでつまづいている時点で、応援してくれているママやパパ、そして勉強を必死に教えてくれた姉様やこいつに失礼な行為だ。それを今になって

気付くなんて。

私は真剣な表情を浮かべて伊吹の顔を見ながら言葉を出した。

理亞「行ってくる」

伊吹『……………行ってらっしゃい』

伊吹が手を振るのを最後に、私は1人で学校の奥へと進む。恐らく、あの人貯まりになっている掲示板に合格発表が掲示されているのだろう。

私はポケットから受験票を取り出す

『604』

これが、私の受験番号だ。もし、あの掲示板にその番号があれば、私は無事に合格したことになる。

私はゆっくりりと、掲示板の方へと進める。できるだけ、周りを見ないように足を進めるが

「わーい、受かったー！」

「うええん！落ちだアアア」

「よく頑張ったねえ」

「ま、こんなもんか。」

「ほらあ、だからあんなにーー」*ギョギョ*

理亞「……………ッッ」

視界を遮っても、周りの声が入ってくる。それは想像通りのものだった。またしても、少しだけ吐きそうになってしまったが、堪え前に進む。

そして、遂に掲示板の前へとやってきた。その掲示板にはずらーっと数多くの番号が乗っている。

私は590番辺りからゆっくりと目をやる。この時の私の心臓は周りにも聞こえるんじゃないかと思うぐらいまで鳴り響いていた。

590

593

60	6	6	6	5	5	5
∴	0	0	0	9	9	9
	3	1	0	7	6	5

そして、私の番号は……………



番号を確認した私は校門へと戻っていく。さっきの場所から変わることなく伊吹はその場で立って、私を待っていた。

私の姿を捉えた伊吹はこっちへとやってくる。

伊吹『理亞ちゃん……………』

心配そうに見つめる伊吹に対し、私は……………

理亞「あったよ、伊吹。私の番号……………。合格……………してた!!」キッゴロ

伊吹『……………!!?』

ずっとずっと堪えていた涙を流しながら、スマホで自分の受験番号である『604』が掲示されている写真を伊吹に見せる。

伊吹『おめでとう、理亞ちゃん!!』

伊吹は手話でそういった後、私の両手を握り、ブンブンと上下に大きく振る。私
のことなのに、自分のように喜んでくれるなんて。

それよりも4月からは姉様と同じ高校かぁ。色々とありそうだけど楽しみだ。

伊吹『聖良姉さん達には伝えた?』

理亞「一応、LINEで……。あ、返信きてるわ」

聖良『今日はお祝いですね!朝まで寝かせませんよ♪』

なんか、超絶意味深な返信が来てるんだけど。これはお祝いで寝かせないってこ
とだよな?決してやましい意味とかではないよね??

伊吹『姉さん、なんて?』

理亞「……………おめでとうだって」

この内容を伊吹には言いづらかったので、適当に嘘をついておいた。

理亞「それより、伊吹は大丈夫なの?今から一緒に行こうか?」

私は受かったけど、まだ伊吹がいる。せっかくここまで着いてきてもらったん
だ。もし、今から伊吹の高校に足を運ぶとならば、是非とも一緒に行こう

伊吹『ああ、大丈夫。僕の場合、インターネットで合否見れるから』

理亞「あ、そうなの？で、どうだった？」

私が受かったんだ。なんやかんやで伊吹も受かってるに違いな i ……………

伊吹『落ちた』

理亞「……………は？」

伊吹『普通に落ちたよ。僕の番号……………無かった。』

何一つ表情を変えずに手話をやる伊吹だったが、瞳が何十倍にも濁っていた。これ……………、相当きてるな。

理亞「……………帰りさ、ラッキーピエロ寄る？奢るよ？」

伊吹『……………寄る。』

この日、合格した私のお祝いと落ちてしまった伊吹の慰め会が同時に行われることになった。

面白いと思ったらブックマ・感想・高評価よろしくお願いします

21話 『合格祝い』

お久です

あの身震いするほど寒かった合格発表から早数ヶ月が経過し、少しだけ暖かくなりながら4月を迎えた。

そして、今日は待ちに待った入学式。学校先は姉様と同じ学校である函館聖泉女子高等学院だ。

私は勉強机の上に置いてある学校の制服を丁寧に手にする。2年近く姉様が学校に行く時に来ていたやつと同じもので、制服とは思えないほどのお洒落で可愛いものとなっており、ずっと前から着たいと思っていた。

ここで、姉様のやつを借りれば良かったのでは？と思う人がいるかもしれない。当然、私も馬鹿じゃない。勿論、姉様が入学してから間もない頃に着たいと思ってお願いして裾を通したことがある。

あの頃の私はまだ若かった。それが間違이었다ということに気づかなかつたのだから。

まずサイズ自体が全く違った。着た時に真っ先に思ったけど、ブカブカだったのだ。姉様の身長が162cmで私の身長が153cmだから当たり前かもしれない。

けど、問題はそこじゃない。そこじゃないのよ。

……………胸部分がとても空洞感があった。

あの時の衝撃は今でも忘れられない。恥ずかしい話、私の胸は中学の頃に比べれば大きくなったものの、姉様やママほどまで大きくはならなかった。サイズ的には……………ギリギリみかんぐらい。

おかしいな。毎日、欠かさずに牛乳飲んでるしお風呂の後はバストアップのストレッチをやってるんだけどな……………。あれ、目から涙が……………。

と、こんな茶番はこれぐらいまでにして私は寝巻きを脱いでから制服を着る。当

理亞「姉様!!」

私は顔を真っ赤にさせながら姉様からスマホを取り上げようとするが——
——スカッ

理亞「——ッ!?」

聖良「残念でしたね、理亞。それは……残像です」(; _ ;)
アアアア

スマホを取り上げようでした腕が、何故か空振りし驚愕していた所、いつの間にか私の背後に移動していた姉様がドヤ顔で言葉を出す。

いや、普通にうちの姉がさらっと人間やめてる件について。

聖良「ふふ、理亞も頑張れば出来るようになりますよ」

出来なくて大丈夫だから、姉様。私はまだ人間でいたい。

聖良「って、こんな所で時間を潰す訳にはいきません。理亞の次は伊吹を起こしに——あ」

理亞「ツツ……………姉様」

姉様が思い出したと言わんばかりに言葉をだすが、途中で気づいてしまったのか、言葉を出すのをやめて俯いてしまった。

多分……………、私も今は姉様と同じ俯いていると思う。視線に移るのは部屋の床に敷いてあるカーペットだから。

聖良「そうですか、もうあれから数ヶ月も経つんですね。時が流れるというものは早いものです」

理亞「……………うん。」

そう……………、あの日……………。高校の合格発表の日から伊吹は……………

聖良「うう……………」
シメ

理亞「ね、姉様!!」

口元に手を押え、泣きながら膝から崩れ落ちる姉様。それを見て、私は慌てながらも姉様の側へと近づく。

聖良 「理亞……………、私は最低な人間です」

理亞 「そんなこと!!」

聖良 「いいえ、そんなことありません。私は……………私は……………」

理亞 「あれは仕方がないことだった!! 姉様が責任を感じる必要なんてないのよ!!」

聖良 「でも!」

理亞 「でもじゃない!!……………そんな姉様が苦しむ姿を見て伊吹が喜ぶと思ってるの??」

聖良 「ツツ……………そうですね。理亞の言う通りです。情けない所を見せてしまいました。こういう時だからこそ、姉である私がしっかりとしないといけないというのに。……………まだまだですね。」

理亞 「姉様……………!!」

私は微笑みながら姉様に手を差し伸べる。それを見た姉様も微笑みながら私の手を掴み、立ち上がった。

聖良 「さあ、理亞! 私達は私達で、伊吹が胸を張れるような……………そんな人間

を目指していきましょう!!」

理亞「うん!!」

こうして、私と姉様は互いの手をしっかりと握り、互いの目を見ながら今、この場で改めて誓い合った。

伊吹『2人とも、朝食が出来てるのに一向にリビングに出てこないから母さんが範馬勇次郎みたいなの表情して……………2人は何してんの?』ギョギョ

……………てへっ(・\$;\$△\$|\$\$)ゝ



理亞・聖良「ご馳走様でした」

私と姉様は頭に大きなたんこぶを作りながら、ママが作ってくれた朝食を完食し

た。いやあ、伊吹が言ってた通り、リビングに来たら本当にママが範馬勇次郎みたいな表情してたから、死を覚悟したわ。実際にゲンコツを貰った時も三途の川がうっすらと見えたもん。

食べ終わったお皿を片付け、私は再び自分の部屋へと戻る。そして、時間に余裕があるのを確認した私は先程の姉様とのふざけたやり取りをやったおかげですっかりとシワが出来てしまった制服を、一旦脱いでアイロンをかける。

せっかくの入学式だ。シワが出来てしまった制服なんて来て出たらみっともないし、どうせ姉様のことだ。中学の入学式や卒業式みたいに一緒に写真を撮るように頼んでくるだろう。

理亞「よし」

アイロンでシワを伸ばし、見た目も綺麗になった制服に裾を通した私はそろそろ髪を結ぼうといつも使っているヘアゴムを手にして結ぼうとしたが——

——ブチッ

理亞「あ」

結んでいる最中に嫌な音が聞こえた。ヘアゴムを目にすると、思った通りヘアゴムがちぎれてしまっていた。お気に入りだったのになあ。でも、これ……、長いこと使ってたやつだから仕方がないのかもしれない。

うーん、どうしようか。さすがに今からヘアゴムを買いに行くっていうのも無理だしな。今日の入学式だけはそのまま髪はおろした状態で行こうかな。でも、ずっと何かしらし結んでいた者としては落ち着かないし……。

ママか姉様持っていないかな？少し聞いてみるか。

リビングに行くと、今日は入学式だからか、綺麗な白色のワンピースを着たママと私と同じ制服を着た姉様がいた。

理亞「ねえ、ママと姉様。ヘアゴム持っていない？いつも使ってるやつが結んでいる途中にちぎれちゃって……。」

「あら、そうなの。あるかしら??」

聖良「あ、母様。大丈夫です。理亞、こっちに来てください」

理亞「？」

姉様に呼ばれたため、私は彼女の近くまで移動する。すると、姉様は近くに置いてあった小さな紙袋を私に差し出した

理亞「これは？」

聖良「合格祝いです！私と伊吹からの」

理亞「え!？」

突然の家族の合格祝いに戸惑いを隠せなかった私は驚きの声を上げる。

理亞「開けてもいいの？」

聖良「はい！」

姉様に許可を貰ったため、丁寧に紙袋を開けていく。すると、中に入っていたのは――

理亞「ツツ、ヘアゴム」

ちょうど、私が現在進行形で欲しがっていたヘアゴムだった。しかも、ほとんど髪を2つに結んでいるからか、ご丁寧に2つも。

それに、このヘアゴムって……………

聖良「ふふ、気付きましたか？私のやつとお揃いです♪」

そう、何か見覚えがあるヘアゴムだと思ったら、姉様が高校に行きだした辺りで使い始めたヘアゴムと全く同じやつだった。すごく可愛いから、同じやつを手に入れたと思うていたが、どうやら限定品だったらしく手に入れなくて残念だった覚えがある。けど、どうしてこれがここに??これはさっきも述べた通り限定品のはずなのに……………。

聖良「伊吹と2人でヤフ○クやメル○リなどのアプリで探して購入したんです。あ、勿論新品未開封ですよ。」

探すのに苦労しましたよ、と苦笑いしながら言葉をだす姉様。その瞬間、私の視界が滲み、歪み始める

聖良「理亞!? も、もしかしてあまり気に入らなかったですか!？」

泣き始めた私を見て、姉様は心配そうに声をかける。違う、違うの姉様。

理亞「むしろ、逆よ、姉様。凄く嬉しいの!! ありがとう!! 姉様、大好き!!」ヤ

ヤ

私は姉様の胸に飛びつくように抱き締める。すると、姉様も「良かった………」と安堵の息を漏らしながら私の背後に腕を回して抱きしめる。

理亞「そうだ、伊吹! 伊吹にもお礼を言わないと」

こんなに素敵なお礼を貰ったのだ。姉様だけでなく、あいつにもちゃんとお礼を言わなくてはならない。

聖良「あ、伊吹ならもう行きましたよ」

理亞「ええ!? 早くない!？」

聖良「色々と準備があるみたいです。」

理亞「そっか……。お礼言いたかったのになぁ……………」

聖良「ま、すぐに会えますけどね」ヤン

理亞「ん？ 姉様、何か言った？」

聖良「いいえ？ 何も？ それより、そろそろ時間ですね、理亞」

理亞「あ、本当だ」

姉様が壁についている時計に指をさすとそろそろ出る時間帯になっていた。

私は早速、姉様と伊吹がくれたヘアゴムを手にして髪を結ぶ。ふふ、姉様とお揃いだ♪

理亞「どう？ 姉様」

聖良「尊い!!」ニ。ミ。ミ。ヤン。ヤン。ヤン。ヤン。

姉様のお揃いのヘアゴムで髪を2つに結んだ私の姿を見て姉様は口元に手を当て、涙を流しながらまたしてもおかしな言葉を言いながらスマホで連写を行う。

理亞「もう、姉様!!」

私は顔を真っ赤にさせながら姉様のスマホを取り上げようと腕を出すが一ー一
一ー一スカッ

理亞「一ー一ッッ!?!」

聖良「それは残像です!」(; | 、) アッギアア

もう!!それはいいから!!

その後、私は姉様とママの3人で高校へと向かった。この場に伊吹がいなくて
少しだけ寂しい。

……………てか、よくよく思い出してみれば、あいつ……………どこの高校に入学した
のかしら??

天草伊吹↓最近、理亞と聖良の2人が自分のいない所でおかしな行動を取り始めて将来に心配を感じている。第1志望校は落ちたものの、第2志望高校は受かっているため、最初はやっぱり落ち込んだものの、すぐに気持ちを入れ替えた。そして、その第2志望高校は前年度まで女子校だったとか……………。

鹿角理亞↓合格発表日から特にやることがないため、ダンスの練習や運動に力を入れるようになった。聖良とよく2人で伊吹が不合格になったショックで家出をしてしまったというよく分からない設定の芝居をやるようになった。

伊吹がどこの高校に入学したのかは分からない。

鹿角聖良↓幽遊○書を読んで以降、自分でも残像が出来るのでは?と思いやつてみたら思いのほか出来てしまった。他にも分身の術や変わり身の術、口寄せの術などを会得している。もう、ポンコツ通り越して人間辞めているのでは?と妹に思われている。

22話『どうしてあいつが!!』

今日で無口な居候1周年ということで頑張って書きました。

(更新日は15日ですが、投稿したのは14日です。)

『えー、皆さん。入学おめでとうございます』

大きな体育館で、椅子に座る私を含めた多くの新入生を前に学園長らしき女性がマイクを手にして語り始める。

この時の私は周りの子達に比べて少しだけやつれていた。理由としては家を出てからは嬉しそうにする姉様にずっと学校内の至る所を案内という形で連れ回されたからだ。



聖良『ここが中庭です!!とても広いので鬼ごっこすると盛り上がりますよ!負

けた人は参加者全員にジュース1本奢るといふ罰ゲームもあるのでスリル満載な
んです！え、私？負けたことないですよ??』

聖良『本館に1年生の教室があつて、隣の西館に2年生の教室、そして少し離
れた所の東館に3年生の教室があります。本館から東館まで普通に行く時間が
かかるので、屋上から飛び移って移動することをオススメしますよ』

聖良『ここが、食堂です。人気がありすぎてよく席の確保をかけて大乱闘が勃発
するので気をつけてください。ちなみに、人を簡単に気絶させる方法は……』

聖良『そして、ここが我が校の1番の目玉である音楽室です!!この場所で音楽
を勉強したくて入学してきた子がほとんどのはず!!ここで歌を歌うととても気持
ちいいんですよ!!という訳で鹿角聖良、最愛の妹の入学を記念してここで1曲、
歌いたいと思います!!マキシマム○ホルモン様にて『F』ー』サ。マ。マ。

マ。マ。マ。



理亞「はは……………」

姉様に連れ回された箇所と説明の1部を思い出してみると、なかなかのカオスなものだった。確かに、中庭は広かったけど、普通そこで鬼ごっこする？あと本館から東館まで少なくとも3mは離れてた気がするんだけど……………。あと、姉様のマキシマム○ホルモンの曲は『F』を初めとして5曲披露されました。ご馳走様です(白目)

けど、姉様の案内やひとつひとつの言葉を聞いていると、改めてこの学校に入學したんだな、という気持ちになったのも事実。この学校で姉様と過ごすために、私は必死で勉強してこの学校の門をくぐる権利を得ることが出来た。

そして、実は私はこの学校を過ごすにあたって1つ目標を作った。

それは『1人でもいいから友達を作って充実した学校生活を過ごす』というものだ。

改めて、決めたのは私のはずなのに信じられないなと思う。少なくとも、中学1年生の私ならばこんな目標は作ることは無かっただろう。

友達なんていらぬ。学校なんて1人で十分。姉様さえいてくれればそれで良い……………と。

けど、中学に入り、私にとって初めての……………友達である上野さんや紀平さんを始めたとしたクラスメイトやダンス部の仲間たちなど、1人、また1人と話せる人が増えたことによって、私の考え方は変わった。

人と関わりを持てたことで、こんなに充実した生活を過ごせるとは思ってもみなかった。

♪楽しい♪

まさか、学校生活でこの感情を抱く日が来るなんて……………。中学の時の私がこのことを知ったら驚愕するんだろうな。

『ここで、今年からこの学校で働くことになった仲間を紹介していききたいと思います。』

あ……………気づいたら転任、もしくは新任の紹介に入ろうとしていた。学園長の促しにより、何人かの男女がスーツ姿で壇上の上に立って自己紹介に入っていく。違う学校から来たベテランそうな人に、初めての教師生活をこの学校で過ごすから、緊張している人が自分のことについて簡単に言葉を出していた。

そして、あっという間に最後の1人となる。

最後は女の人だった。スーツを着ていても分かるほど、スタイルがとても綺麗で足が長い。身長は余裕で170は超えているだろう。それに加えて、丸型の眼鏡をかけた美人さんだ。彼女は灰色のポニーテールを揺らしながらマイクを口に近づけ、声を発す。

「皆さん、初めまして!! ○○高校から来ました花咲聖那です!! 主に生物基礎を担当していきます!! 初めてのことだらけで皆さんに迷惑をかけることになると思いますが、よろしくお願ひします!!」

花咲聖那と名乗った彼女はこの場にいる誰もが聞こえるであろう声で元気よく自分について簡単に話し、ペコツと頭を下げて元にした場所へと戻る。なんか、面白そうな先生かも。もし、生物基礎の授業があるなら、彼女に……、花咲先生がいな。

『続きまして、在校生代表挨拶。在校生代表……………』

あー、出た出た。入学式で『それ、やる意味ある?』って思うトップ5にランクインするやつ。いや、だってさっき学園長からの有難い言葉あったじゃん。なんで、わざわざ生徒の代表が喋るの? まあ、いいや。これは聞き流すことにしー

『鹿角 聖良!!』

聖良「はい!!」ビシッ

いやいやいや、ええええええええええええ!? 何で、姉様!? ここは普通、生徒会長とかやるんじゃないの!?

姉様はビシッと、誰もが見たことはあるだろう、あの有名メーカーのランドセルのCMに負けないぐらいの背筋ピーン!! としながら立ち上がり、華麗に壇上へと上がっていく。

大丈夫!? この大事な行事で何かやらかさないか凄く心配なんだけど!?
姉様はぺこりと頭を下げたあと、胸ポケットから1枚の扇子折りされている紙を取り出して広げ、言葉を発した。

聖良「新入生の皆さん、この度はご入学おめでとうございます。在校生一同、心

より歓迎申し上げます。」

ほっ………、良かった。流石の姉様もこんな大切な入学式で馬鹿やらかすつもりはないようだ。あっちゃダメなんだけどね!!

聖良「私も2年前は、この学校に入学した時、とても不安でした。周りにはいつも一緒にいてくれた友人は誰一人いない中、これから先、やっていけるのかずっと考えていました。しかし、そんな考えはすぐに変わりました。なぜなら、私と同じ心境である生徒が周りに多くいたからです。だから、私だけ1人ぼっちかもしれない。そう思っている人は今すぐにその考えを捨てて下さい。そして、勇気を出してください。今は確かに、他の人に声を掛けるのは怖いかもしれませんが、勇気を出して声を掛けるだけで、皆さんの高校生生活は一気に変わります。もし、自信がないというのなら私たち先輩が支えます。ここにいる在校生達は皆さんを見捨てるような人物は誰1人いません。それでも………、という人がいれば、せめてこの私に声を掛けてください。3年B組、鹿角聖良は皆さんの相談に対して逃

げも隠れもしません。解決するまで支えたいと思っています。皆さんが1日でも早く函館聖泉女子高等学校に馴染むことを願って以上、歓迎の言葉といたします。」

姉様は両手に持つ紙を再び折り、封筒にしまってから一礼し、元にいた場所へと戻る。

――パチパチパチ――！！！！

戻っている最中に、周りの人物からの感動の拍手が姉様に送られる。あれはせいって。普通に最後まで真面目にやりきってんじゃない。絶対に何かしらやらかすって思ってた数秒前の自分を殴りたい。

姉様の歓迎の言葉により、不安そうにしていた新入生たちは自信がついたのかとても活き活きとした表情へと変わっている。先生や、来賓の方に至っては何人かポロリと涙を流していた。

つい、さっきまで私の目の前で、ヘッドバンしながらマキシマム○ホルモンの曲を

全力で歌っていたのと同じ人物には思えないや。正直な話、普段でもこうして欲しいのになあ……………。

そして、入学式は順調に進み、ようやく終わりを迎えそうな雰囲気を漂わせていた。

これが終われば、クラス発表や担任の発表をされて私の高校生活が始まるんだ。そう考えると、なんだか楽しみになってくる。そういえば、部活は何部に入ろうかな。あとから知ったけど、この学校、ダンス部ないんだよなあ。元々は、音楽をメインとした学校だし。1から創るっていうのも一つの案だけど大変そう。周りを見ても、失礼な話、運動できるタイプって感じじゃない子が多いイメージ。ま、近いうちに部活紹介とかあると思うから、その時に候補を絞ればいいか。

あーあ、こんな時こそ、伊吹が側にいてくれればなあ……………。色々と相談に乗れたのに。なんなら、高校の部活はあいつと一緒に入るっていうのも悪くないのかもしれない。運動部だろうが、文化部だろうが、あいつと一緒にならやっていける気がする。って、そんな夢話を抱いたところで無駄な話か。

『そして、最後になりましたが——』

再度、学園長が壇上の上にあがり、予想通りに締め言葉に入ろうとしていた。長かった入学式もこれで終わりって訳だ。

『皆さんに重要なお報せが1つあります。』

ん？重要なお報せ？まだ何か言っていないのかな？少しだけ周りがザワザワしていた。

『単刀直入に言いますと、来年度で我が校は女子高校から共学校校に変わる方針で考えております』

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

学園長から発せられた言葉により、先程よりもはるかに大きなざわつきが起る。無理もない。正直な話、私もかなり動揺している。

『現在、日本では少子化かつ高齢社会であり、そして近い未来、超高齢化社会になると言われております。そうになると、女性しか入学することが出来ない我が校は今

後、学校として経営していくのは厳しいという話がここ数年、問題として挙がっていました。』

なるほど。確かに今の日本の少子化は社会問題として色んなメディアに取り上げられているし、そのせいで既に廃校になってしまったという学校も少なくはない、というのをニュースやSNSで見ることがある。

まさか、その影響が身近なところで起きることになるとは。他人事だと思ってたけど、こうして関わってみると壮大な問題だったということが嫌という程、認識させられる。

『数多の会議を重ねて行いましたが、候補としては共学化にするという意見しか出ませんでした。しかし、だからといって確定という訳ではありません。まだ可能性の話です。』

可能性の話………、つまり、来年度から共学になるという訳でもないのか。

その男性を見て、思わず私はそう言葉を零してしまった。隣にいた女子が驚いてこっちを見たが、そんなのどうでもいい。

どうして……どうしてあいつが!!

『それでは、自己紹介をお願いします』

そいつはいつも見る綺麗な白髪を揺らしながら、手元にある大きなスケッチブックを開いてペンでカキカキと文字をダイナミックに綴り、そして――

伊吹『皆さん、始めまして。この度、テスト生としてこの学校に入学させていただきますました天草伊吹といいます。互いに戸惑いだらけだと思いますが、どうぞよろしくお願いします。』

lll Saint Snowと無口な居候……高校生編開始。

「……………」

次回は半年以内に投稿できるようにがんばります(白目)

23話 『3年間、よろしくね!!』

授業受けながら執筆を行える方法を見いだせたので早く更新出来ました。

伊吹が登場したことによって、ざわめきがオーバヒートに達しようとしていた。それは、女子校という中で異性が加わることに對しての動揺、困惑、絶望、怒り。もしくは、伊吹の容姿に歓喜をあげている者もいた。

よりによって、あいつがテスト生として入学するなんて。一体、いつから決まっていたことなのだろうか。少なくとも、伊吹が第1希望の高校に落ちてしまった後にこの話がどこかであがったとは思うけど。

ママやパパはテスト生について必要な書類やらで知ってて当然だと思うけど、姉様はこのことを知っていたのかしら……

多分だけど、姉様のことだから知ってたな。なんなら、姉様がきっかけでテストの話が上がったのかもしれない。それを引き受けた伊吹、ママやパパもおかしい

けど……。

理亞「ん？」

——あれ？私、今……少し喜んでる？口角が嬉しそうに上がっているのに
気づく。

そっか……。落ち着いて考えてみれば、またあいつと一緒に学生生活を過ごせるんだ。そう考えると、なんだか楽しみになってくる。なにせ、ここは女子高校であり、あいつは元々は違う高校を目指していたため、中学と同じように過ごせるとは思ってもみなかったから……。

そうなると、不可能だと思われてた部活も一緒に出来るかもしれないってこと……だよな？ そうなんだよね？ え、やば。

『共学化の可能性、そしてテスト生の対処については、クラス発表のあと、担任の

先生からプリントで渡されると思うので各自、目に通しておくようにしてください。それでは、これで入学式を終わります。』

学園長の言葉で入学式が終わり、私たちは教師の指示に従いながら体育館を出ようとする。

その際、ふと、姉様と目が合った。すると、姉様は微笑みながら

姉様『良かったですね、理亞』

理亞「ツツ……………」

こっそりと、手話で私にメッセージを送る。その後、『バッチーん☆』という擬音がハッキリと浮かび上がりそうなウインクをして同時にサムズアップする。言動からして、やっぱりテスト生の件は姉様が絡んでいたと分かる。

「鹿角お!!何立ち止まってんだ!!後ろが渋滞してるからはよ歩きなさい!!」

聖良「ハッ!ごめんなさい!音を置き去りにする勢いですぐに行きますね!」

「そこまでやらんでいいわ！お前の場合、マジでやりそうだからやめろ！普通に歩けばいいから!!」*クラチツグ、タ—トキテ*

「ほら、聖良。おてて繋いであげるから早く行きましようね〜」*オチツギ、*

ベシ

聖良「はい。」*オチツギ、*

と、先生やらクラスメイトらしき人物が姉様にツツコミを入れたり、上手く扱ったりとしていた。とうやら、姉様は相変わらずやかましくしているようだ。

っと、私も早く行かないと後ろが渋滞しちゃうな。早く教室に行くことにしよう。多分、本館に戻ったら私達のクラスが貼り出されることだろう。つまり、伊吹と同じクラスなのかどうかもそれで分かるということ。

ズグズグうう……。出来れば、伊吹と同じクラスがいいな。同じクラスだったら、今後学校生活を送る時に効率よく過ごすことができる。

あと、あいつと同じクラスじゃないのが普通に嫌。ここだけの話、中学2年生

のとき、クラス替えであいつと離れ離れになった時があった。その時に、真っ先に感じたのは『寂しい』という感情だった。

1年生の時はいつも私の傍にいてくれたのに……。姉様はもう卒業してしまっていたので、一緒に帰る人物は伊吹しかいない。そのため、放課後は伊吹が来るまで校門で待っていたものだ。

3年生では再び同じクラスになったということが分かった時は心の底から嬉しかった覚えがある。そして、同じ教室に伊吹がいることで心地良くいと感じているのを改めて認識した。

だからこそ……。だからこそ!!

伊吹と同じクラスがいい。願わくば、ここは女子校なので色々と伊吹は不便だと感じる事が今後、出てくるだろう。例え、器用でも多少は苦勞するはずだ。なら、私はそれを支えてあげたい。フォローしてあげたい。力になるかどうかは分からないけど、多少は役に立つはずだ。

そして、遂にクラス分けが載っている紙が貼りだされている所までやってきた。私たち 1 年生は 2 クラスに分かれている。つまり、2 分の 1。

ーードクンドクンと、自分の心臓の音が前に進む度に大きくなっていく。

私は目を閉じて手を合わせながら心の中で言葉を呟っていく。

お願いします、神様仏様姉様。

これからはもっと、『茶房菊泉』の営業のお手伝いをこれまで以上に頑張るし、学校の課題も怠らずしっかりとやります。なんなら、トイレやお風呂掃除も毎日やります。

だから、どうか………どうか!!

伊吹と同じクラスでありますように………!!!

A 組 鹿角理亞

そして、私はゆっくりと目を開けた。

・ ・ ・
B 組 天草伊吹（テスト生）

理亞「終わった」ヤダヤダ

どうやら、私は神様仏様姉様に見放されてしまったらしい。



聖良「理亞、いつまでも落ち込んではいけませんよ。」

理亞「だってえ……………」*グッ*

入学式が終わり、家に帰宅した私はすぐに、自分の部屋に行き、ベッドの上においてあるぬいぐるみを抱えて横になり、涙を浮かばせながらぐずっていた。

少しした後、帰ってきた姉様は心配そうに私を励ましてくれるが、まだ立ち直れそうにない。

因みに、伊吹はテスト生としての話が残っているようでもまだ学校に残っている。聖良「クラスが別だったとしても、すぐ隣じゃないですか。」

理亞「いやーなーの!! いやーだー!!」*グッ*

珍しく、私はまるで欲しいものを買って貰えなくてグズっている幼稚園児みたいになつた。バタバタと暴れる。それを見て、姉様も額に手を当てため息を吐いていた。

聖良「あー、もう!! 分かりました。分かりましたよ!! 少し待っててください!!」
理亞「姉……………様?」

ボタン! と音を立てながら部屋から出ていく姉様。5分ぐらいで戻ってきたが、制服姿だった姉様は何故かつなぎを着ていて、頭にはライト付きのヘルメットに両手は軍手。そして、両手には電動コンクリートハンマーを手にした。

聖良「これで壁を貫いて、2つの教室を1つにしましょう!! そうすれば、伊吹と同じクラスになれますよ!!」
「クハハハハハハ」
…

本来ならば、私は姉様にツツコミを入れることだろう。だけど、今の私は違う。

理亞「流石、姉様!! 早速、明日やろう!! 証拠隠滅は私に任せて!!」

聖良「私に任せて!! じゃありません!! そこはいつもみたいにツツコミを入れるところでしよう!! 貴女までこっち側に来たらこの作品、ツツコミ役いなくなっちゃいますから!!」

理亞「ママがいるわ」マッヤ

聖良「いや、流石にもう40過ぎの人にツツコミをさせるのは少し読者層的に厳しい気が……」。って、何を言わせるんですか!! メタ発言はもう禁止です!!」

理亞「いや、姉様しか言っていないわよ。」

全く……、と言いながら姉様は呆れたような表情を浮かべていた。少しふざけすぎたかもしれない。

互いに落ち着いたところで、私は姉様に向かって言葉を出していく

理亞「伊吹のテスト生の話はいつからあったの? きっかけは?」

聖良「……………伊吹が第1希望の高校に落ちた5日後です。学園長自らが家に尋ねてきたのがきっかけです。」

理亞「学園長が？」

聖良「はい。元々は学園長は今回の共学化に向けて、テスト生の男子を探していたようです。しかし、女子しかない学校の中で男子を招き入れるとなると、人は確実に今後のことを考えて選ばなければならぬ。だから、学園長はテスト生として相応しい男子を自分の目で探していた」

理亞「そこで学園長は伊吹に目をつけたってこと？」

聖良「はい。たまたま、休憩でうちの店に訪れたようで。その時に掃除していた伊吹を見つけたみたいです。そこからは、母様に軽く話をしたあと、後日、改めてテスト生としての話を持って家に来たのが発端ですね。」

なるほど。姉様の話を聞いてある程度は理解することが出来た。けど、まだいくつかは疑問は残っている。

理亞「そのテスト生の話を聞いて、伊吹は了承したってどういうの？だって、あいつ、滑り止めは合格してたんでしょ？」

進学する高校が一つもないというのならば、テスト生を引き受けたのはまだ分かる。しかし、既にあいつには道があった。なのに、それを蹴ってまでテスト生を引き受けた理由がわからない。

聖良「あれ……嘘ですよ？」

理亞「え？」

う、嘘？え、どういうこと？

聖良「伊吹は滑り止めどころか、第1希望の高校以外、受験は受けていません」

理亞「は？」

そんなこと、一言も……

聖良「第1希望の高校に不合格するのであればどこも同じことだということですから、落ちた場合はうちで就職するという形になっていました。貴女に言わなかったのは受験に影響を与えてしまう可能性があると思って言わなかったのでしょう。」

理亞「ッッ」

聖良「勿論、それは母様や父様は反対しました。しかし、伊吹はそれを貫き通し

ました。そんな時に、学園長からのテスト生の話が来たんです。」

事の本末を知って、私はぬいぐるみを抱き抱えてえている力を無意識に強めてしま
う。私の知らないところでそんなやり取りがあったなんて。

「ーガラガラ

聖良「帰ってきたみたいですね……………理亞??」

扉が開く音が聞こえてきた瞬間、私は直ぐに部屋から出ていき、玄関へと向かう。

理亞「伊吹……………」

伊吹『理亞ちゃん』

靴を脱ごうとしてる伊吹の姿があった。

本当なら、今すぐにもふん殴ってやりたい。罵倒してやりたい。どうして、私
に一言も言わず、嘘をついたのか。

理亞「姉様から聞いた。あんた、私に嘘をついてたそうじゃない」

伊吹『ーッッ、それは』

私が口になると、伊吹は少し動揺する。少しは罪悪感を感じていたようだ。

私に怒られるとこいつは思っているんでしょね。

理亞「だから、伊吹。許してあげる罰として……………」

明日から帰る時私が来るまで教室か校門で待ってなさい!!」

伊吹『え?』

予想外の言葉に、伊吹はぽかんとした表情を浮かべる。

理亞「いい? 分かった? 分かったら今すぐ敬礼しなさい!!」

伊吹『(;.・ω・):ゞビシッ!!』

理亞「よし!!」

さりげなく、一緒に帰る口実を作った私は内心、嬉しく思いながら部屋へと戻ろ

うとする。

あ、これだけ言っとかないと……………。

私は再び、伊吹の方に振り返って、想い人の名前を呼ぶ。

理亞「伊吹！」

伊吹『？』

理亞「明日からまた3年間。よろしくね!!」

面白いと思ったら、ブックマ・感想・高評価よろしくお願ひします♪ By 姉様

24 話『ラブラブするのはやめよーね』

お久しぶりです。遅くなってごめんなさい。

理亞「はじめまして、鹿角理亞です。趣味はお菓子を作ることです。特技はバク転です。実家で甘味処をやっているのが良かったら食べに来てください！よろしくお願いします!!」

高校生活がもうすぐ始まるうとしている中、私は朝から洗面台の鏡に向かって自己紹介の練習を行っていた。

未だに忘れもしない中学一年生の時の自己紹介。あれは予め決めてなかった私が悪いが、緊張が勝ってしまい、上手くいくことが出来なかった。伊吹の助けがあったものの、自己紹介の内容も酷かった覚えがある。

そのため、私は自己紹介が行われる際、前もってこうして鏡の前で自己紹介の練

習をやっている。そのおかげで、中学2年、3年の自己紹介では大きな失敗はしていない。

しかし、今回は中学とは違う。

今日から共に1年間過ごすクラスメイトは全員、初見の方だ。名前も知らなければ、どういう性格なのかさえも知らない。

しかし、それは相手も同じこと。クラスメイトも私のことを知らない。知っているためにはどうするか。自己紹介でしっかりとわたしのことを知ってもらわない。

ふふ、なんだかこの考え。昔、伊吹と初めて会った時に、姉様が私に言ってくれたものと同じね。でも、確かに本当のことだから、やっぱり姉様は凄いいいことが分かる。

理亜「んー、言葉はこれで……いいかな？でも、もっと捻った方が……」

私は傍に置いてあった『自己紹介ノートvol.4』と書いてあるノートを手に

して開く。そこには何度も何度も書き直した跡がくっきりと残った文章が並べられている。

理亞「ちゃんと自分の趣味や特技もはっきり伝えてるし……あ、けど最後はなんか店を宣伝してるみたいでいやらしい子って思われない……かな？うーん、難しいな……」

髪の毛を乱暴に掻きむしりながら、私はノートを睨みつけるように眺める。あと、数十分で家を出なくちゃ行けない時間なのに……。

「理亞ー、もうそろそろ行った方がいいんじゃない？まだ着替えてないんだからー！」

あー、もう!!時間が足りない!!残りは学校行きながら考えるしかないや。

はい、と玄関に向かって言葉を出したあと、私は最後に洗面台の鏡に再び向かい……

理亞「……………」

頬を緩ませ、口角をゆっくりと上げた。いわゆる……笑顔の練習である。

どうして、こんなことをしているのか。私は普段からツリ目だからか、周りからは怒っているような印象を与えてしまっているの。そのおかげで、話しかけてくても話しかけれない人が多かったということを知ったことがある。

そのため、微笑む癖をつけられ少しく印象を変えることが出来ると思ったため、笑顔の練習を行うようになった。

こんなところ、誰かに見られたら死ぬほど恥ずかしいけどやむを得ない。

もう少し頬を緩ませようと思って、両手を使ってむにーっ頬を緩ませたところでー

ーガチャ

伊吹『理亞ちゃーー？』

理亞「んにゃ？」(´・ω・`)

突然、伊吹が入ってきてしまい、未だに両手でむにーっ頬を緩ませている私の

姿を見られてしまう。その瞬間、全身が熱くなるのを感じながら真っ赤にさせる。

理亞「♡☆&@#+@♡☆&\$-!-?。」

言葉にならない叫びとはこういうことを言うんだな、と実感するぐらいの叫び声をあげる。もはや、奇声に近いものかもしれない。

伊吹『……………』ヤキ

そんな私の姿を見て、伊吹は目を逸らしながら扉を閉め、タッタッタッと逃げるかのような足音が廊下に響き渡る。

理亞「ふうー」

私は1度、大きな息を吐いたあと、その場から何回か屈伸や伸脚をしたあと、クラウチングスタートの体勢をとり、

理亞「伊吹iiiiiiiiiiii!-!-!」タッタッタ

私は叫びながら、最高のスタートダッシュを決め、逃亡をしている伊吹の後を全力で追う。

あんな恥ずかしい姿を見られたんだ。コ○ス!! もしくは少なくとも半殺しにしてやる!!

ーーーガラガラ

扉が開閉した音が素早く、そして短く玄関の方から聞こえてくる。ちっ、ひと足先に学校に向かったわね!? だったら、私も!

「こら、理亞! 廊下を……あーれー!!」ケケケケ

玄関に向かう途中、ママが廊下を走る私の姿見て注意しようとするが、私はそのまま通行する。通行する際、肩がママに当たったらしく、昔のアニメでよく目にしたシーンみたいにママは勢いよく回転していた。本当に出来るんだアレ……。

玄関に目の前まで到着してが、ここで私は1度頭が冷めたからか今の自分の現状を把握する。今の私はまだ寝巻きでかつ、学校の鞆すらも手にしていない状態だ。

このまま学校に向かうのは流石にまずい。けど、それだと伊吹との距離の差は開いてしまう。くっ、どうしたら……………

聖良「任せてください、理亞」アッ

理亞「ーッッッ、姉様!!」タタタタ

まるで救世主かのように制服姿の姉様はドヤ顔をしながら玄関の前でサムズアップをする。一体何を……………!?

姉様は胸ポケットから1枚の大きな赤色の布を取り出し、ヒラヒラとさせる。いや、本当に何をする気なの!?

聖良「理亞!このままこの布を通り過ぎてください!」

理亞「何で!?!」タタタタ

聖良「いいから!とにかく私を信じてください!!」

理亞「わ、分かったわ!」タタタタ

何をするのかよく分からないけど、私は姉様を信じて赤い布を通り過ぎる。

もちろん、私は全力で赤い布を通り過ぎたため、その間1秒もなくコンマ秒だ。それなのに、どうして……。

どうして、さっきまで寝巻きだった私は制服姿でかつ学校の鞆を肩に背負っているのだろうか。

通り過ぎる際、一瞬だけ視界が赤い布で覆われたが、通り過ぎたら何故か着替えが完了していた。

聖良「こんなこともあろうかと、実は早着替えの技術を磨いていたんです。どうでしたか？」^{アッヤッヤ}

どうでしたか？ってドヤ顔で言われても、普通に凄いしか言いようが無いんですけど……。早着替えていう次元を軽く超えてたんですけど……。しかも、姉様の手には綺麗に畳まれている私が先程まで着ていた寝巻きがあった。もう何から何まで怖いよ。

しかし、姉様のお陰でタイムロスすることなく伊吹の事を追いかけることが出来

伊吹『……………』タツタツタ

理亞「あい……………つ、やっぱ……………速い!!」ヤッハヤッハ

全力で走り続けているからか、体力に自信がある私でも息を上げてしまい、走るスピード低下している事がわかる。そんな中、前に走る伊吹のスピードは下がる様子は見えなかった。むしろ、上がっているようにも見える。ただ、体力があるのよ!?

昔からそうだった。あいつは馬鹿みたいに体力があつてどんなに行動しても疲れの表情を浮かばすことはなかった。元々、感情自体あまり出さないが、汗や息を上げたところを見たことがない。

身内にほぼ人間をやめているに近い存在である姉様がいるため、そんなに気にはとめていなかったが、伊吹もまた、私と同じ人間なのか疑ってしまうことがある。

伊吹『……………』タツタツタ

理亞「……………くっ!!」

まずい……………。このままだと、学校に着いてしまう。流石に学校につかれたら追うことは出来ない。周りに不振な目で見られてしまう。

何とかそれまでに伊吹を捕まえなくては!!

その時、私は伊吹しか眼中になかった。周りの視界を全て遮断させ、伊吹の姿だけしか捉えなかった。

だからだろう。本来ならすぐに気付くことに気付くことが出来なかった。

「きゃ、きゃあ!!!!」 苺

理亞「—————ッッッ!!!」

隣から女性の驚きの声が聞こえてきた。振り向くと、そこにはすぐ私の目の前には自転車に乗った女性がいた。

そう、私は周りを見ずに伊吹だけしか見なかったため、曲がり角から自転車が接近していたことに気づかず、そのまま飛び出した形になっていた。

私と自転車との距離は既にあんまりなく、女性は必死にブレーキをかけているがそれでも、接触してしまうことは確実だろう。

運が悪く、体勢も良くないため、接触したあとに受け身をとるのも難しそうだ。

あれ？これ、もしかして授業初日は病院で過ごすことになるのでは？？
終わった……………。

そして、自転車の前輪が私の身体に当たりそうになったところで――

――グイッ

理亞「うわっ!!」

左腕を捕まれ、そのまんま引っ張られる。一瞬、肩が外れると思ったが、それのおかげで自転車と接触することはなかった。

理亞「はあはあはあ」

引っ張られた先は誰かの胸元だった。それは誰の胸元なのかは匂いで分かる。恐る恐る顔を前にすると、そこには伊吹の顔があった。案の定、私を助けてくれたのは伊吹だった。

理亞「うう、伊吹いいいい!!!!」^{タギ}

伊吹『――ッッ!?!』

大怪我を負うかもしれないなかつたという恐怖感があつたからか、私は思わず泣きながら伊吹に抱きついてしまった。その衝動に耐えられなかつたのか、伊吹はそのまま倒れてしまい、最終的には2人ともその場で倒れる形となつてしまった。

理亞「……………あ」

伊吹『……………』

それによつて、伊吹と顔が近くなつてしまつたということに気付く私。自分からやらかしておいきながら、顔を赤くさせてしまふ。てか、こいつ……………。男の子のくせに案外、まつ毛が長かつたのね。知らなかつたわ。

理亞「……………」

伊吹『……………』

互いに倒れ込み、互いに言葉が一言も出さない状態が暫く続く。なんだこれ、なんだこれ!? これ、少し顔を近づけたらもうキス出来ちゃうんじゃない……………? って、急に何を考へてんのよ、私つたら!! アホアホアホ!! てか、伊吹も何か表情浮かべてよ!! 私だけ顔を赤くしてるのが馬鹿みたいじゃん!! バーカーカー!! もう、この状況、どうしたら……………

「はいはいはい。君たち、ラブラブするのはいいけどここではやめよーね。」

理亞・伊吹「『ーーッッ!!』」

すぐ近くから誰かの声が聞こえてきた。しかも、聞き覚えがある声だ。声が聞こえてくる方向を見ると、丸型のメガネをかけた灰色のポニーテールが特徴である覚えのある女性だった。その女性はしゃがみこみ、頬に両手を付けながら意地悪っぽく微笑み一言口にした。

「近くにいるのが私で良かったね♪こんな他の生徒や先生が見たら良い意味と悪い意味で事件が起きる所だったよ♪」

理亞「……………花咲先生」

私たちに声をかけたのは、今年からこの学校に赴任してきた生物学の花咲聖那先生だった。

面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価お願いします。

来週から病院実習が始まるため、少なくとも12月中頃までは執筆が出来ない状況になってしまいます。ただでさえ、普段でも執筆できない状態なのに、何いってんだ、と思います。実習が終わってからの冬休みには多く投稿する予定ですので許してください。(Ä.Ä.)

25話 『自己紹介Part2』

お久しぶりです。

病院実習やらがあつて中々、書く時間がありませんでした。

年内中にもう1話投稿したいと思います!!(出来なかったらごめんね)

花咲先生にからかわれたあと、私は伊吹と一緒に教室へと向かう。伊吹と違うクラスのため、少し憂鬱な所もあるが一日中、伊吹と会えない訳では無い。合間の休み時間とか昼休憩とかになれば、いつでも会いに行ける。

あつという間に私たちがそれぞれ入るべき教室へとたどり着いた。あともう少し時間が経ったら伊吹と離れ離れになっちゃうんだよね……………。

分かっていただけ……………。やっぱり寂しい……………。

理亞「ねえ、伊吹。荷物を机の上に置いたらB組に行ってもいい？」

早くこの状況に慣れないといけないのは理解している。こんなの、ただの私の我

儘で所詮、悪足掻きに過ぎないことも知っている。

それでも、私は少しでもいいから、こいつと一緒にいたい。例え、さっきも言った通りいつでも会いに行けるとしても。

伊吹『……………』(一) b

私のお願いに伊吹は真顔でサムズアップしてくれた。それを見た瞬間に、私は急いで自分の教室に入り、机の上に荷物を置いて伊吹の元へと戻った。1秒たりとも無駄にできない。

B組の教室へと入り、伊吹は自分の机の上に荷物を置いて椅子に座る。私は前の席の椅子を借りて伊吹と向かい合うように座った。

理亞「いよいよね」

伊吹『何が?』

私は肘を机の上につきながら片手を頬に当て言葉を出す。それに伊吹は不思議そうに首を傾げ反応した。

理亞「今日から高校生活が始まるだってこと。」

伊吹『ああ、そういうこと。やっぱり、楽しみ?』

理亞「まあね。どっかの誰かさんが私に言わずにここに入学してくれたおかげで多少なりは。」

伊吹『ツツ、それはごめんって。』

私は意地悪そうに微笑みながらそう冗談を言うと、伊吹は手話で謝罪を述べたと、手を合わせて頭を下げる。

理亞「冗談よ、冗談。少しからかったただけだって。」

伊吹『……………』(・H・)プター !!

冗談だったことを言うと、伊吹は頬を膨らませて怒ってますアピールをし始めた。え!? アンタ、そんなことするの!? ちょ、無理無理無理!! 少しでも気を緩めたら爆笑しちゃう。

理亞「ちょ……………待って……………マジ……………無理」プ。プ。

伊吹『僕、怒ってるんだよ! ちゃんと僕の目を見て!』(・H・)プター

見て! じゃないのよ。ハムスターみたいに頬を膨らませながら手話しないで。もう本当に!! もう限界だから!!

理亞「そ、そう……………。ごめんなさい……………。だから……………頬を膨らませるの……………や

めて。」

伊吹『……』（……）カ

理亞「ぶはっ！！！」

確かに膨らませるのをやめてって言ったけど!!そんなすぐに真顔にされても困るって!!結局、私は耐えられず思いっきり吹いてしまった。腹が……腹が痛い
ww

伊吹『どうしたの?』

私が急に吹き始めたことで、伊吹はまたしても首を傾げる。原因が自分だっところがわかっていないらしい。こいつ、普段は凄く鋭いくせにたまに抜けたところがある。まるで姉様みたいだ。

理亞「何でも……ないわよ」

深呼吸を何度か行い、ようやく落ち着くことができた。あー、笑い死ぬかと思っ
た。

さて、落ち着いたところで、会話を続けることにしよう。

理亞「伊吹はさ、部活決めた?」

伊吹『部活？』

かつて、私達が中学1年生の時にやったやりとりを思い出しながら伊吹に言葉を出す。

理亞「ほら、ここって、あまり文化部とかってないじゃん？だからどこに入るのかなって」

伊吹『前々から考えてたけど、帰宅部……かな。』

理亞「帰宅部？」

確かに中学と違ってこの学校は帰宅部はあるけど……、伊吹がそれを選ぶなんて意外だ。何かしらの部活に入ると思ってた

伊吹『部活は楽しみでやってみたいけど、それでも僕は家の手伝いをしたいかな。』

理亞「そっか。」

伊吹は昔から優しい。優しいからこそ、自分の趣味とかよりも周りを優先してしまふことがある。例え、伊吹はやりたいたいことがあってもそれを隠し、周りに合わせ てしまうことだろう。

これは、姉様やパパとかに話しておこう。

伊吹『理亞ちゃんは？』

理亞「私？ 悩み中。ここ、ダンス部ないから。」

伊吹『聖良姉さんと同じ部活は？』

理亞「姉様と同じ部活ねえ〜。……………あれ？ そもそも、姉様ってなんの部活に入ってるの？」

よくよく思い出してみれば、姉様がなんの部活に入ってるのか知らない。この学校はダンス部と同じで馬術部がない。

だけど、姉様はこの2年間、ほとんどの平日の帰りは遅い。となると、何かの部活に入っている可能性が高い。

伊吹『もう、理亞ちゃんったら〜。聖良姉さんは……………あれ？』

伊吹も同じことを思ったのか姉様が何の部活に入っているのか分からないようだ。そんな話、1度も聞いたことが無かったな。姉様に会ったら聞いてみることにしよう

ー　ー　ガヤガヤ

伊吹『人が入ってきたね』

理亞「……………そうね」

伊吹と話をしているうちに、何人かの伊吹のクラスメイトが教室に入っていた。時計を見ると、そろそろHRが始まる数分前となっていた。

理亞「じゃあ、伊吹。そろそろ、私は行くわね」

伊吹『うん。』

理亞「ちゃんと、校門前で待ってなさいよ」

伊吹『はいはい』

理亞「じゃ、またあとで」

伊吹にそう言い残して、私は教室へと出ていく。その際ー　ー

「ねえ、あのテスト生……………。かっこよくない？」

理亞「oooooooooo!!」

通り過ぎた女性がそんな言葉を呟いた。私は思わず足を止めて振り向いてしま
う。

「それ!! 女子校なのに男子が入学するって聞いた時はマジで『は?』ってなった
けど、あのイケメンだったら全然あり!!」

「風の噂だけど、2年生や3年生の先輩たちも狙っているらしいよ?」

「本当に? でもまあ、あんなだけかっこ良かったら見逃さないよね」

理亞「……………」

いや、もう最初から分かっていた。もし、伊吹がここに来たらこうなってしまう
ことを。中学の時だっていつもそうだったから。

前まではそんなに気にする事はなかった。

……………だけど、今は違う。

あいつを想うようになってからは、周りの伊吹に対する一言一言に過剰に反応す
るようになってしまった。

この先、あいつのことを狙う女性は多く現れることだろう。その度に、私は怖く

なってしまう。

あいつの隣に私じゃない違う女性がいると考えるだけで体が震える。そんな未来がある可能性も少くはない。

理亞「……………もつと頑張らなくちゃ」

私は小声でそう呟いた。周りの人達に負けないように。そして、あいつに少しでも私のことを見て貰えるように。



花咲「皆さん！まずはご入学おめでとうございます！いよいよ高校生活のスタートですね。そして…私が皆さんの高校生活初めての担任になるわけですが、改めて自己紹介しますね！〇〇高校から来ました花咲聖那です！」

まさかの1年A組の担任の先生は花咲先生だった。嬉しいっちゃ嬉しいけど……………朝のことがあるから少し気まずい。

花咲「教科担当としては生物基礎と生物担当なのですぐに一緒に勉強出来ますね

！お互いに初めてなことでありますが、共に頑張って行きましょう!!」

とてもハキハキとして語る花咲先生。この人はちとせんと違った元気さがある

な。羨ましいかも。

花咲「趣味は小・中・高と続けていたサッカーと……最近、スクールアイドルにハマっています!!」

スクール……アイドル?聞いたことがあるようなないような。

花咲「スクールアイドルは本当に可愛いしカッコイイから良かったら皆も見えてね。もし、ハマったら先生と一緒に語ろう!!なんなら、誰かこの学校でスクールアイドル結成して欲しい!!」

お、おう。この先生、あれね。多分、オタクっていうやつだ。伊吹も特撮系とかになると、先生みたいになることがあるから。

それにしてもスクールアイドルねえ……。少なくとも、私には縁のない話ね。全く知らないし、興味も湧かない。ま、誰かさんがやってくれるでしょ。

花咲「それじゃあ、今度はみんなの話が聞きたいな。」

ーッッッ!?てことは……………

花咲「というわけで、今から皆さんに自己紹介してもらいます!!」

き、きたあああ!!自己紹介!!これを成功させるために日々、練習してきたといっ

でも過言ではない。

出席番号が1番の人から自己紹介が始まった。私の出席番号は7番。それまでに自己紹介の言葉を心の中で復唱しとこ。

「……です!! 1年間、よろしくお願いします!!」

花咲「うん。よろしくねー。次の子、よろしくね。」

理「はい」

そして、あっという間に私の番となった。

私は席から立ち上がり、教壇の前まで移動する。クラスメイトの一人一人の視線が突き刺さるのを感じる。

でも……、中学の頃に比べたらそこまで緊張はしていない。

理亞「はじめまして、鹿角理亞です。趣味はお菓子を作ることです。特技はバク転です。実家で甘味処をやっているので良かったら食べに来てください！よろしくお願いします!!」

思ったより、スムーズ良く言葉を言うことが出来た。私が頭を下げると、パチパチと拍手が起こった。

花咲「うんうん、ありがとうね。ちなみに、甘味処やってるって言ってたけどなんていう店なの？」

花咲先生が私に質問する。興味あるのかな？

理亞「『茶房菊泉』っていいですよ！ここから近いので先生もよかったら是非！」

花咲「うん！時間みつけて食べに行くね♪」

花咲先生は親指を立てて笑顔で言葉を出す。私は「ありがとうございます」と言っ
て自分の席へと戻った。

自己紹介は無事に終わることができた。

早く……早くそれを伊吹に伝えたい。

そう思えば思うほど、早く終われと願うようになった。



ピーーピリリリ

「お電話ありがとうございます。茶房菊泉です。」*チャヤ*

『私です』

「……………珍しいですね。あなたから電話くれるなんて。それで、何の要件で？」

『あの♀女♀が函館で目撃されたという情報が仲間から来ました』

「……………それは本当かい？」

『ええ。恐らくですが、間違いありません。いつ、手を出して来てもおかしくはない状況だと思います。』

「分かった。僕の方からも色々対策しておくよ。報告、ありがとう。」

『お願いします。もう、あの♀女♀にあの子を……………』

「大丈夫。女房や周りの頼りになる仲間達にも声をかけておくから安心してくれ。」

『分かりました。また、何か分かり次第、連絡しますね』

「よろしく頼むよ。では。」

ー
ー
ガチャ

「……………何があっても、守らなくては。それが僕達、親の役目なのだから。」

面白いと思ったら、お気に入り・感想・高評価よろしくお願いします!!

あと私情ですが執筆仲間のルビィちゃんキャンディーさんが執筆してる「ラブライブ!サンシャイン!!輝こうサッカーで!」の最終話がつい先程、更新されました。

ルビィちゃんキャンディーさんはなんと私の前作である『人殺し』を読んで投稿

を始めてくださったということなので、これ以上にならない嬉しさを感じます。約2年の更新、お疲れ様でした。

26話『やりましょう!』

あけましておめでとうございます。

年内中は間に合いませんでした!! すいやせん!!

だから、この話はお年玉だと思って読んでみてください。

今年中に無口を完結出来たら嬉しいですね（白目）

遂に……って感じになる話です。

理亞「ただいまー」

高校生活初日を無事に終え、校門で伊吹と合流してから私達は我が家へと戻る。私が自己紹介を上手く出来たのと、クラスメイトの子達と少し話せたことを伊吹に言うと、伊吹は自分の事のように喜んでくれた。

対する伊吹は、中学の時と同じようにはいかなかったようで、喋れないと伝えた瞬間に何だか冷たい空気を感じたという。中学の先生やクラスメイトは本当に良い

人たちが溢れていたから高校でも上手くいくと思っていたが、それでも無かったらしい。

まあ、伊吹のことだし、上手くやってられるだろうけど。もし、伊吹に何か嫌なことでもあったら、その時は全力で助けに入ることになろう。

理亞「あれ？姉様、帰ってきてる？」

玄関に、姉様の靴があった。姉様が学校終わりにこんな早く帰ってきてるなんて珍しいな。店の手伝いでもお願いされたのだろうか。

「あら、おかえりなさい。2人とも」

理亞「ただいま、ママ」

伊吹『……………』

靴を脱いでいると、ママが出迎えてくれた。けど、なんだか忙しそう？

「帰って早々、悪いんだけど店の手伝いお願いしてもいいかしら？今日、アルバイトの子が熱出しちゃって休んじゃったのよ」

理亞「それは別にいいけど、姉様は？帰ってきてるんでしょ？」

姉様が1人いれば、空いた人数分なんて余裕で埋めることができると思うんだ

けど。

「それがね、あの子ったら帰ってきてから部屋にずっと閉じこもっちゃって声をかけても反応しないのよ。」

理亞「え!？」

「今さっき、最後の手段として秋刀魚焼いてその匂いで部屋から出そうとしたんだけど、結局効果無くて……。こんなこと1度もなかったのに。これが噂の反抗期というやつなのかしら」

ママは姉様のことを猫か何かだと思っているのかしら。しかも、最後の手段って言うってたから過去にそれで成功してたって事なのよね? 何してんだ、あの人は。

しかも、それだけでも出てこないってことは何かあったのかな? それはそれで心配になる。姉様のことだから余計にだ。

伊吹『理亞ちゃん』

理亞「ん?」

伊吹『僕が店の手伝いに行ってくるから、理亞ちゃんは聖良姉さんのところ行ってきなよ』

理亞「伊吹……………」

伊吹『僕も聖良姉さんのことが心配だからさ。』

確かに、伊吹はホールは無理だけどキッチンに入ったらほとんど無敵だ。キッチンにいる人をホールをやって貰ったら私がいなくても仕事は回ることができる。よし！伊吹の言葉に甘えさせてもらおう。

理亞「分かった。お願い、伊吹」

伊吹『……………』ツカ

そう言って、私達は各々、目的の場所へと足を運ぶ。あの姉様が部屋に引きこもる理由なんて未知数だけど、きつと何かをしているに違いない。

とりあえず、姉様の部屋の前までやってきた。なんか……………秋刀魚の匂いがするなと思ったら近くに案の定、七輪と秋刀魚があった。しかも、何気なく1口齧ったあとがある。犯人は恐らくママだろう。

理亞「姉様ー!!」ツカ

私は部屋の扉を叩きながら、姉様を大声で呼ぶ。しかし、反応はない。いつもならすぐに出てくれるのに。

理亞「姉様ー!!」アッアッく !!

今度はさらに力を入れて扉を叩き、さらに大きな声を上げて姉様を呼ぶ。しかし、これも無反応。本当に何をしてるんだろうか

理亞「姉さ……………ん？」

あれ?よく見たら姉様の部屋の鍵……………かかってないっぽい?恐る恐るドアノブを捻り、前に押し出すと……………

ーキーイ……………

理亞「ーッッ!!」

思った通り、開いた。なので、そのままゆっくりの部屋の中へと入る。

すると、目の前には部屋を真っ暗にさせている中でテレビに張り付くように観ている姉様の姿があった。

一体、姉様は何を観てるんだろうか。

テレビの映像はど真ん中に姉様が独占しているせいで見えないが、なにやら音楽やら、歓声らしいものがひたすら聞こえてくる。

理亞「姉様？」

聖良「……………」

ゆっくりと姉様の隣に座り、顔を除くが姉様はまるで私が隣に来て声を掛けていることに気付いていないかのように反応をせず、ずっとテレビの画面を眺めていた。こんな姉様は初めて……………ではないけどかなり珍しい。

姉様をここまで釘打たせるなんて……………。どんな映像なんだろう……………。

私は姉様からテレビの画面に視線を移した瞬間—————

理亞「……………ッッ」

まるで、世界が変わったかのような衝撃を受けた。

テレビに映っていたのは、とあるライブ映像だった。3人の女性が音楽に合わせ踊り、歌っている。それだけのライブ映像。

そう、それだけ。それだけなのに。

——どうして、ここまで衝撃を受けるのか

——どうして、ここまで見いってしまうのか。

——どうして、ここまで全身に鳥肌が立つのか。

分からない。分からない。分からない。

一体何なんだ、これは!!

だけど、一つだけ言えることがある。それは……………

理亞「凄い」

とても安易で率直な一言だと思う。けど、それしか言葉が出てこないのだ。逆

に、これを言葉でどう表現すればいいのかこっちが聞きたい。

どうして、姉様が今日、ずっと部屋に引きこもっていたのか今なら分かる。だって、姉様と同じ気持ちだから。

こんなの見せられたら、ずっと見てしまう。時間を忘れてしまいうぐらいまでに。

今、凄く気持ちが昂っているのが嫌でも理解してしまおう。こんなの………生まれ
て初めてだ!!

中学最後のダンスコンクールで味わった感動を余裕で超えてしまいうぐらいのこの
昂りが堪らない!!

映像だけで、こんなに衝撃を受けるんだ。もし、生で。実際に自分の目で見た
ら………

そんなの………恐ろしくて想像がつかない。

ただ、この映像を最後の最後まで見て最終的に思ったことは………

♪私もやってみたい♪

その気持ちだけが、ひたすら私の中で何度も何度も響いた



映像が終わった。映像が終わってもなお、鳥肌が立ち続けている。

姉様が近くにあるリモコンに手を取り、画面を消す。すると、未だに衝撃を受け
啞然としている私の表情がテレビの画面に映った。

聖良「いやあ、凄かっ……………うわあ!？」

理亞「え?」

姉様がぐいっと2つのメロンが強調するぐらいまで背伸びをし、視線を落としたりと、その先に私がいるのを知り、驚きの声をあげた。まさか、本当に気付いていなかったの?」

聖良「りりりり理亞!! いるなら声を掛けてください!! びっくりしちゃうでしょ!!」

理亞「私は何度も声を掛けたわよ! それに気付かなかった姉様が悪い!」

聖良「ぐぬぬ……………」

姉様は納得したのか、何も言わなくなった。けど、表情が悔しそう。何で?

理亞「それより、姉様。さっきの映像は何だったの?」

私は気になったことを姉様に聞いてみた。

聖良「スクールアイドルのDVDです。この間、掃除してたら出てきたので気になって……………」

理亞「スクールアイドル？」

姉様は私に1つのDVDのパッケージを見せる。すると、そのパッケージには先程の映像に出ていた女性3人が写っていて、大きく『A—RISE』という文字が書かれていた。

『A—RISE』。

きっと、この3人の女性で結成されているスクールアイドル名なのに違くない。

聖良「それにしても、凄いですね。彼女たち。」

理亞「姉様？」

姉様はパッケージを見て言葉を呟いていく。

聖良「ライブ映像が始まる前に、少し彼女たちを含めたスクールアイドルの歴史について解説されてたんですが……どうやら、この『A—RISE』ともう1

つのグループを筆頭にスクールアイドルというコンテンツが大いに盛り上がるきっかけになったそうです。」

へえ……。この3人はスクールアイドル界では凄い人達なんだ。

聖良「そんな歴史を大きく変えるきっかけを作ったスクールアイドル……。それは正しく、頂点に立っていたといっても過言ではない」

理亞「姉様？」

変なことを言っている姉様の名前を呼ぶと、姉様はニヤリと微笑みながら私に声をかける。

聖良「理亞、貴女は気になりませんか？」

理亞「え？」

聖良「この3人が見ていた景色を」

理亞「景色……？」

この『A—RISE』の3人が見ていた景色。それはつまり——
理亞「それって!!」

聖良「ええ。ヰスクールアイドルの頂点ヰのです!!」

姉様は言葉をさらに続ける。

聖良「私は見てみたい。この3人が繰り出した最高の歌や踊りで数多くのスクールアイドルの皆さんを蹴散らし、頂点に立ったときの景色を。そして、一体……それがどんな景色なのかを!!」

姉様はまるで本能に従っているみたいに言葉を吐いていく。こんなに熱く語っている姉様は初めてだ。

聖良「もう一度聞きますね、理亞。貴女は気になりませんか？」

姉様は先程、言った言葉をもう一度私に放つ。

そんな姉様の質問に、私は気づいたら頷いていた。きっと、私も本能に従って故の行動だろう。

それを見た姉様は優しく微笑み、そして決意が孕んだ声で私にこう言った。

聖良「決まりですね、理亞。やりましょう!! スクールアイドルを!!」

拝啓、数時間前の私へ。

私、姉様とスクールアイドルやることになったわ。

面白いと思ったらお気に入りに入り・感想・高評価よろしくお願ひします!!

27話『無口はマネージャーに誘われる』

姉様とスクールアイドルをやると決めた数時間後、姉様はママに説教を喰らっていた。忙しかったのに、部屋にずっと引きこもっていたから仕方がないと思うけど。

「聖良は罰として晩御飯の時間まで正座して下さい!!」

とママに言われたため、『私は仕事をサボりました』と書かれたプレートを首からぶら下げながら、姉様は晩御飯の時間まで廊下で正座していた。

理亞「姉様、大丈夫？」

私は姉様に声をかける。流石に高校3年生にもなって、廊下で正座させられるのは身体的にも精神的にも厳しいものがあるだろう。悪いのは、ほぼ姉様だが、何か力になってあげたい。

聖良「いえ、むしろ何か目覚めそうな気がしました。もっと、この屈辱的な時間が続けばいいのに……みたいなの」

理亞「ごめん、姉様。出来ればその感情はずっと目覚めないで!!」

Mに目覚めた姉様なんて想像もしたくない。絶対に自分の部屋とかで全身縛っ

てそんな気がするもん。そんな姉様、見たくないわ。

夕食を家族全員で食べたあと（何故か、姉様はプレートをずっと首に下げたままだった）、風呂を終えてから早速スクールアイドルについて話し合おうと姉様の部屋に入る。

理亞「姉様、入るよ？」

聖良「どーぞ♪」

部屋に入ると、姉様はベットの上で漫画（呪術○戦）を読んでいた。しかも、未だにプレートをぶら下げたままで。いい加減、外して？

理亞「姉様、そろそろプレートを……って、え？」

プレートのことについて姉様に注意しようとしたら、なんと姉様の近くに伊吹がいた。伊吹は体操座りしたまま漫画（終末のワル○ユール）を読んでいる、私の方に視線を移す。

私は驚きのあまり、伊吹に向かって声を出した。

理亞「どどどど、どーして伊吹がここに!？」

伊吹『部屋で宿題してたら、光に負けない位の速さで聖良姉さんに拉致されてこ

こまで連れてこられた。』

理亞「姉様!? 一体、どういうこと!?!」

私が姉様に言葉を出すと、姉様はドヤ顔をしたまま胸を張り、

聖良「伊吹にも協力してもらおうと思ひまして!!」

理亞「ええ!?!」

姉様の発言に、私は驚愕の声を上げる。そして、同時に私は今更ながら気付いてしまった。

伊吹に………スクールアイドルをやっている私を見られてしまうということに。

理亞「………!?!?!?!」

それが分かった途端、凄く身体が熱くなるのを感じる。あの時は、ライブ映像や姉様の熱さでスクールアイドルをやるって決めただけ、伊吹がそれを見るとなったら、それはまた話が変わってくる。

そんなの……見せられる訳ないじゃん!! 無理無理無理無理!! 恥ずかしくて死ぬ自信しかない!!

今すぐに、姉様にやっぱりやめるように言おう!! 恐らく、まだ姉様は私達がスクールアイドルを始めようとしてる事を伊吹に伝えていないはず!! 手遅れになる前に言うんだ!

理亞「あの、姉さま……………」

聖良「伊吹! 実は私、理亞と2人でスクールアイドルを始めることにしました!!」

理亞「姉様あああああああああああああああああああ! ……」

おい、こら姉様あ!! やっていい事と悪い事の区別も分からなくなったかあああああ! ……!!

はい、もう無理乙乙。私、死んだ。想い人にスクールアイドルやることバレた。これから先、どう過ごせばいいのよ。もう、伊吹と目を合わせるのも恥ずかし

さと、気まずさでキツイんだけど。

聖良「理亞、急に大声出してどうしたんですか？もしかして、今日は女の子の日？」

生理じゃないわ!!ほとんど、姉様のせいだよ!?もう、嫌あ……。この場から消えてなくなりたいよお……………。

ちなみに、私たちがスクールアイドルを始めるのを聞いた伊吹はというと……
伊吹『スクール……………アイドル?』

首を傾げて、手話で告げた。どうやら、スクールアイドルのことを知らないみたいだ。ほっ……。よし!このまま何も無かったかのように振る舞えば……………

聖良「私が説明してあげましょう!」

と、思ったら無理でした。新米教師が着てそうな真っ黒なスーツを華麗に着こなし、丸メガネを装着した姉様がドヤ顔をしながらホワイトボードを持ってきた。え、どっから持ってきた?

聖良「スクールアイドルとは名称通り、学生がアイドル活動をすることを指します!!簡単に言えば部活みたいなものだと思います!!ミラブライブと呼べれ

る全国大会が存在するぐらい今では有名で話題があるものなんですよ！」

伊吹『ほへー』

姉様が分かりやすく伊吹にスクールアイドルについて説明を行う。それにしても、いつ調べたんだろう？この人、今日スクールアイドルについて認知したはずだよね？すごく熟知してる雰囲気出すじゃん

聖良「私と理亜はスクールアイドルを結成して、そのラブライブで頂点をとるつもりでいます！しかし、私達2人でもいけるのは思うんですけど、そのうち限界を感じると思うんです！だから、伊吹。貴方に手伝って貰いたいです」

それって、もしかして伊吹に……

聖良「もし、嫌じゃなかったら……私たちのマネージャーになってくれませんか？」

伊吹『マネージャー？』

聖良「はい！マネージャーです！」

やっぱり……。確かにスクールアイドルとして活動していくなら、少なくとも1人はサポートしてくれる人がいると非常に助かると思う。それが伊吹となったら

尚更だ。

姉様とスクールアイドルをやりたいというこの気持ちは嘘じゃない。本気だ。だけど、やっぱり恥ずかしいという気持ちが勝ってしまう。

……やっぱり、やめよう。こんな自分勝手に生半可な気持ちでやったら、姉様に失礼だ。スクールアイドルをやれなくなってしまうのは悔しいけど、私以外にも姉様と一緒に活動できる相応しい人物がいるはずだ。人脈が私と違って幅広くある姉様なら、すぐに見つけられる。

理亞「姉様、やっぱり私……」

伊吹『そのスクールアイドルっていうの、理亞ちゃんもやるの？』

理亞「え？」

伊吹が私の声を遮りるように、目の前にやってきて手話で、私にメッセージを送る。どうして、そんなことを私に聞くのだろうか。

伊吹『……………』

理亞「……………」

伊吹の相変わず酷く濁った瞳がじっと私を見つめてくる。少し不気味だと思い

つつ、私はゆっくりと……

理亞「もし……やるって言ったら??」

まるで伊吹を試すような言葉を掛けてしまった。そんなつもりなかったのに。私の言葉に対して、伊吹は……

伊吹『……………』*ビュッ**ビュッ**ビュッ*

理亞「……………え?」

伊吹はすごい速さで手を動かすが、早すぎて何て言ったか分からなかった。

理亞「今、なんてー」

伊吹『姉さん、マネージャーの件。引き受けるよ』

聖良・理亞「ーッッ!!」

今度はいつも通りの早さで手を動かし、マネージャーの件を了承した。

伊吹『やれることは限られてくるけど、やれるだけやってみるよ』

聖良「伊吹ー!ありがとうございます!お礼に今日、背中洗ってあげますよー

!!」

理亞「なっ!?!」

伊吹『いや、大丈夫です。』

聖良「どうしてですか!? 私に背中を拭いてもらうなんて、ほとんどの男の人が喜びで悲鳴を挙げるといふのに!!」

理亞「姉様! これ以上は黙って!!」

そりゃあ、あんなナイスボディな姉様に背中拭いてもらうなんて男の人からしたら、至福そのものでしょうね!! そんなこと、私が許可しないけど!!

………そういえば、さっき伊吹は何を伝えたかったんだろう。

私は未だにギャーギャー騒ぐ姉様を引きずりながら、そう思うのであった。



ちなみに、あの時伊吹が高速手話で伝えたのは………

伊吹『………絶対に似合うと思うよ』
 ♪♪♪♪♪

聖良（……………伊吹も男の子なんですね♪）

ちゃっかり、聖良はあの高速手話を解読しており、心の中でニヤニヤしてたとか……………。

面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価宜しくお願いします

28話『顧問とグループ名』

今回は執筆してて楽しかった

伊吹がマネージャーとして参加することが決まってから次の日の夜。私と伊吹は夕食後に姉様に呼ばれたため、姉様の部屋へと訪れていた。

聖良「今後の予定を決めていきたいと思います!!」

バン!と、またしてもいつの間にか用意していたホワイトボードを叩きながら姉様は声を出す。それに合わせて、私と伊吹はパチパチと手をたたく。

スクールアイドルとして活動を始めるには、まず段取りを決めて、それらを実行しなければならぬ。やることは沢山だ。

聖良「まずは部活の申請をしなくては、ですね。これを行わないとまず何ひとつ始められません」

姉様の言う通り、スクールアイドルは部活の一環であるため、始めるには学校内で部活を立ち上げる必要がある。

理亞「部活を立ち上げるために必要なものってなんなのかしら？」

伊吹『んー、そこは生徒会にお願いするとかじゃないかな？』

聖良「流石、伊吹、その通りです。部活を創立させるためにはまず、生徒会に行つて書類を貰う必要があります！」

どうして、そんなに詳しいの？って一瞬、思ったけど、確か姉様は生徒会のお手伝いを過去に色々としているんだっけ？なら、そこら辺は知ってて当然なのかもしれない。

聖良「そして、書類を貰ったらそこに最低3人の生徒の名前と顧問の先生の名前を書いて再び生徒会に提出します。無事に会議等で通れば部活を立ち上げることが出来るんです！」

理亞「へえ〜」

てことは、メンバーに関してはどう姉様と私と伊吹がいるから大丈夫ってことよ

ね？あとは顧問の先生か……。

聖良「うーん、顧問の先生だったら数学担当の赤星勝利生先生、古文担当の小野寺美音楽先生に音楽担当の縁下葉萌似先生辺りに目星つけてるんですけどね。どの先生も最低、1つの部活の顧問を引き受けているのでやってくれるかどうか……」
いや、待って？姉様が口にした先生の名前がどれもキラキラネーム過ぎて話の内容が頭に入ってこなかったんだけど！

聖良「でも、ダンスとかもやるって考えたら体育担当の葛飾武良温先生の方が適任ですかね？」

また、出てきたよ!!え、何!?うちの学校の先生、キラキラネーム多い系なの!?
伊吹『ちなみにうちのクラスの担任の名前は紅真柄先生だよ』

あんたのともかい!!もう、驚きを通り越して恐怖なんだけど!?

聖良「関係ない話ですけど、理亜の名前を決める時に理亜か光輝革命のどちらかで相当悩んだって母様から聞いたことがあります」

キラキラレポリユーション

キラキラレポリユーション

キラキラレポリユーション

キラキラレポリユーション

光輝革命!?!……光輝革命!?!何億という候補がある中で光輝革命!?!私、

もしかしたら鹿角光輝革命になってかもしれないの!?!本当に理亜っていう名

前になって良かったわ!!

伊吹『……………』ハハ

この流れで何かポケが思い浮かんだかもしれないけど、やらせないわよ!? 伊吹までそっち側に回ったら私の身がもたない!!

私はゼーゼーと呼吸を荒くする。息を吐くかのようにポケまくる姉様たちのせいで、話の路線がだいぶズレてしまった。

えーっと、何の話だったっけ? ……………あ、そうだ。顧問の先生の話だったわ。本当はどうしよう? ……………??

……………あ!!

理亜「……………いる」

姉様「理亜?」

理亜「いるわ、姉様! 顧問を引き受けてくれそうな先生が!!」

どうして、気づかなかったんだろう……。あの学校に通う先生でスクールアイドル

ルの顧問の先生に相応しい人物がいるじゃないか。あの人なら、是非とも顧問の先生を引き受けてくれるかもしれない!!

伊吹『もしかして……………花咲先生?』

理亞「そう!」

聖良「……………ああ、今年からきたあの先生ですね」

今年からうちの学校に赴任してきた、私の担任になった花咲 聖那先生。自己紹介のときにスクールアイドルが大好きだと口にしてたし、なんなら、やって欲しいとも言っていた気がする。しかも、来たばかりだから、まだ他に部活の顧問を引き受けてないと思う。

聖良「確かに、やってもらうならスクールアイドルの事を知っている人の方がいいかもしれないね。」

理亞「早速、明日お願いしようよ!!」

伊吹『そうだね。早くしないと他の顧問やらされるかもしれないしね』

理亞「分かりました！では、明日の朝、3人でお願いしにいきましょう！」

理亞・伊吹「『おー！』」

これで、ひとまず顧問については大丈夫だろう。次に決めなくてはいけないのは

聖良「私たちのグループ名……ですね」

スクールアイドルをやるに至って重要なもの。それはグループ名だ。グループ名を決めないと、私達を象徴させることはできない。

過去でいうとこの、A—RISEやμ's。どれも凄く良いグループ名で凝っているとと思う。

聖良「思いつき次第、どんどん言っていきましょう♪」オセキ

と、姉様は言いながらホワイトボードにどんどんとグループ名の候補を書いていく。前から何個か候補を考えていたのかな？なんて書いてあるんだろ……。

『YukkinParty』

『Sweetgrow』

『White Palettes』

『Azalea』

理亞「ちょっと待って、姉様。なんか、どれも見覚えのあるグループ名なんだけど!？」

聖良「はて……、何のことでしょうか？」

何のことでしょうか？じゃないのよ、姉様。どれもブシードさんがプロデュースしてるあの某人気バンド作品のグループ名なのよ。惚けてもダメ!!

伊吹『……………』ガキ

姉様が、消したスペースに今度は伊吹がペンでグループ名を書いていく。まあ、伊吹のことだ。姉様みたいにふざけることはないな。

『CRASH SISTERS』

『SMART TRIGGER STAFF』

『Anzai Posse』

『天地鹿』

理亞「待てーい！ー！！！」

アンタもか！！またしても見覚えのあるグループ名なんだけど！！某人気ラップバンドル作品に出てくるグループ名にそっくりなんだが!?

聖良「少しふざけすぎてしまいましたね。ここからは真面目にやりましょう、伊吹」

伊吹『……………』カカ

そう言って、2人はゴニョコニョと手話を交えながら会話を言いホワイトボードに文字を書き出す。見た感じ、真剣に会話しているように見える。私も2人の会話に入ってグループ名を考えなければ。

理亞「2人とも、私も考えるわ！」

そう思って、2人のところに訪れると

マंकIIゴッドリオンノウズザックIIジャクソン四分の一の純愛な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしているようで shouldn't を僕は知っている留守スルメめだかかずのここえだめだか：このめだかはさっきと違う奴だからブラックリムっていう高級なめだかの方だからー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペ茶房菊泉』キキキキ

理亞「ちょっと待って？」

いや、姉様達、さっき自分で言った言葉忘れた？真面目にやるって言ってからまだ1分も経ってないよ？普通にふざけてるじゃない!!

どうして、そんなにふざけるの？私は真剣に考えてるのに!!

理亞「2人ともふざけてばっか!!私、もう知らない!!」キキキ
聖良「理亞！」

伊吹『ツツ!!』

やっつけられない、と頭に血が登り、そう思った私は姉様の部屋を出て、そのまま家からも飛び出すように出て行ってしまった。

姉様から誘ってきたというのに、どうしてあんなにふざけるの？あんなことされるよ、姉様が真剣なのか、どうか分からないよ。

理亞「はあ……」

気づけば、少し離れた公園までやって来ていたため、公園の中に入り、そこにあるベンチへと腰をおろす。

何回か深呼吸し、心を落ち着かせる。頭の血が引いたところで私も私でどうでもいいところで叫んじやったことに後悔をする。

うわあ、これ。帰る時にすっごい気まずい雰囲気になるやつじゃん。自分で勝手に家を出ておいて、少し経ったら何事も無かったかのように家に帰ってきて気まずい時間を暫くの間、過ごすことになるやつじゃん!! (作者談)

けど……、やってしまったことは仕方がない。ここは時間を置いてから家に戻ることに……

理亞「あ……」

伊吹『……………』ブラブラ

下にあった視線を上によけると、伊吹がこちらを見ながらブランコに乗って

た。え、いつからそこに??そして、どうしてブランコに乗ってんの?意味わからないうだけど。

伊吹はブランコから降りて、私の方へと近づいていく。

理亞「……………何よ、こんな所までやって来て」

伊吹『謝りに来た。ふざけて過ぎてごめん。』

伊吹は手話でそう伝えて頭を深く下げる。表情は相変わらず真顔だが、明らかに反省してるオーラが全身から漂わせているのが分かる。

理亞「別にいいわよ、謝らなくて。私も怒鳴りながら部屋から出てっちゃったしお互い様よ」

これを機に、もう少しだけその場限りの感情だけで行動するのは控えることにしようと思決意した。

理亞「帰ろっか。」

伊吹『そうだね』

そろそろ帰ろうとベンチから腰を上げ、公園から出ようとした瞬間に頭の上にか冷たいものが落ちてきたのを感じた。何だろう、と思えば上を見てみると

理亞「……………雪？」

空から白い雪がゆらゆらと降っていた。確かに、今日は4月にしてはやけに冷え込むと思っていたけど、まさか雪まで降るなんてね。これは珍しいな。

つい、数ヶ月前までは当たり前のように降っていて、当たり前のように目にしてきた雪だったが、こうして久しぶりに見てみると綺麗に見えてくるな。

理亞「……………」

伊吹『……………』

暫く、私と伊吹はその場から立ち止まったまま、降り続く雪を眺めていた。

伊吹『なんだか……………懐かしいね』

理亞「何が？」

伊吹が雪を見ながら手話で私に話しかける。懐かしい？なんかあったっけ？

伊吹『まだ、僕がここに來てから間もない頃にさ、よく聖良姉さんが僕と理亞ちゃんを無理やり外に連れ出して雪降ってる中、遊んだよね』

理亞「ああ、そんなことあったわね。」

それは確かに懐かしい。今でも覚えてる。伊吹が私たちの家に居候するように

なって間もない頃……………、まだ私が伊吹に対して嫌悪な感情を持っていた時の話だ。

雪が降っている中、姉様がよく外に遊びに行こうと私と伊吹に言っていた。伊吹は伊吹でまだ馴染めないからか、遠慮して、私は私で普通に伊吹と関わるのは嫌だったから同じく断っていたけど、それでも無理やり姉様に連れ出されてたっけ。それで全身が雪まみれになるまで遊んでびしょびしょになったまま家に帰ってママに怒られてたな。

本当に……………本当に懐かしい。多分、それがきっかけで伊吹も馴染めるようになったし、私も伊吹と関わることでそこまで嫌だと思わなくなった。

そう思うと、何もかも始まりは姉様からなんだな。やっぱり、あの人は凄い。

理亞・伊吹「『あ!!』」

ビビッと、頭の中で1つのグループ名の候補が思い浮かんだ。伊吹も思い浮かんだのか、少しだけ嬉しそうな表情を浮かべている。

……………多分、私と同じグループ名のような気がする。確証はないけど、そんな気がする。

理亞「伊吹」

伊吹『うん、分かってる。』

伊吹に声をかけると、伊吹は頷きながらサムズアップする。そして、せーのという声をかけてから、私と伊吹は同時に思い浮かんだグループ名を一緒に明かす。

理亞・伊吹「『Saint Snow!!!!!!』」

想像通り、私と伊吹は同じグループ名を思い浮かんでいたようだ。まるで奇跡のような出来事だ。

このグループ名の由来は、私と伊吹との関係をつくるきっかけを作ってくれた姉様の名前と、私たち3人の思い出から構成したものとなっている。私としてはよく考えたものだ。

伊吹『早速、聖良姉さんに伝えに行こう』

理亞「そうね……………くしゅん！」

伊吹『理亞ちゃん？』

理亞「ああ。なんでもないわよ」

そういえば、そんなに着込むことなく出てっちゃったから、今更だけど寒く感じる。そのせいで、伊吹の前でくしゃみしちゃった。恥ずかしい……………。

ーガシッ

理亞「え？」

唐突に伊吹が私の手を握り始める。私は驚きで顔を赤くさせてしまう。

伊吹『ごめん、何かあったら良かったんだけど、何も無いからこうすることしか出来ないや。』

伊吹は申し訳なさそうに片手を動かして私にそう伝える。

……………馬鹿。それだけでも私は嬉しいというのに。

……………ありがとう。

理亞「早く帰っか」

伊吹『そうだね』

私と伊吹は互いにしっかりと手を握りながら、自分の家へと戻った。

余談だけど、家に帰ったら姉様が発狂しながら切腹しようとしていたため、家族総出で全力でそれを阻止しました。

面白いと思ったらお気に入り・感想・高評価よろしくお願ひします\$|\$(Ä:Ä)\$:Ä\$?

29 話『顧問爆誕』

私たちのスクールアイドルグループ名が『Saint Snow』と決まっ
てから次の日の朝。私と姉様と伊吹は学校の職員室の前へとやって来ていた。

ここにやって来た目的はただ1つ。私のクラスの担任である花咲聖那先生に顧問の先生をお願いしに来たのだ。自らスクールアイドルオタクを自称する先生にお願いすれば引き受けてくれる可能性は高いはず。

聖良「失礼します。花咲先生はお見えですか？」カッ、カッ、カッ
姉様が職員室の扉を開けて、軽く頭を下げながら声をかける。すると、「はいはい」と声を出しながら奥で花咲先生が手を振ってくれた。

花咲先生のいる場所を確認した私たちは姉様を先頭に職員室の中に入り、そのまま先生の前まで移動する。

聖良「おはようございます、花咲先生。私、3年生の鹿角聖良といいます。お話ししたいことがあるんですが、今、お時間大丈夫ですか？」

初対面ということで、姉様は自己紹介を交えながら、花咲先生に話しかけた。

「おはよう。鹿角さんのお姉さんね。よく話は職員室で色んな先生から聞いてるよ♪時間はそうだね……………、このあと、朝の職員会議があるから15分程度だったら大丈夫だけど。」

聖良「はい、構いません」

「そっか。どうせだったら、隣の会議室で話聞こうか？」

聖良「そうですね、お願いしてもいいですか？」

「分かった。それじゃあ、行きましようか。」

花咲先生はそう言って立ち上がり、「会議室借りますね」と職員室の先生方に声をかけながら鍵を借りて隣の会議室へと向かう。私たちは先生のあとに続いて歩いていく。

「はい、どうぞ。」ガチャ

聖良「失礼します」

理亞「し、失礼します」

伊吹『……………』ノコ

会議室の扉を開けて、花咲先生は私たちを招き入れたあと、椅子に腰を下ろして

話を聞く体勢へと変わった。

「それで、話ってなにかな？」

聖良「はい。実は私達、スクールアイドルをやろうと思ってまして。」

「……………へ？」

姉様の言葉に先生は目を丸くしてポカンとさせる。

聖良「スクールアイドル部の顧問を引き受けてくれないか、花咲先生にお願いしてきました」

「……………ほ？」

聖良「理亜から先生はこの学校でスクールアイドルを結成してほしいという願望があるということを聞いたんですが……………どうでしょうか？顧問の件、是非とも引き受けてくれませんか？」

「……………それ、マジで言ってる？」

聖良「言ってます。本気って書いてマジと呼ぶレベルでのマジです。」

「oh…………、ちょっと待ってね」

花咲先生はポケットからハンカチを取り出して顔に当て動かなくなる。…………え、

そんな気持ちを落ち着かせる時によくやる行動を取るほどなの？

「ふう……。OKOK」

数分後、落ち着いたのか花咲先生はハンカチを顔から離してポケットの中に戻したあと、私たちの方へと顔を向けた。

「申し訳ないけど……。この話は無かったことにさせてもらうね」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

花咲先生のお断りの言葉に、私たちは言葉を失う。ど、どうして……。スクールアイドルが好きな先生にとっては、得でしかない話なのに。

「鹿角さん……。あ、妹ちゃんの方ね。いくら、私がスクールアイドルが好きだからといっても確実に顧問を引き受けるとは限らないわ。」

「ッッ……。もしかして、表情に出てた？」

「私はね、できるだけ仕事と趣味は分けるタイプなの。この教師という仕事に就いているからには生徒達の今後の道標になれるように動き、動いたからこそ趣味を楽しむときは仕事のことを忘れてとことん楽しむのが最高なのよ。だからこそ、仕事の内容に興味と絡むようなことはできるだけしたくない」でも、顧問になれば色んな

スクールアイドルに会えますよ。」……………うぐう!!」

気持ち揺らぐの早っ!! あんだけ真剣な顔で語っておきながら姉様の一言で一気に墮ちかけちゃったよ、この先生。これなら、あと一言二言声を掛けたらいけるかもしれない。

理亞「そうですよ、先生!! もしかしたら、今後先生が推してるスクールアイドルに会えるかもしれないんですよ!!」

「くううう!!!」ビクビクビクビク

私も姉様に続けて声を掛けると、花咲先生はまたしても悶える。所々、痙攣させている理由は敢えて追求しない。

伊吹「……………」フクフク

「フクフク……………え ?」

膝をカクカクとさせ、まるで産まれたばかりの小鹿みたいな姿勢をとる花咲先生に伊吹は近づき、いつの間にか手にしていた書類らしきものを花咲先生に見せる。

「くうううううううううう!!!」ビクビクビクビク

書類を見た花咲先生は更に痙攣させながら悶えた。あいつは一体、先生に何を見

せたのだろうか。少なくとも朝の時間帯には決して目にすることはない光景が目の前に広がっていた。

ハアハアと息を荒くしながら膝を地につける花咲先生に近づくと、キリッと睨みつけ言葉を出した。

「くっ………殺せ！」

いや、そんなオークに穢される寸前の敗北女騎士みたいな発言されましても。担任にくっ殺発言される生徒の気持ちを考えて欲しい。

聖良「どうしましょう、理亞。今の先生の姿を見ると……内に秘めてる何かが目覚めてしまいそうです♡」

理亞「ずっと内に秘めてて貰えると助かるわ、姉様。お願いだから目に光を取り戻して。」

前はMに目覚めかけそうになって今度はSか!! 姉様は案外、その場の雰囲気でも何かに目覚めかける傾向があるみたい。

聖良「ところで、そろそろこの雌鹿をどうしましょうか?」

いや、もう目覚めてる。Sに目覚めてるよ、姉様。先生に対して雌鹿とか言っ

ちゃったよ。しかも、素の表情で言ってるから多分、Sに目覚めてること無意識だよ。ちょっとネクタイ外して鞭みたいにパチンパチンするのやめて。

聖良「理亞？」

理亞「はい、女王様……じゃなかった、姉様。私的にはもう諦めた方がいい気がしてきたわ」

ここまでして折れないなら、きつと何言っても無理だろう。てか、今の先生を見てたら可哀想でとても罪悪感を感じてるから、これ以上先生に負担をかけたくなってしまうのが本音。だって、私のクラスの担任の先生だもん。教室とかで会う時気まづくなるわ

聖良「……………仕方ありませんね。先生に謝罪してから、他にあたることにしましょう」

「……………待ちなさい。」

諦めようとした瞬間、花咲先生が声を掛ける。乱れていた服装や外れかけていたメガネを整えながら私たちに向かって言葉を出していく。

「私が知る限り、北海道内に存在するスクールアイドルは全国で比べると小規模だ

けど、それでも300近くのスクールアイドルがいる。」

理亞・聖良 「「ッッ!!」「ムッッ

な、なんなの。この威圧は……………!!先生は明らかにさっきのくっ殺ムードから一変して息をするのを忘れてしまいうぐらいの雰囲気を漂わす。

「そして、その中でも特にここ函館区内はその7から8割が数を占め毎年、ラブライブの予選は激戦区になっている。……………この意味は分かる?」

聖良 「……………はい。」

「じゃあ、貴女たちは言ったわよね。私が推してるスクールアイドルに会えるかもって。それはすなわち……………」

ラブライブを勝ち抜いて決勝に連れてってくれるっていう認識でOKかしら??」

理亞「oooooooooo!!」
ハッ

なるほど。確かに私と姉様は先生にスクールアイドルに会えるかもしれないと軽率ながら発言した。しかし、それを実現するためには函館だけのスクールアイドルが集まるのではなく、全国の予選を勝ち抜いたスクールアイドルが集まる決勝に進まなければ行いけない必要があるということ。

彼女の一言に対して、私と伊吹と姉様は顔を見合わせる。そして、何も言葉を出さずに頷き、3人揃って先生に向かって大きな声を出した。

覚悟と真意を込めて。

聖良・理亞「はい!!」

伊吹「……………」
カッ

「……………分かった。引き受けるよ、貴女たちのスクールアイドル部の顧問」

聖良・理亞・伊吹「……………」

「その代わり、ちゃんとラブライブでは勝ち進んでよね。推しのスクールアイドル

ちゃん達に会えるように！あ、もちろんやるからには私も全力でサポートして
から！」

聖良・理亞「はい！！ありがとうございます！！」

伊吹「……………」ハ。ハ。ハ。

やった！！メンバーも揃った。顧問の先生も決まった！！あとは、書類に記載して
生徒会に提出すればスクールアイドル部を設立することができる！！

そんなウキウキ状態だった私たちだったが……………

「残念だけど……設立は認められないですわ」

理亞「え？」

放課後に部活申請の提出をしにいった際、生徒会長らしき人物に申請拒否されてしまった。

30話 『お願いします』

久しぶりです。

私は一瞬、目の前にいる人物が何を言ったのか理解することができなかった。いや、理解したくないと言った方が正しいかもしれない。

函館聖泉女子高等学院生徒会長、和田架純は冷たい目線を私達に向けながら……：スクールアイドル部の設立を、きっぱりと否定したのだ。

聖良「……：架純さん、理由を伺ってもいいですか？ 現にメンバーも3人揃ってて、顧問の先生もいます。部活申請をする条件は満たしてるはずですが？」

そう、姉様の言う通り我が校の部活申請するための条件はしっかりと整えてきた。メンバーは私と姉様、そして伊吹の3人。顧問の先生は朝、なんとか花咲先生が引き受けてくれたため、設立を否定する理由などないはずだ。

しかし、この先輩は想像を遥かに超える一言を発した。

「……………いいえ、今揃っているメンバーは2人です。」

理亞「え？普通に3人いますけど……………」

……………この人は一体何を言ってるんだろうか？メンバーが2人？私と姉様、伊吹はこの場にいるし、申請書の名前欄にもしっかりと3人の名前は書いてある。2人だけなんてありえない。

「いいえ、2人です。この場にいるメンバーは鹿角聖良と鹿角理亞の2人だけです。」

理亞「……………は??」

この発言を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。今、この人はなんて言った?? この場にいるメンバーは……………私と姉様だけ？

理亞「な、何を言ってるんですか……………。だって、ここには私と姉様、そして天

草伊吹の3人が……」

「天草伊吹?? そんな生徒を私は………いえ、私達は………」

「知りません」

生徒会長がこの言葉を言い終える頃には、私はもう無意識に動き始めていた。

聖良「理亞!!」

姉様が私の名前を呼ぶが、そんなのどうだっていい。私は拳に最大火力の力を入

れる。

この人は………こいつは今、私に対して言っではいけないことを口にした。

——天草伊吹という生徒はいない？

——天草伊吹という生徒を知らない？

ふざけんな。こうして、今、伊吹は私たちの隣にいて、あんたらの目の前にいるだろうが。

こいつだけは………いや、伊吹のことを阻害として見る奴ら全員を絶対に許さない。私の手で絶対に潰してやる！停学？退学？そんなもの、知ったことか。

私の家族を貶す奴らは絶対に許さない！！！！

理亞「おおおおおおお！！」

私は雄叫びをあげながら生徒会長の顔面に向かって言葉を突き出した。

——バキッ！！

確かな感触を感じた。明らかに私は人の顔面を殴った。

しかし……………それは生徒会長の顔面では無かった。

理亞「な……………んで」

伊吹「……………」オホオホ

理亞「何で……………何でよ、伊吹!!そいつは貴方のことを存在してない扱いしたのよ!それなのにどうして!!どうして庇ったの!?!」

私は自分の拳を生徒会長の代わりに直接喰らって鼻血を流す伊吹に向かって大声を出す。

伊吹『そんな理亞ちゃんを……………僕は見たくないから』

理亞「!!……………うう!!」

私はその場の床に膝を着いて泣いてしまった。

聖良「……………理亞、貴女は今すぐに伊吹を保健室に連れてきなさい」

理亞「ねえ……………さま」

応急処置として、伊吹にハンカチを渡す姉様が私に優しく声をかける

聖良「ここからは、私1人で話をします。だから、ここは私に任せて早く伊吹を保健室に連れてってあげてください。」

理亞「……………はい。……………伊吹、行ける？」

伊吹「……………」ゴク

理亞「さっきはごめん……………。保健室まで私が責任もって連れてくから」

伊吹「……………」ゴク

なかなか鼻血が止まらないのか、姉様が渡したハンカチが段々と赤く染っていくの確認し、自分がしてしまったことを後悔しながら、伊吹の背中を支えながら生徒会長を後にした。

——聖良視点

聖良「架純さん、まずはお詫びを」

私は架純さんに対して、深く頭を下げる。

「いえ、別に。そうされてもおかしくは無い態度をこっちからとってしまったので」

聖良「そう言ってくれると助かります。それじゃあ、改めて説明してくれませんか??あの子を生徒として認めない理由を」

「いいでしょう。本来はあまり教えるのは宜しくありませんが、貴女なら教えてあげましょう。」

架純さんは、そう言って生徒会長が座る机の引き出しから数枚の紙を取り出し、それを私に差し出す。

ゆっくりと受け取った私は、渡された紙に目を通す。すると、そこには――

「ツツ………。なるほど、共学反対勢ですか」

「ええ。」

彼女が差し出した紙には、我が校の共学化における批判的なデータが集っているものでした。在校生にその親、卒業生から共学化に対しての反対の意見が予想以上に多く寄せられていた。

「存続の可能性を上げるとはいえ、その方法が浅さかだということ。我が校は女子校だからこそ、存在価値があり伝統が続いてきました。それを共学化という形で総崩れになってしまうのを恐れているのです。」

「ですが、共学化の件についてはまだ保留であり、確定ではありません。だからこそ、学園長は伊吹をテスト生として――」

「そう、それが問題なのです。」

私の言葉を遮るように架純さんは言葉を出していく。その時の彼女の表情は冷酷なものでした。

「……………ということですか？」

「例え、可能性であっても、確定でなくても、彼がテスト生であっても、この学園に男子自体が存在することが問題なのです！そんなこと、絶対にあってはいけない!!」

「彼をテスト生として推薦したのは学園長なのですよ？あの人を疑うというのですか？」

「とんでもない！学園長のことはとても尊敬しています。ですが……………だからといって信用しろ、と言われても限度があります」

私の意見に対して、彼女も負けずに反論する。架純さんの一言一言に対して私は苛立ちが芽生え始める。

「伊吹が……この学園に対して不利益をもらたすだけでも？ 女子生徒を襲うとも思ってるんですか？」

「彼と立派な男性ですからね。可能性は十分にあるかと」

「ツツ!! あの子は絶対にー」

「『そんなことはしない』ですか？ どうしてそんなことを言いきれるんです？ 貴女にとって他人に過ぎないのに」

「……………!!」

「事情があつて、彼と何年も同じ屋根で過ごしてきた貴女にとっては、優しくて良い子なのでしょう。だからこそ、そんなことはないと考える。……………勘違いしないでください。彼は男性です。第二次性徴も始まり、思春期だつて突入している。自分以外、女子生徒しかいない環境の中で、彼がそういう行動をしないと100%言い切れますか？」

冷たい視線を私に向ける。確かに、彼女の言うところは正論だ。正論が故に反応する余地もない。

「それは……………」

「私からの話は以上です。スクールアイドル部の設立については、あと他に女子生徒を1人勧誘してから考えましょう。では、これで」

架純さんは冷淡にそう言って、生徒会室から退室しようとする。

彼女が私の横を通り過ぎようとしたところで――

「チャンスを……くれませんか？」

「は？」

私の弱々しい一言に、彼女は足を止める。

「確かに、架純さんの意見は至極真つ当なものです。私が他人だったら、架純さんの意見に賛同していたでしょう。」

「それでしたら――」

「ですが、だからといって伊吹が『男』だから、という理由だけで除け者扱いにされるのは納得しません。あの子のことを知らない癖に、そんな酷いことを言わないでください。」

「貴女だって、彼のことを、100%理解していないでしょう!!」

「ええ、知りませんね。あの子のことは知りたくても知ることが出来ていない。こ

れが、現状です。ですが……………、逆をいえば私が伊吹に対して知っていることは沢山あります。言いましようか？全部言い終わる頃には、私たちは卒業してる位まであの子にはいい所があるんです!!」

「……………」

「だから、架純さん。チャンスを私達に下さい。1ヶ月……………いえ、2週間で伊吹がこの学園に滞在すべき存在であると、伊吹が不純な行為を絶対にしないと貴女含めて反対勢の方達に証明させます。だから、お願いします」

私は架純さんに深く頭を下げる。私の願いを受け入れてくれたら嬉しいのですが……………」

「分かりました。」

「……………」

彼女の言葉に、私は頭をあげる。

「聖良さんには色々と生徒会関連で助けられてきましたからね。こう言うてはなんですが、貴女とは親しき友人として疎遠の関係にはなりたくないのですよ。だから、貴女のお願いを聞きましょう。」

「ありがとうございます!!」

「期限は今日から2週間。期限内に天草伊吹がこの学園に存続するに値する証明を私たちに見せてください。それで、納得出来たら引きましょう。ですが、もし出来なかったら………分かりますよね?」

架純さんの言葉に、私は何も言わずに頷く。

「では、頑張ってください。」

最後に私にそう言い残して、架純さんは生徒会室を退室した。

私も、早く伊吹と理亜がいるであろう保健室へと足を運ばなくてはならない。だけれど、動かない。

先程まで、架純さんが口にした言葉が木霊のように繰り返して脳内再生される。――天草伊吹??そんな生徒を私は………いえ、私達は………知りません

――例え、可能性であっても、確定でなくても、彼がテスト生であっても、この学園に男子自体が存在することが問題なのです!そんなこと、絶対にあっては

「とりあえず、すぐに退散しましょうか。今日から忙しくなっちゃいますからね。」
私はそう言って、逃げるようにその場から離れ、保健室へと向かった。

さて、ここからどう展開していこうか。

面白いと思ったらお気に入り・感想・評価お願いします。

31話 「悲報」 姉様はヒードランだった

「はい、これでひとまずは大丈夫ですよ。念の為、ここで安瀬にしててね。」

「ありがとうございます」

「……………」

生徒会室から急いで保健室へとやってきた私たちは養護先生に事情を説明し、伊吹は応急処置を受けてもらった。今、彼の鼻には絆創膏が貼られている。

「先生、これから少し用事で席を外しますね。保健室出る時は部屋の電気だけ消して出るようにしてください。」

養護先生はそう言って、保健室から退出する。

「……………」

「……………」

うう……、気まずい。なんて、話しかけたらいいのだろうか。そもそも……、私に話しかける権利なんてあるのかな。自分の身勝手な暴走で伊吹を傷付けてしまったというのに。

恥ずかしい。この一言に限る。

高校生にもなって。しかも、これからスクールアイドルをやるというのに、たった一言で私はあの生徒会長に殴りかかろうとしてしまったのだ。少しでも冷静になつてみれば対処法なんていくらでもあったのに。

ぎゅっと、気づいたら下唇を噛んでいた。血は出てないけど、それでも少しだけ鉄の味を微かに感じる。

伊吹『理亞ちゃん、ありがとう』

理亞「……え」

自分の短気の幼稚さに……愚かさで涙が出そうな時に伊吹がこっちを向いて手話で感謝の言葉を述べた。どうして……

伊吹『あれは……僕のためにやってくれたんでしょ？やり方は少し危なかったけど……それでも嬉しかった。』

普段は無表情なことが多い伊吹でもこの瞬間だけは一瞬だけど本当に嬉しそうな表情を浮かべていた。

伊吹『僕がこの学校で周りから歓迎されていないことは気付いていた。やっぱり、

ここは女子校で僕は男だから。テスト生であっても本来ならいるべきでない存在だからね。』

理亞「そんなこと——」

そんなことはない!!! そう言いたかった。だけど、最後まで言えることが出来なかった。

きつと、あの生徒会長が伊吹をメンバーとして……、この学校の生徒として認めていないのはそれが要因なのだと気付いてしまったから。

私は伊吹とほぼ家族みたいな関係でずっと一緒にいたからこそ、伊吹がこうして邪険な扱いをされて嫌な気持ちになる。それと同時に怒りの感情が出てくる。

だけど……………

もし……その関係が「鹿角家」ではなかったとしたら？

伊吹が違う家庭にいて、私や姉様とは関わりなく過ごしてきて、今みたいにテスト生として迎えられて……………

他人の立場として彼を見た時、私はどう感じるのだろうか。いや、私の事なんだから私が1番知っている。

きっと、周りと一緒にで邪険な気持ちを抱くはずだ。

女子校なのに、男子なんてふざけんな。何を考えてるだ、って。

理亞「ぐず……………」

そんなif物語を想像するだけで、自分が嫌になる。例え、そんなことは絶対に起きなくて、これまでに過ぎしてきた思い出が本物であると分かっていたとしても。

伊吹『理亞ちゃん？』

泣きそうになってる私を見て伊吹は心配そうにする。

理亞「なんでもない。ちょっと『もしも』の世界線を想像してただけ」

伊吹『…………それは、もし僕が鹿角家に来なかったときの『もしも』の世界線？』

理亞「ツツ……………うん。」

まるで、私の考えてることが分かるかのように伊吹は答える。

伊吹『僕は……………、色々あって鹿角家に居候することになったけど、鹿角家で良かったって心の底から思ってるよ。』

理亞「え……………」

伊吹『確かに鹿角家じゃなかった世界線があったかもしれない。けど、僕はこうして鹿角家にいる。おじさんやおばさん、聖良姉さんや理亞ちゃんがいる鹿角家なんだよ。』

伊吹は私の手を優しく触れる。彼の手は暖かかった。

伊吹『僕は…………この学校にいたい。理亞ちゃんと聖良姉さんがこれからやるスクールアイドル『Saint Snow』の活動の手伝いをマネージャーとしてやっていきたいよ。』

伊吹は私の目を見て想いを手話を通じて伝える。そんな彼の濁りきった目に珍しくハイライトがあり、そんな瞳に泣きそうになっている私が映り込んでいた。

そうよ…………、何してんだ。私

ありもしない『もしも』に何を怯えてるんだ。グズグズしてる暇なんてあるはずないのに！

私も伊吹と同じで、伊吹には学校にいて欲しい。これからも一緒にいて欲しい。スクールアイドルの手伝いを彼にして欲しい。そんな感情がたまらなく溢れてく

る。

「ありがとう、伊吹。ちょっと私……弱気になってたみたい。それと……改めて殴ってごめん。痛かったでしょ？」

伊吹『うん、それはもう。』

即答かよ。そこは否定して欲しかったな……。殴ってしまった私は何も言えないけど

伊吹『ん、鼻血は止まったみたいだしそろそろ聖良姉さんと合流しよう。これからについて話し合わなきゃ』

理亞「そうね……。まだ生徒会室にいるのかしら」

できれば、暫くはあの女に会いたくないんだけどな

聖良「その必要はありません!!!! なぜなら、私はもういるからです!!!!!!」
なんと、唐突に上から姉様の声が聞こえてきた。まさかな、と思って上を見てもとあら不思議。姉様が保健室の天井に張り付いていた。

聖良「どーも、5本指の爪を食い込ませて壁や天井を這いまわるのが最近の趣味の聖良です。」

【悲報】 姉様はヒードランだった。



あれから、天井から飛び降りたヒードランこと姉様は私たちが退出してからの生徒会長とのやり取りを話してくれた。

理亞「2週間……………」

生徒会長が与えてくれたこの2週間で伊吹がこの学校にいてもいいことを証明しなくてはいけない、とのこと。2週間か……。あまりゆっくりとはできないわね。

理亞「どうやって証明するか……………」

伊吹についてまとめたのをビラとして配る？それとも演説やプレゼンとかで伊吹の存在価値を認知させる？うーん、どれもなんかピンと来ないなあ。

聖良「理亞、貴女は何を考えてるのですか？」

理亞「え？何をって……………だから方法を」

姉様はお前、マジ？みたいな表情を浮かばせて私を見る。

聖良「やるとしたら、アレしかないでしょう？」

理亞「アレ？」

未だに姉様の意図が汲み取れない私は首を傾げるのみだ。

聖良「ふふ……、最初は伊吹に対する発言でどうにかなりそうでしたが……よく考えてみたら架純さんには感謝しかありませんね。私たちの『これから』の1歩目にこれ以上に相応しいものはない。」

この発言で私は、姉様がやろうとしている内容の大体を察してしまった。

理亞「ツツ……、姉様。まさか」

ニヤリとまるで小悪魔かのように可憐に微笑む姉様は私たちに向かってハッキリと大声で宣言した。

聖良「理亞・伊吹。やりますよ。2週間後……ここでSaint Snowの記念すべきファーストライブを……！そして、このライブでバカどもに証明してやりましょう!! どれだけうちの伊吹が……優しく出て来る子かを……！」

32話 「4倍弱点」

ミスったので再投稿しました

理亞「ファーストライブ……」

姉様の宣言に無意識に生唾を飲んでしまう自分がいた。こんなに心が滾ることが過去にあっただろうか。

S a i n t S n o wの記念すべきファーストライブで伊吹の存在価値の認知させる……これほど素晴らしい方法があるだろうか。いや、ない。流石は姉様だ。

聖良「とは言っても、ライブをやるに至っての段階の踏み方はまだ分かりません。調べながら……にはなりますが、私たちにはそんな時間はありません。」

確かに……。ライブをするとなったら、当然だけど準備が必要だ。ライブを行う場所に歌う曲にダンス……、今だとこれぐらいだろうか。もっと他にあるかもしれないけど……。

聖良「時間は有効かつ効率的に使っていきましょう。まずは……………」



「それで、私のところに来たって訳ね」

聖良「はい。スクールアイドルについて熟知してる花咲先生であればライブについて色々と教えて頂けると思っています……………」

私たちが来たのは職員室であり、目的の人物はスクールアイドル部の顧問を引き受けてくださった花咲先生だ。スクールアイドルオタクの先生なら、姉様が言った通りライブについて色々と教えて貰えると思ったからだ。

生徒会であったやり取りや、Saint Snowのファーストライブについて先生に話した。

「……………」

伊吹『……………??』

理亞「先生？」

「い、いや。なんでも。大変だったわね。」

一通りの話を聞いた先生は、何も言わずにジッと伊吹を見つめていた。見つめら

れている伊吹は首を傾げ、私が思わず声をかけると先生は少し慌てながらも反応をみせた。

「天草くんのは私にも耳が入ってたけど……ここまですくとは思ってなかったのよ。」

当然ながら伊吹のテスト生の反対勢力がいることは花咲先生も認知していたようだった。

「ライブの件は私も大賛成。分からないことがあればなんでも言って。私も出来ることはできる限りサポートするわ」

聖良「ありがとうございます。助かります」

やった。花咲先生の協力も得ることに成功した。彼女がいれば百人力だ。

「あともう少しで今やってる仕事落ち着くから……はい、これ。2階の空き教室の鍵ね。ここで待って貰っても良い？ 終わり次第、すぐに向かうから」

聖良「分かりました。」

花咲先生から鍵を貰った私たちは職員室から出ようとする。そうよね、先生だって自分の仕事があるわよね……。こればかりは仕方がない

「ねえ、なんか生徒会室の壁が凹んでるみたいだけどなんか知ってる？」

「知ってる訳ないでしょ。そんなゴリラみたいな生徒、うちにいる？」

「早急に業者呼ぶかあ……………」

なんか職員室にいる1部の教員たちがざわざわとしていた。少なくとも私が生徒会室から出るまでは壁なんて凹んでなかったはず……………まさか……………

チラッと姉様の顔を伺う。すると、姉様は私の気持ち察したのか、普段通りの笑顔で答えた。

「私は知りませんよ。私、あそこで架純さんとヒードランごっこしかしてませんので。」

とりあえず、聞かなかったことにした。



花咲先生に指定された空き教室に到着した私たちは先生が来るまで、ざっくりと今後のことについて話し合うことにした。時間は有効に使わなきゃだもんね。

「お待たせお待たせ。」

少しすると、花咲先生も来てくれた。メンバーが揃ったため、ライブについて話

し合う。

「私が来るまでなんか話してた？」

聖良「はい。ライブでやる場所や曲の方向性を少し……」

「ふむふむ。んで？」

聖良「場所は校内の講堂辺りをどうだろうって。あそこならステージも広いですし、見に来てくれる人も多く入れることができます。」

「確かに。ライブをするならあそこはもってこいの場所ね。使用許可については私の方から上に確認してみるわ。」

聖良・理亞「ありがとうございます」

聖良「曲は私や理亞はロック系を良く聞くので、そっち方向で作詞作曲をしていければ、と話してました。」

「へえ……意外。ロックとか聞くんだ。GL○Yとか聞いたりするの？」

聖良「そうですね、G○AYも好きですけど……私はマキシマム○ホルモンとかよく聞きますね」

「本当に好きなんだね……」

まさか、と言わんばかりに花咲先生は驚いた表情を見せる。まあ、確かに見た目は清楚そうな姉様がガチガチのロック系が好きなのは意外かもしれない。興奮するとよくヘドバンしたりするし……。ちなみに、私はビー・〇ルズ派です。

「でも、ロックかあ……。私もよく聞いたりするからアリだけど……。ここに生徒に受けるかどうか難しいわね」

先生は顎に手を当てて悩む動作みせる。私たちが通う函館聖泉女子高等学院は周りの高校に比べてもトップレベルの学力を誇り、なおかつ音楽にも力を入れている学校だ。しかし、音楽といっても聖歌隊のような神聖的な音楽活動を勧めていくことが多いため、ロックといった激しい音楽を好む生徒が少ないかもしれないということ。

もしも、ライブにてロックでいってしまった場合、場違い感が激しく出てしまう可能が大いにありえるということ。これを花咲先生は懸念しているようにみえる。となると、ここはぐっ！と我慢して聖歌隊のような神聖のイメージのある曲にして、観に来てくれた人の第一印象を良くして評価を得る方向にした方が……

伊吹『先生』

「ん？」

伊吹が手にしていた落書き帳で文字を綴り、先生に呼びかける。

伊吹『心配しなくても大丈夫です。聖良姉さんと理亞ちゃんの歌うロックは……
……ロックの知らない人達を魅力しちゃうぐらいの力がありますので』

「……………その根拠は？」

oooooooooooo

理亞・聖良「……………!!？」

なんだろう……。花咲先生の静かに発した、たった一言で背筋が凍ったように感じた。姉様も同じように感じたのだろうか。珍しく少し顔が青く感じる。

伊吹『彼女たちと出会って、今まで聞いてきたこの耳です。』

だが、しかし。伊吹は花咲先生の威圧に屈することなく、正々堂々と答えを出した。

「……………」

伊吹『……………』

それから伊吹と花咲先生は言葉を発することなく互いの目と目を見つめ合う。この2人が一体、どんな感情を抱いているのか全く分からなかった。

「君は……良い家族に出会ったんだね」

ふっ、と花咲先生はそう言い、まるでさっきの表情が嘘みたいに笑った。

「2人も意地悪な反応してごめんねー。君たちの覚悟がどんなものなのか試したくて。でも、ダメだよー。こんなので臆してるようじゃ。世界には色んなスクールアイドルがいるんだぜ☆」

うえいうえい、と私の脇を両指でつつきながら花咲先生は声を掛ける。いや、あ

んなとんでもない威圧を出すスクールアイドルなんていてたまるかっつーの!!

ちよっかいをかけてくる先生に対して私が辞めるように反論している中で姉様は険しい顔をしながら考えるような仕草をしていた。

聖良「……………」

理亞「ね、姉様？大丈夫？」

聖良「え、……ええ。私のヒードランのモノマネに対して氷タイプにしかみえないお前にとって4倍弱点じゃねえか!!ふざけるな!!っていう話ですわね」

理亞「いや、全然違うけど。え、なに。誰かにそれ言われた？」

こうして、私たち、Saint Snowのファーストライブはロックをテーマに作詞作曲、ダンスを考える方向性に決まった。

これから2週間……とても忙しくなるな。けど、伊吹の為に頑張らなくちゃ。

聖良（あの威圧……どっかで見覚えが……。）

番外編

S a i n t S n o w、特撮デビューするってよ。

番外編です。

最近の仮面ライダーゼロワン面白いですよね♪

時間軸は既に高校生になっていて、S a i n t S n o wを結成し、東京のイベントのあととなっています。

よろしく願います。

理亞「おはよう………姉様、伊吹」

聖良「おはようございます」

伊吹『おはよう。』

ある日の日曜日の朝、私はウトウトとし、目を擦りながらリビングへ向かうと姉

様と伊吹が先に朝食を食べていた。

聖良「いくら休日でも、少し起きるのが遅いですよ、理亞。せっかく作った朝ご飯が冷めてしまいました……………」

姉様が可愛らしくプリンプリンとさせながら、私に注意し、恐らく冷めてしまったであろう、姉様手作り朝ご飯（目玉焼きwithたこさんウィンナー）を手にとって電子レンジへと入れる。

理亞「ごめんなさい、姉様。」

起きるのが遅くなった理由は、夜遅くまで新曲の振付を練習していたからだ。

姉様と伊吹（マネージャー）の3人で結成したスクールアイドル、Saint Snowが本格的に活動し始めて早数ヶ月が経過した。

ありがたいことに、徐々に私達のことを認知されるようになり、最近では東京のイベントにも招待して貰えるようになるまでにはなった。

しかし、その東京のイベントでは結果は9位で入賞を逃すことになってしまった。それ故に、私は悔しくて、つい浦の星女学院のスクールアイドルのメンバーに強く当たってしまった。それが理由で、伊吹と喧嘩してしまったのも今となっては

いい思い出だ。

しかし、本当に悔しかったのも事実。私が、もう少し立派にしていれば、もっと上に立てたかもしれない。姉様や伊吹は気にしないで、と励ますように言ってくれるが、私の気持ち晴れることは無かった。

だからこそ、今度、配信予定の新曲は前以上に完璧なものへと仕上げたかった。その想いが大きすぎたせいか、昨晩は寝れなくなって………夜遅くまで、庭で練習した結果がこのザマ。情けないわね、私。

聖良「次回からは気を付けるように。はい、朝ご飯ですよ」

姉様は温め直してくれた朝ご飯を私の目の前にコトンと置いてくれた。

理亞「ありがと、姉様。」

私はそう言って、朝ご飯に手をつける。うん、やっぱり姉様の朝ご飯は美味しい。聖良「あ、そろそろ時間ですね。伊吹、リモコンを!!」

伊吹『……………』
『コクリ』

壁に設置されている時計を見て、姉様は嬉しそうに伊吹に言葉をかける。伊吹はコクリと頷いたあとに、手前に置いてあったリモコンを手にとってテレビをつける。

最近、私達の中でハマっているものがある。それは……………

『仮面ライダーゼロワン、このあとすぐ!!』

聖良「きました!! 楽しみですですね。」

伊吹『……………』*ウウウ*

そう、特撮番組の1つである仮面ライダーである。

伊吹が元々、特撮番組が大好きだったことは3年前から発覚していたが、その後、すぐに姉様にバレることになった。

本来ならば、基本的には中学生にもなって未だに仮面ライダーに好きとなれば少し痛い目で見られるけれど……………

聖良『伊吹が好きな物は是非とも共有したいです!! 理亞、私達も見てみましょう!!』

相変わらず、頭の中がお花畑である姉様はそう言ったあと、すぐにTSUOAY Aで平成仮面ライダーシリーズ(クウガ)のDVDを全巻借りてきて、無理やり

私を隣に置いて見せられた。

その結果、どうなったか……………。

はい、見事に私達も仮面ライダーにハマりました。俗に言う大きなお友達……………
というやつかしら。

今まで、批判的だった私ですら、ハマってしまった。悔しいけれど……………、シナリオが面白いのよね。

ちびっ子が見る番組だから、それに沿ってるのかなって思ってたけど、実際はそうでも無かった。なんなのよ、あれ。何で、人を救うヒーローが殺し合いなんてしてんのよ。何で、最終話で親友と戦わなきゃいけないのよ。何で、変身する度に自分の存在を忘れられるのよ。何で、何で、何で。

もう……………、色々と衝撃を受けた。改めて、脚本家は凄いと、脚本家を持っ
て学んだ。

あと、姉様に至っては、仮面ライダーにハマりすぎて伊吹と同じく玩具に手を出
すようになった。

DXから食玩、ガシャポン、更にCSMやプレバン限定といった玩具をココ最近

は購入するようになった。

そのお陰で、姉様の部屋は仮面ライダーの玩具で埋め尽くされている。両親は姉様のお金で買ってるから、という理由で特に何も口に出すことは無いけど、それでも苦笑いはする。

ほら、姉様は今でも楽しそうにしながら腰に現在、放送されている仮面ライダーのベルトを装着して、番組が始まるのを待っている。………高校3年生だよね？姉様。『Jumping♪』とか、笑顔で鳴らさなくていいから。

そして、時間になり、OPが始まると………

聖良「♪ゼロワン、ゼロワン、ゼロワン、ゼロワン、ゼロワン………広大なアイカイク、アクセスして〜♪」

姉様は楽しそうにOPの歌詞を歌い始める。これも、いつもの事だ。姉様の歌唱力とはとんでもないから、聞いてて、こっちが原曲なのでは??と思ってしまう。

その後、OPが終わり本編が始まるのであった。



聖良「いやあ、今回の話もとても面白かったですね。」

伊吹『……………』ウウウウ

理亞「……………そうね。」

本編が終わったあと、私たちは伊吹が淹れてくれたお茶を飲みながら、今回の話の感想を述べ合う。

今回の話も面白かった。個人的には不破さん推し。カッコイイし、面白い。

聖良「あ」

15分ぐらい感想を述べ合ったあと、姉様は何か思い出したかのように衝撃の言葉をサラッと呟いた。

聖良「あ、今度の日曜日、私たち、ゼロワンに出演することが決まったので、予定空けといてくださいね。」

突に、仮面ライダーに出演するから予定を空けて、と言われても困惑するだけだ。

聖良「え、だってサプライズにした方がいいかなって。」

サプライズの限度が遥かに高いよ、姉様!! ドッキリメインの番組でもそんなことはしないよ!!

聖良「ほ、ほら。♪ Surprise、世界中が Drive♪……………ってね。」
ってね。じゃない!! 唐突にドライブのOPのサビを歌わないで!!

伊吹『……………』ツギツギ

ほらあ、あれを見てよ、姉様。伊吹なんか驚きすぎて、真顔で激しいスクワットし始めちゃったよ。

聖良「スクワットしたいほど、嬉しかったんですね。」

いや、違うから。あれは嬉しさよりも、どっちかと言うと困惑ゆえの行動だから。歓喜の感情なんて多分、一切ないわよ、あれは。

聖良「まあ、詳しくはこの予定表。……………、あ、台本もついでに渡しておきますね。」

理亞「台本!? なんですか!?!」

姉様は2枚の神と少し分厚い冊子2冊を取り出して、私たちの前に置く。冊子を見てみると、『仮面ライダーゼロワン〇話台本』と書かれていた。

聖良「何言ってるんですか。そりゃあ、出演するんですから、台本あるに決まってるでしょう。」

理亞「確かに……そうだけど。てか、マジな話だったのね。」

聖良「はい、当然、嘘じゃありませんよ。今度の撮影は函館で行われるみたいなんです。」

私は台本を手にして、とりあえずパラパラとページをめくる。

まあ、ある程度は予想は付いてたけど、今回、私達が出演するらしき話は今さっき放送された内容よりも少しだけ進んだ内容だから、主演やヒロインの台詞を見ても繋がりが全く分からない。

しかし、台本を読んで分かったことがある。

理亞「なるほど、この話はスクールアイドルに関しての内容なのね。」

聖良「その通りです。恐らく、それが理由でオフアが来たんだと思います。」

そう。この台本の内容はスクールアイドルが関わっている話だった。

今回の仮面ライダーは人工知能搭載型人型ロボット、『ヒューマギア』という………簡単に言えばAIがメインとなる世界観となっている。

それ故に、私達が出演する役はその『ヒューマギア』でスクールアイドルをやっている女子高校生の役だった。

姉様が言った通り、多分、それが理由でSaint Snowである私たちに声が掛かったのだろう。他の女優さんや新人さんを出演させれば良かったのに……、という気持ちもあるが、テレビ主演となれば更に私達の知名度が上がることは間違いない。ならば、この機を逃す訳にはいかない。

全力で挑むことにしよう。

理亞「それでも………こういう、役者的なことは始めてだから不安かも」

聖良「理亞なら、心配いりませんよ。ほら、中の人だって少女☆歌劇で活躍してるじゃないですか!!」

理亞「中の人とか言わないでくれる!？」

姉様、それメタ発言だからね!!

伊吹『……………』ブクブク

アンタもいい加減、スクワットやめなさい!!



という訳で、遂に撮影日がやってきました。

今はメイクさん達に化粧やら髪型をセットして貰っている。

今回は悪魔で番組内のスクールアイドルの設定のため、普段、私達がやっているような髪型やメイク、服装ではない。

いつもはツインテールにしている私はポニーテール、そしていつもはサイドテールにしている姉様は三つ編みだった。

聖良「ポニーテールの理亞、とっても可愛いですよ。」
理亞「姉様だって、素敵だわ。」

メイクが終了し、近くに置いてある椅子に腰を下ろした私たちは向かい合って褒め合う。いや、だって三つ編みの姉様、めちゃくちゃ可愛いんだもん。スマホのホーム画面にしたい……………。

「鹿角聖良さん。少しいいですか??」

聖良「はい、大丈夫です。理亞、スタッフさんに呼ばれたので席外しますね。」

理亞「分かった」

スタッフに呼ばれて、姉様は楽屋から出ていく。その間、私は改めて台本を読むことにした。

この話の内容をざっくりと説明するならば……

私達がやるスクールアイドルのライブを見に、主人公や各メインキャラクターが函館へと遊びにやって来る。

しかし、そのライブではあまり上手くいかず、私と姉様の関係が悪化(番組内の話ね。)し、ギクシヤクする。

その時、敵である滅亡迅雷・netという敵キャラが現れ、標的にされた姉様は暴走してしまう。

暴走した姉様を主人公達が倒し、その後和解した私達は再びライブを行って大成功する……っていう感じだ。

あれ??伊吹は??と思う人がいるかもしれないけど、あいつは一応、通行人とし

て出演する。まあ、声が出せないから当然な話か。

本人は、番組に出演することができるだけで、満足しているから別に心配する必要はないけれども。

「鹿角理亞さん。そろそろ、時間ですので撮影場所に向かってください」

理亞「分かりました。」

声がかかり、私も楽屋から出ていく。

緊張するけど………、これもSaint Snowのため。頑張ろう。



「はい、OKです。これで、今日の撮影は終了です。ありがとうございます。」

「「ありがとうございます!!」」

監督さんの言葉で、撮影が終了したことを告げられる。

早朝からずっと撮影を行い、日が暮れる直前までぶっ通しでやっていたから、体力に自信がある私ですら疲労が溜まっていた。

本当に疲れた。今なら、横になったらすぐに寝れる気がする。

聖良「お疲れ様でした、理亞」

ぐてーってなっていると、腰に暴走する敵のベルトを装着した姉様が私に声をかける。見た感じ、疲れてなさそうに見えるんだけど……。私以上に台詞を言ったり、動いたりしてはるはずなんだけど。

理亞「お疲れ様、姉様。」

聖良「伊吹は??」

理亞「役者さん達にサイン貰いに行ってる。ほら」

私が指をさした方向には、大量の色紙とペンを持った伊吹が役者さん達にサインをお願いしていた。その時の伊吹の表情は本当に嬉しそうで、あまり見れない顔だ。あんなの、学校の子達が見たら発狂するでしょうね。いい意味で。

聖良「伊吹らしいですね。私も後ほど、お願いすることにします。」

理亞「あ、姉様も貰うのね」

聖良「当たり前じゃないですか。お店に飾ったら映えそうですしね♪」

理亞「あ、そう……。」。

姉様って、たまに商売魂みたいなものがあるわよね。流石は将来、店を継ぐ気で

いることはある。私も頑張らなくちゃ。

伊吹『……………』*ウウウ*

姉様と会話していると、まるで夢が叶った少年のような顔つきで大量の色紙を抱えた伊吹が戻ってきた。

それに合わせて、今度は姉様が色紙と玩具を持って役者さん達の方へと向かった。伊吹ですら色紙だけだったのに……………。玩具までサイン求めるとか、どんだけファンなのよ。

伊吹『理亞ちゃん、お疲れ様』

理亞「お疲れ。アンタも頑張ってたわね」

伊吹『言うても、走っただけけどね。画面に映るかどうかも分からないよ』

通行人役だった伊吹は、撮影時、暴走した姉様から逃げるように走っていた。ただ、それは伊吹だけでなく、他のエキストラの役者さん達もいるのでその場面が放送されるかどうかは分からないという。

理亞「そっか……………」

画面に映っている伊吹を少しは見たいと思っていた私は少しだけ寂しい気持ちと

なる。

伊吹『けど……、楽しかった。憧れの作品にまさか出られるなんて思ってもいなかったから。これも、理亞ちゃん達と会えたおかげだね』

理亞「ツツ……………」

どうして、こいつは。そんなことを平然と言うのよ。恥ずかしくなるじゃない。それに、その笑顔は反則だ。普段はそんな顔しない癖に……………。そんなの、見せられたら私は……………

ますますアンタの事が……………

理亞「……………き」キーン

伊吹『ん??何か言った??』

理亞「……………何も言っていないわよ、ばーか!!!」

こうして、奇跡に等しいSaint Snowが仮面ライダーに出演するという夢のような出来事は終了を告げた。

この後、私達が出演した内容が放送されたのだが、スクールアイドル内の順位が爆上げし、認知度が予想以上に上がった。それに、何故かテレビ番組の主演オファーも多くなった。まあ、これから忙しくなるから姉様と話し合っ受けないことになったけれども。

あと、最後に伊吹が全力ダッシュして逃げるシーンがドアップで映っていたので、私は姉様や伊吹に内緒で、その場面だけを切り取ってスマホに保存しておいた。

それを見て、ニヤニヤしてる私を見た姉様はその姿をカメラに収めてSNSに投稿しようとしていたので、私は全力でそれを阻止した。

面白いと思ったら、お気に入り・感想・高評価お待ちしております

S a i n t S n o wと無口の居候。

著者 七宮 梅雨

発行日 2024 年 1 月 21 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/204627/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
